

福岡市博多区

席田遺跡群

(VI)

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第218集

1990

福岡市教育委員会

福岡市博多区

席田遺跡群

大谷遺跡2・3次
新立表古墳2・3号墳
高宮八幡宮所蔵鋳型の調査報告



1990

福岡市教育委員会

序

福岡市は平成元年に市制百周年を迎え、「海に開かれた活力あるアジアの拠点都市」として「緑豊かな都市」作りを進めています。

福岡国際空港の東に隣接する月隈丘陵は、終戦後長く米軍の弾薬庫として使用されていましたが、1972年に返還され、その後福岡市都市整備局によって「東平尾運動公園」の建設が進められてきました。

福岡市教育委員会では公園建設工事に先だって埋蔵文化財の分布調査を行い、できるだけ自然の中に遺跡が残され、かつ広く市民の方々に活用される事を願い計画段階から協議を重ねてきました。

しかし、やむなく工事によって遺跡が破壊される場合に限って発掘調査を実施し、これまでに11次の発掘調査を行いました。

今回報告するのは第10・11次調査の大谷遺跡と新立表古墳の2つの遺跡です。

新立表古墳は、当初、公園の工事範囲から外され保存されていたのですが、来年度に開催される国民体育大会「とびうめ国体」の陸上競技場建設のために地滑りが起こり、残念ながら土木技術上復旧が困難と言うことで記録保存をせざるを得なくなりました。

また、高宮八幡宮にご神体として長く所蔵されてきた青銅器鑄型を志賀宮司さんをはじめとして地元の方々のご理解を得て調査することができましたので、合わせてその報告をすることになりました。

発掘調査から本書の発行に至るまでは、多くの方々のご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

願わくば本書が埋蔵文化財に対する理解と認識を深める一助になり、また地域史研究の資料として広く活用していただければ幸いです。

平成2年3月

福岡市教育委員会

教育長 佐藤 善郎

福岡市博多区 席田遺跡群

大谷遺跡

2・3次調査

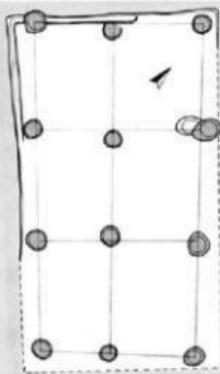


丸尾展望台上空より

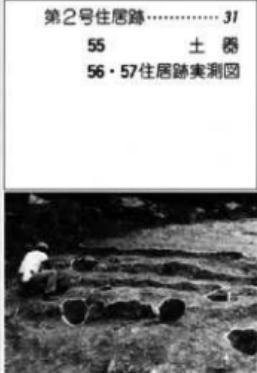
遺跡名	大谷遺跡 2・3次	調査番号	8402 8515	遺跡略号	OTN-2・3
所在地	博多区東平尾字大谷 外	開発面積	2,400m ²	調査対象面積	2,000m ²
開工事 者名	福岡市 道路切り替え工事	発堀面積	1,600m ²	調査期間	1984.11/15~12/2 1985.1/16~6/1

<p>第1章 はじめに</p> <p>ページ 1 発掘調査に至るまで… 1 2 発掘調査の組織と構成… 1 3 周辺の遺跡…………… 2</p>		<p>挿図</p> <p>1 作業員の皆さん 2～14 周辺の道路と遺物 4 周辺の遺跡分布図 8 席田遺跡群</p>
<p>第2章 発掘調査の記録</p> <p>1 発掘調査の概要…………… 6 2 1次調査の概要…………… 8</p>	<p>15・16 作業風景 17 完成した道路 18 周辺の地形と字図 19～23 1次調査の様子</p>	
<p>3 2・3次調査の経過…11 A区の調査…………… 12 24～27 A区の位置</p>		
<p>遺物包含層…………… 15 上 層…………… 15 中 層…………… 18 下 層…………… 20 3～5号トレンチ…23 その他…………… 23</p>		
<p>上 層 28～34 30・31 土 器 32 石器、玉類 33・34 鉄 器</p>	<p>中 層 35～37 35 土 器 36・37 石器、鉄器</p>	<p>下 層 38・39 40 3～5号トレンチの土器 41・42 A区の土器 A区の土器 43・44 A区の鉄器 45・46 A区の玉類、石器 47・48 A区の青銅器</p>

遺構 27
第1号住居跡 27
51 住居跡実測図
52~54 土器、鉄器



第2号住居跡 31
55 土器
56・57 住居跡実測図



D区の調査 34
遺構 36
10号住居跡 36
11号住居跡 36

61 D区の遺物
62・63 D区の遺構
64・65 住居跡実測図
66~69 鉄器、土器、石器



第3章 おわりに 39



凡例と要約

1. 本編は福岡市博多区東平尾にある席田（むしろだ）遺跡群の大谷（おおたに）遺跡の発掘調査報告である。
2. 席田遺跡群は、「東平尾運動公園」の敷地内に存在する遺跡の総称である。これまで公園の整備工事に先立って1975年より発掘調査を実施してきた。年度ごとに調査次数をつけ、同じ遺跡を発掘する場合はその遺跡ごとに次数をつけている。
3. 大谷遺跡は、1976年に公園の遊歩道路工事にともなって発掘（席田遺跡群第2次調査）が行われ、弥生時代後期の竪穴住居跡や土壙などが検出（大谷遺跡1次調査）されている。今回報告するのは道路の切り替え工事によるもので、席田遺跡群では10・11次、大谷遺跡では2・3次調査に当たる。
4. 大谷遺跡2次調査は、1984年11月15日から発掘作業に着手したが、現状保存されていた新立表2号墳の調査を急きょせざるをえなくなり、同年12月28日から翌年3月15日まで一時中断することにした。
5. 大谷遺跡3次調査は、翌年の1985年3月16日より再開し6月1日に終了した。延べ41日の調査期間であった。調査番号は2次調査の8402に統一している。
6. 2・3次の調査では、1次調査と同じ尾根のD区で弥生時代後期の切り合った竪穴住居跡2軒が検出された。2軒の竪穴住居跡は残りが悪く大きさが明かでないが、長方形プラン4.5×6.2mの規模が想定される。
7. A区と呼んだ別の尾根では、斜面に弥生時代中期後半から後期にかけての厚い遺物包含層がある。この包含層からは、土器、石器、鐵器など多くの遺物が出土し、特に鐵器が多いのが目についた。また、破片であるが中国製青銅鏡が発見され注目された。包含層はこれらの遺物から弥生時代中期後半から後期にかけて形成されたと考えられる。
8. この包含層の途中に竪穴構造の建物1棟が検出された。この建物は7.7×4.6mの長方形プランで12本の柱があり一般的な住居跡とは異なる構造である。土器、石器の他に鐵族が出土した。この建物の時期は、弥生時代後期初頭前後ころと考えられる。
9. A区の南端では、竪穴住居跡の壁溝と外部の排水施設と思われる細い溝が見つかった。席田遺跡群では、同じような発掘例があることから、これも住居跡と判断した。
10. 今回の調査面積は、限定された狭い範囲ではあったが、4軒の竪穴住居跡を追加することができ、これで合計14軒となった。これまで席田遺跡群では一つの集落として把握できる遺跡はなかったが、丘陵に展開した集落のようすを知ることができるようになった。その規模も予想以上に広範囲におよんでいることがわかった。
- 特に青銅鏡の破片や鐵器などは、この地域の遺跡の性格を如実に表す資料であろう。
11. 本編は大庭康時と力武卓治が協議、分担して編集、作成したが、石器の実測は田中克子さん（福岡市埋蔵文化財課調査員）に、また青銅鏡の記述は田崎博之氏（福岡市埋蔵文化財センター調査員）にお願いした。
12. 発掘調査によって得られたすべての資料は、福岡市埋蔵文化財センターに本収蔵の予定である。広く活用されることを願っている。

第1章 はじめに

1. 発掘調査に至るまで

東平尾運動公園は、現在も整備中であるが、展望台、自由広場、遊歩道、野球場、陸上競技場、テニスコート、フィールドアスレチックなどの施設がすでに完成し、子供たちに人気のある公園となっている。一方公園西側の福岡国際空港へ通じる県道は、国際・国内線航空機の増便に比例して交通渋滞が激しくなり、公園内の道路を裏道として利用する車両が増え、交通事故が起こりやすくなっている。このために公園の整備と並んで、駐車場や道路などの建設整備も必要となってきた。

特に今回発掘調査することになった大谷遺跡の道路は、高低差が大きく、しかも急カーブで三叉路になっているためにきわめて危険な場所となっていた。この道路は席田中学校の通学路にも使用されており、以前から拡幅と直線化のための切り替え計画が立てられていた。

しかし、この地域は席田遺跡群内でも最も遺跡の集中している所で、埋蔵文化財の存在は当然予想された。このため1982年の夏よりトレンチによる試掘を重ね、道路の切り替え位置を慎重に検討してきた。結局、すでに遺跡公園として整備されることが決定していた西の赤穂ノ浦遺跡側を避け、大谷遺跡に寄せて道路が造られることになったが、結果的には大谷遺跡の一部を壊してしまうことになった。

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託 福岡市都市計画局公園建設課

調査主体 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課

柳田純孝、松延好文（事務担当）、力武卓治、大庭康時（調査担当）

調査作業員 大部茂久、権藤利雄、山崎光一、三浦力、曾根崎昭子、吉原満義、吉原京子、桑野正子、井手口美代子、黒木静子、江越初代、間政子、古賀博子、村崎祐子、尾崎文枝、徳永道子、石本ミスエ、野口ミヨ、長野康子、高野皓代、関加代子、梶原三治、梶原チヨノ、中垣義、岡本正枝

整理作業員 村田喜代美、松田美富、

田中克子、池田由美、

衛藤美奈子



1 作業員の皆さん（A区1号住居跡の柱穴の位置を示す）

3. 席田遺跡群の位置と周辺の遺跡

月隈丘陵は大城山（標高410m）より派生して北に伸びる。この丘陵の西側には那珂川と三笠川によって形成された福岡平野が広がっている。

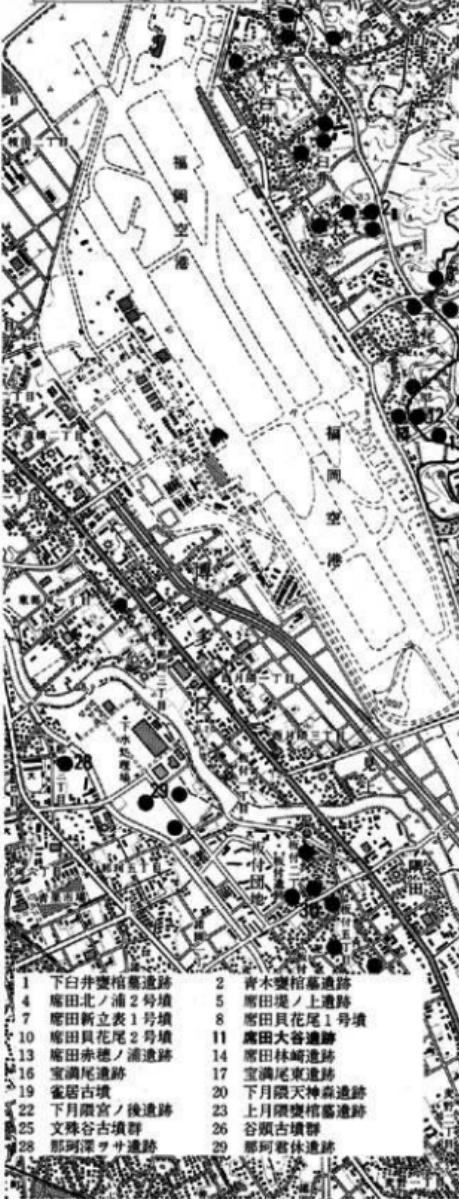
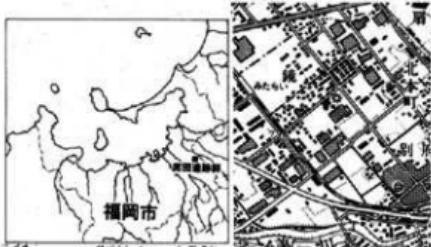
三笠川右岸の平野部には、福岡国際空港が位置しているためにこれまでの発掘調査例はない。一方左岸は「弥生銀座」と呼ばれるように重要な遺跡が多く分布している。なかでも初期水稻耕作のムラとして有名な板付遺跡は、最近の発掘調査で二重の溝が巡っていたと発表され注目を集めている。



2 木製鋤と現代のスッコブ（那珂久平遺跡）



3 溝で囲まれた弥生時代のムラ（板付遺跡）
(前方は福岡国際空港と月隈丘陵)





4 周辺の遺跡（縮尺1/25,000）



5 弥生時代のムラの中の掘立柱建物跡（久保園遺跡）



6 下月隈天神森古墳と耳飾り



7 空から見た月隈丘陵



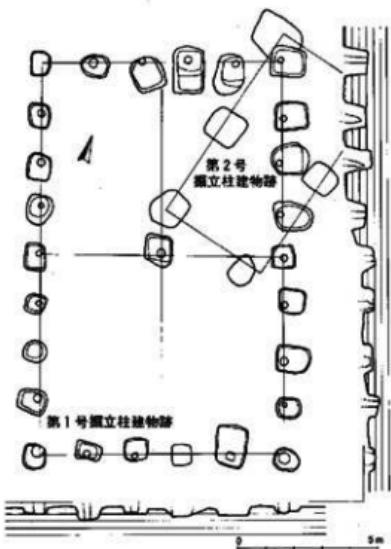
9 副葬されていた鏡（宝満尾遺跡）



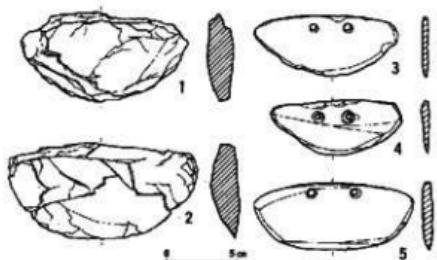
10 鹿の文様がある銅鐸鉢型（赤穂ノ浦遺跡）



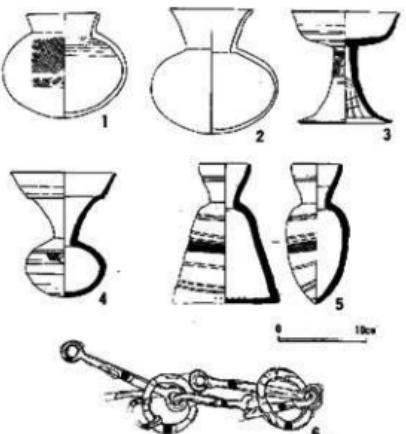
11 南海から運ばれてきた貝輪（金額遺跡）



12 弥生時代の大型掘立柱建物跡（久保間遺跡）



13 石丁の未製品と完成品（中尾遺跡）



14 古墳に副葬された須恵器と馬具（丸尾古墳）



第2章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の概要

月限丘陵は東西の平野部に向かって小さな舌状の丘陵がいくつも派生しており、これらの丘陵の尾根や南斜面には多くの遺跡が含まれている。

公園内で最も標高の高い丸尾展望台付近からも西の福岡平野側に二つの丘陵が伸びている。西南西に派生した丘陵の先端には、席田中学校建設に先だって調査された宝満尾（ほうまんお）遺跡がある。壺棺墓6基と土壙墓11基などからなる弥生時代中期後半から後期前半にかけての共同墓地が発見され、石蓋土壙墓には漢式鏡が副葬されていた。

狭い谷を隔てて、西北西の東平尾の集落方向に伸びたもう一つの丘陵にも重要な遺跡が多い。丘陵の先端には土取りの際に多くの壺棺墓が出たと伝えられている林崎遺跡や5間×8間という大型の掘立柱建物跡が検出された久保園（くほぞの）遺跡がある。また谷に面した南斜面には銅鐸鑄型出土で注目された春穂ノ浦（あかほのうら）遺跡が位置している。

さらに丘陵の分岐付近には9軒の竪穴住居跡などが検出調査された大谷遺跡がある。このように公園内では遺跡密度のきわめて濃い地域のために、道路切り替え位置についてはできるだけ遺跡を破壊しないことを前提にして、公園建設課と協議を積み重ね、今回の路線が決定した。



15 A区の作業風景（包含層の掘り下げ。）



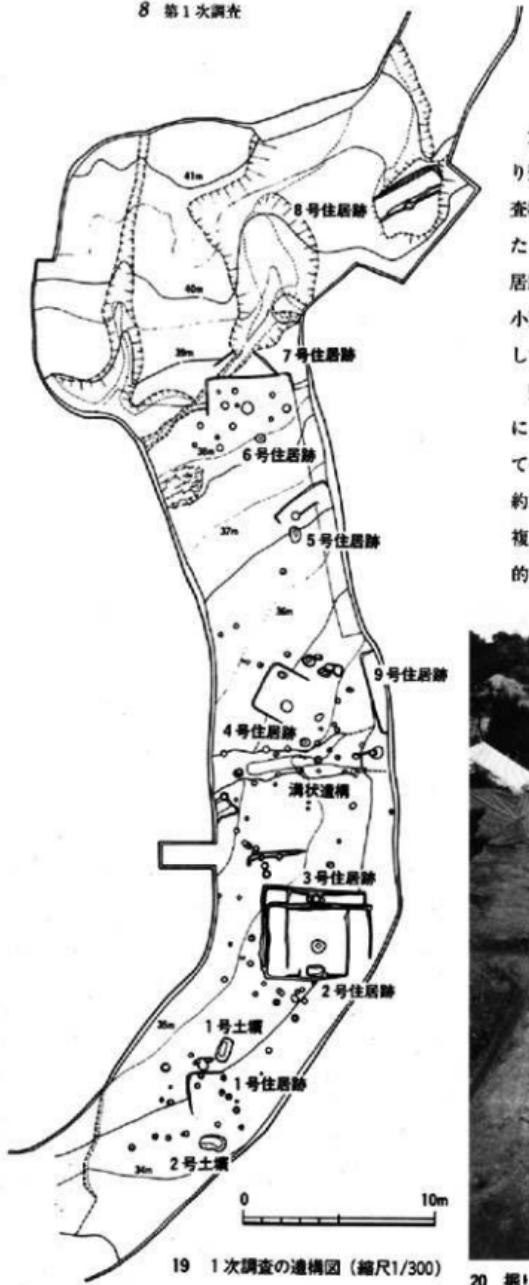
16 D区の作業風景（遺構の検出）



17 完成した道路（切り通しになった大谷遺跡）



18.周辺の地形と字図(縮尺1/5,000)



2. 第1次調査の概要

大谷遺跡の1次調査は、1976年10月15日より翌年の1月24日までの期間で行われた。調査概報によると調査面積は1600m²で表に示したような遺構が確認されている。特に2号住居跡は両短壁側にベットをもち、壁溝内から小型鉄斧、住居跡覆土から青銅製動先が出土している。

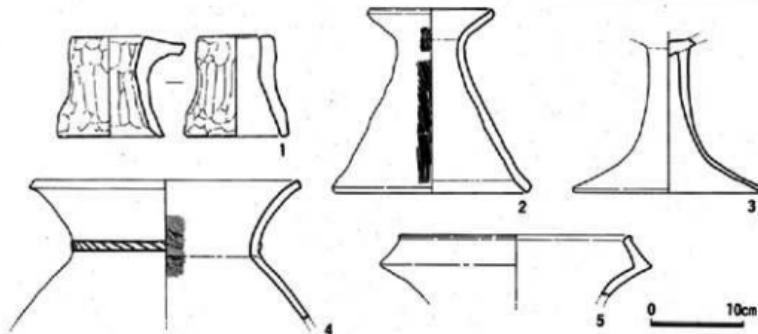
堅穴住居跡や溝などの遺構とともになう遺物によって、弥生時代後期前半から後半にかけての時期が考えられている。この時期は、南約200mに隣接している宝満尾遺跡と一部重複していることから生活跡と墓地という直接的な関連で理解出来ると報告されている。



20 掘り出された尾根のムラ（南西より）
(手前の切り合った住居跡は、第2・3号住居)

21 遺構一覧表

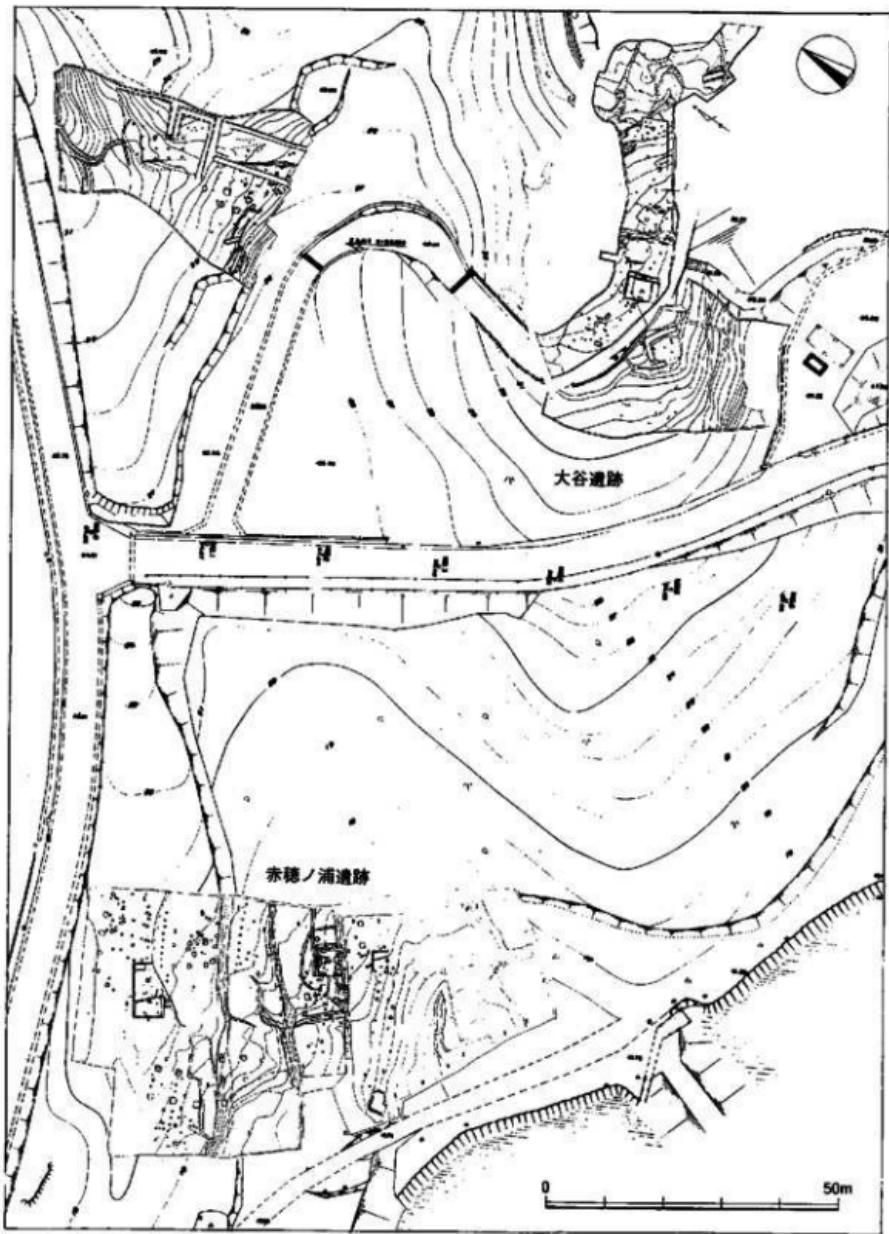
遺構名	プラン	計画(m)現存値	埋高(深さcm)	ベッド	備考
1号住居跡	方形?	短軸2.0?×長軸2.3?	17cm		北側コーナーのみ残存
2号住居跡	長方形	4.2 × 5.6	55cm	東、西壁 ベッド	3号住居跡を2号住居跡が切る
3号住居跡	長方形	4.7 × 5.4	30cm	西壁にベッド	2号住居跡の覆土より、青銅器鑿先、溝より鍛斧出土
4号住居跡	長方形	2.7 × 2.2?	10cm		南側をカットされる 南側寄りに炉、壁下に沿い炭化物
5号住居跡	長方形	3.2? × 1.3?	24cm	北側壁ベッド	西側をカットされる
6号住居跡	長方形	4.6 × 2.3?	30cm		西側をカットされる。炉は真中寄り
7号住居跡	長方形	2.0? × 2.3?	19cm		7号が6号を切る。北側のコーナーのみ残存
8号住居跡A	長方形	4.0? × 2.9?		北東壁にベッド	真中に炉、遺物少なし
B		3.2? × 2.9?	38.3cm		A号がB号より新しい
9号住居跡	長方形	4.3 × 1.0?	31cm		一部分のみ調査
10号住居跡	腰方形	2.9? × 1.2?	38cm		11号住居跡に切られる
11号住居跡	長方形	6.2 × 3.9?	22.7cm	北、南、西壁にベッド	鉄鏃出土



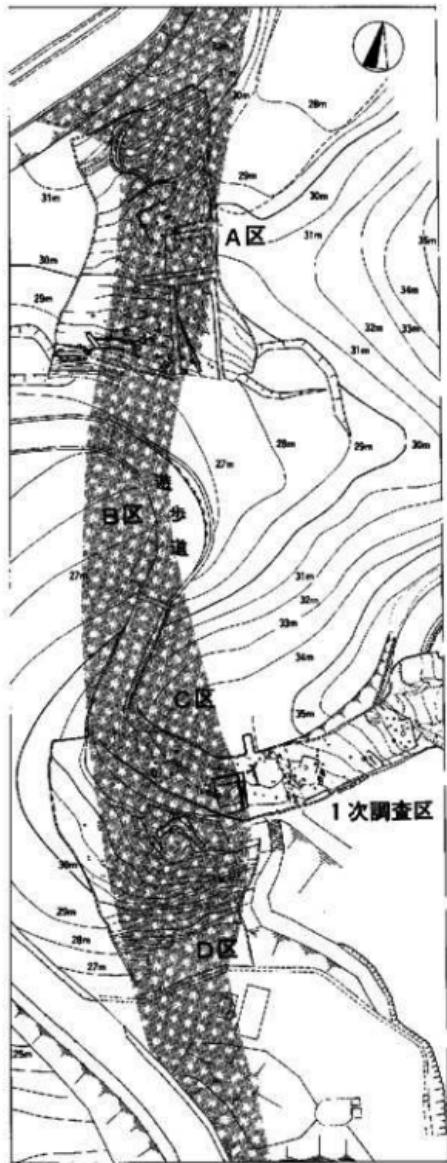
22 2号住居跡の土器 (縮尺1/6)



23 空から見た大谷遺跡 (南東より)



24 赤穂ノ浦遺跡と大谷遺跡（縮尺1/1,000）



25 道路工事で破壊された範囲（縮尺1/750）
 （アミ部が切り替えた道路の範囲）

3. 2・3次調査の経過

調査のきっかけとなったこれまでの道路は、米軍から返還後に席田中学校から東平尾の集落をつなぐ目的で造られたもので、けっして今日の交通量が予想されていたわけではない。そこで今回の路線変更と拡幅工事となったわけであるが、その計画は左図のように全長約150m、幅約20mで大谷遺跡の尾根を切断する。

しかも道路面を平坦にするために法面が両側に大きく取られている。調査対象地は、すでに遊歩道や植栽も完了し公園として利用されていた。このため遊歩道は閉鎖する事は出来ないなどの制約があり、発掘作業にはいろいろと問題が多かった。たとえば安全対策も発掘作業員ばかりではなく、公園利用者に対して十分に考慮しなければならなかった。

作業は1985年11月15日に雑木の伐採から着手した。

ところがまったく予定外であった新立表古墳の調査が急に飛び込み、またその後も西区吉武遺跡の応援や新年度に移行したために何度か中断し、6月10日にすべての作業を終えた。このように同じ遺跡の調査ではあるが、整理の都合上1985年度分を2次、1986年度分を3次と呼ぶことにした。

A区の調査

調査対象地は先に記したように丸尾展望台付近から派生した丘陵上にあるが、小字は、北から山ノ口、赤穂ノ浦、大谷の三つにまたがっている。地形を細かく見ると調査区の中央部には西の赤穂ノ浦遺跡から伸びてきた細い谷によって、南北に山ノ口と大谷に分けられており、別の丘陵になっている。発掘作業は、このように小字名や地形の違いを考慮して北側からA、B、C、Dの4区に分割して調査を進めた。

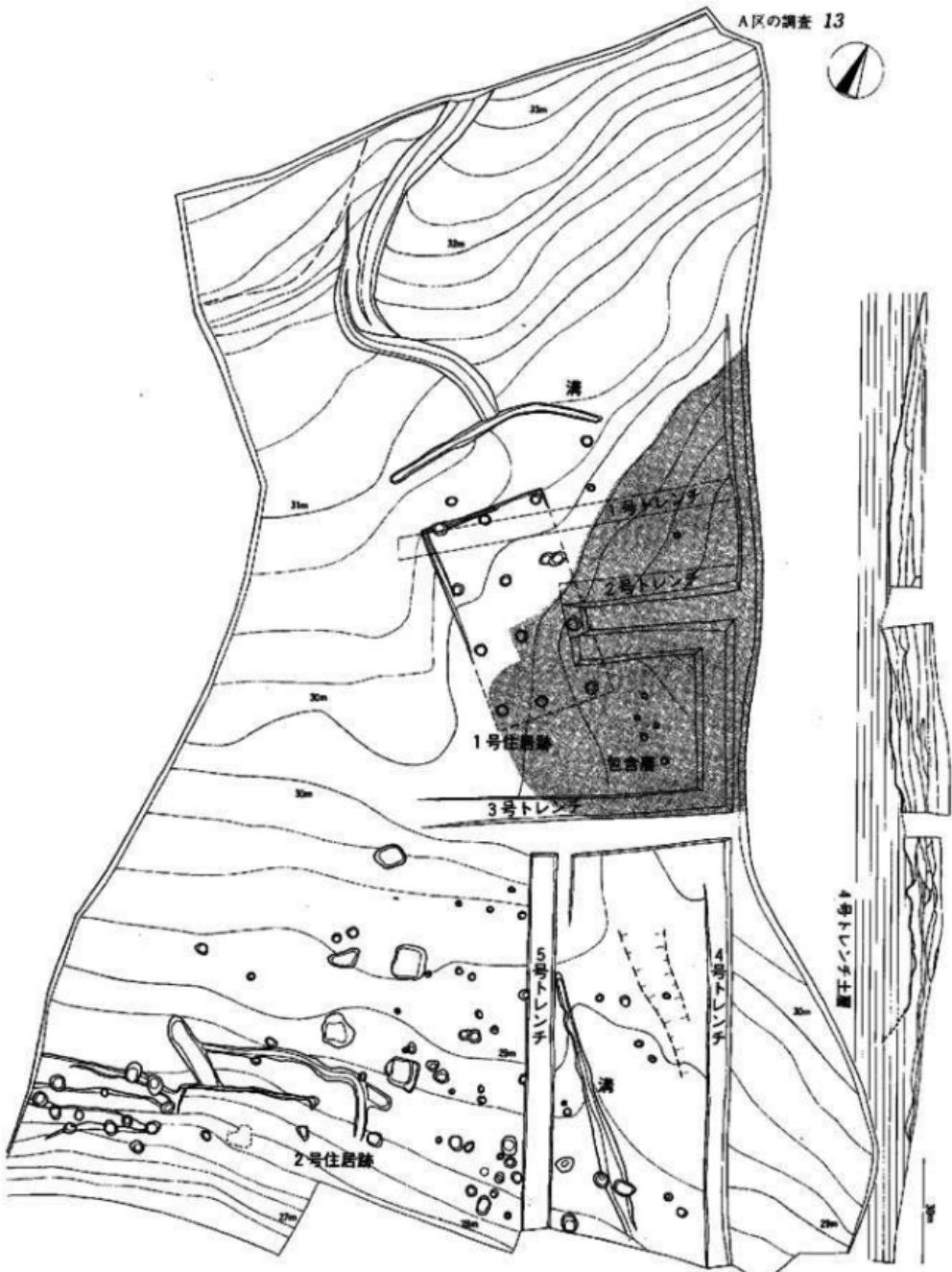
A区の丘陵北端は、現在道路で切断されているが本来は席田会館のある天王山とはつながっていたものである。さらにこの丘陵はその中程で北の小字門ノ内から小さな谷が切り込み狭くなっているが、A区はちょうどこのくびれ部に当たっている。

A区の現況は北側に最高部があり、標高33mを測る。南に緩やかに傾斜し、その端は急激に落ち谷となる。表土の下にはすぐに地山面が現れるが、中央の平坦部東側では地山面が東に入り込んでいるようであった。これは、すぐ東に小字門ノ内からの谷があり、その谷の最深部がここまで伸びてきているからと推測された。遺物の散布状況もこの部分に集中しており、遺物包含層の存在が予想されたので、まずここにトレンチを設定し、土層の観察を行うことにした。

一方遺構は、調査区の中央部から南の斜面部にかけて広がっているが、各遺構の説明の前にこの遺物包含層について記す。

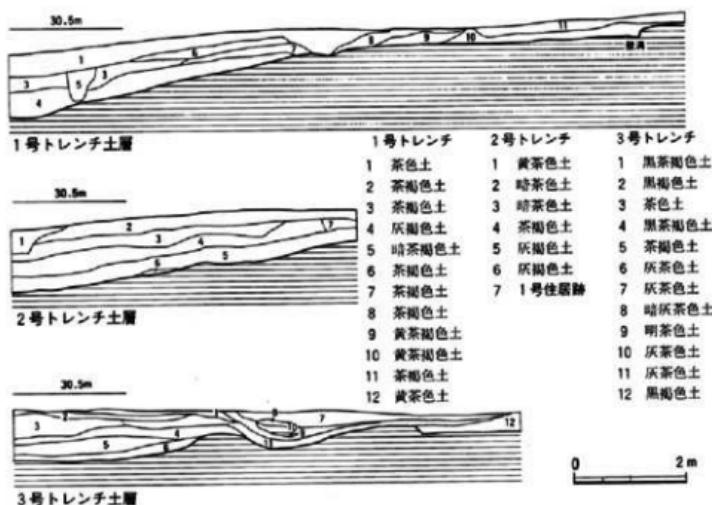


26 A区の全景（南より）



27 A区の遺構 (縮尺1/200)

0 10m



28 遺物包含層の土層 (縮尺1/100)

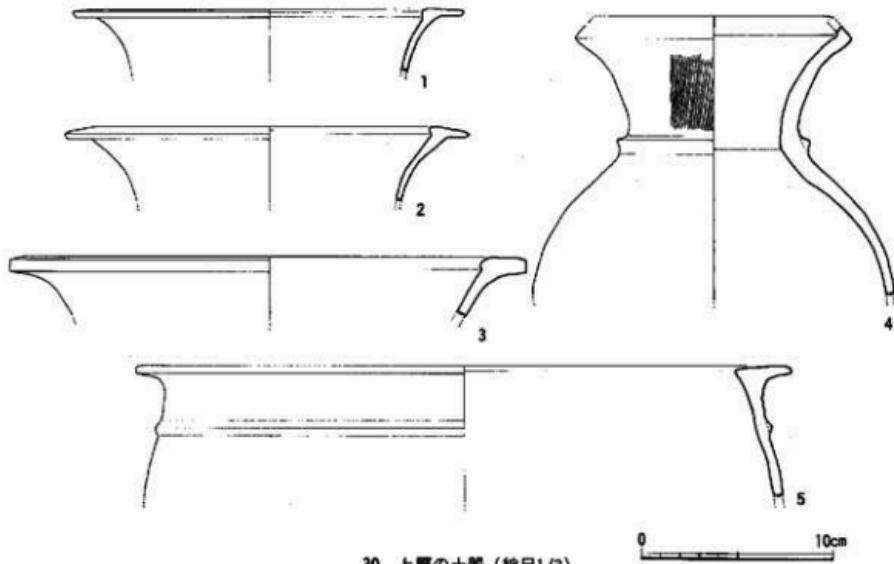


29 遺物包含層と1号住居跡（西より）

遺物包含層

A区調査範囲の長軸に対して直角に1~3号、平行に4、5号の計5本のトレンチを設定した。最初に掘り下げた1号トレンチ東端では、約1.5mの厚さで堆積していることがわかった。左図のようにこの堆積土は、土色や土粒の違いによって数枚の土層に分けられる。またまんべんなく遺物が入り込んでおり、土層によって時期が異なる可能性も十分に考えられた。このため2号と3号トレンチの間は上部より順に掘り下げ、遺物を層位ごとに区別しながら取り上げるようにこころがけた。また1号トレンチの西端では住居跡の壁溝と思われる落込みがあり、拡張しながら面的に壁溝を追った。ただ傾斜部に形成された包含層のために水平な堆積ではなく、また乱れている箇所もあり厳密に遺物を区別したとは言い切れない。そこで2、3号トレンチの間の遺物については、大まかに上、中、下層の3層に分けて記す。またこの他のトレンチ出土遺物と表採資料については別にした。

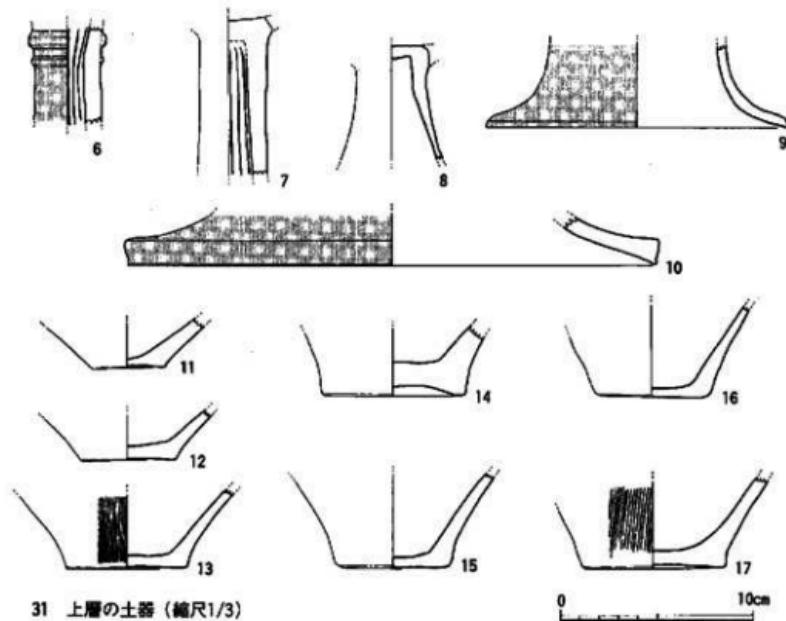
これらの出土遺物は、弥生時代のものがほとんどで、土器、石器、鉄器、青銅器、玉類などの種類があげられる。土器はこの地域の土質が原因と思われるが、保存状態がきわめて悪く、細片となり、しかも器面が剥離している。このため保存処理を施したが、調整痕を観察できるのはきわめて少なく、接合復原も困難である。しかし小破片でも可能な限り実測するようにしたが、土器の口径や傾きなど、やや正確さを欠く結果になっているのはこのためである。



30 上層の土器 (縮尺1/3)

上層の遺物

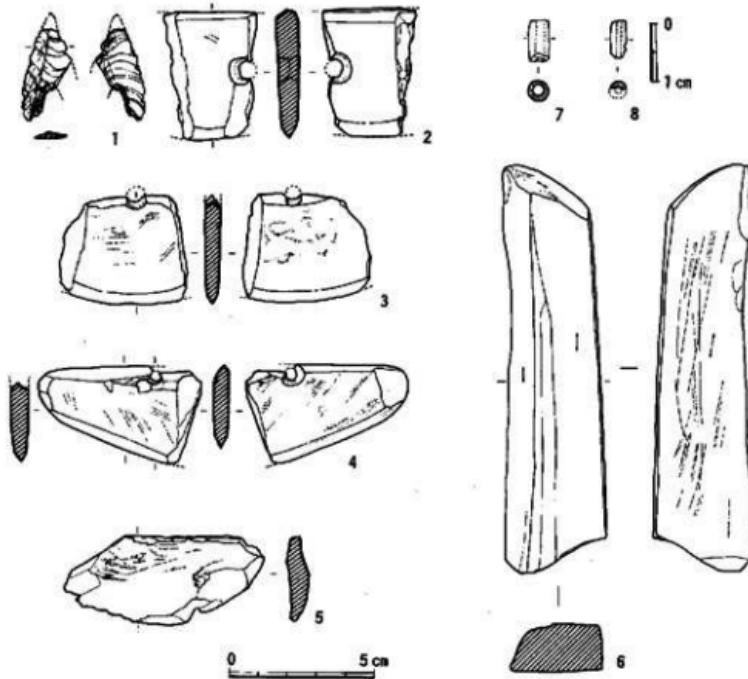
土器 固化できた17点は弥生時代中期後半から後期にかけての土器である。1～3は朝顔状に開く広口壺で、口縁部はわずかに外傾している。3点とも砂粒の少ない胎土で焼成も良好である。3の底径は35.6cmを測り、全体に分厚いつくりとなっている。4は袋状口縁を持つ壺で、いま胴下半部を欠く。外反する頸部外面には粗い継のハケ目調整が施されている。5は口径22.6cmの壺。L字形の口縁は内面への突出は小さい。内外面とも器面は完全に剥離している。6～8は高杯の脚部。いずれも杯部との接合部で離れている。6、7は精良な胎土が用いられ、6の外面は丹塗り痕がわずかに残っている。9、10は器台の脚端部。9の外面は継のミガキ後に丹塗りされている。広口壺の口縁部とも考えられるが端部のつくりや器壁の厚さなどから器台とした。10は赤茶色を呈し、胎土、焼成、調整などきわめて丁寧なつくりとなっている。また外面には丁寧な丹塗りが加えられ、36.6cmと大きい底径などから筒形器台と推測した。11～17は壺と壺の底部。11は底径5.5cm、胴部は直線的に外反する。12、13も同じように外傾するが、底径がやや大きくなる。13の外面は継のハケ目調整である。14は分厚いつくりでわずかに上げ底になっている。15、16は底部と胴部の厚さがほぼ同じという特徴がある。また胴部への立ち上がりも強い。17の底径は9.7cm、底部周縁がわずかに外に張り出す。外面は粗い継のハケ目調整。



31 上層の土器 (縮尺1/3)

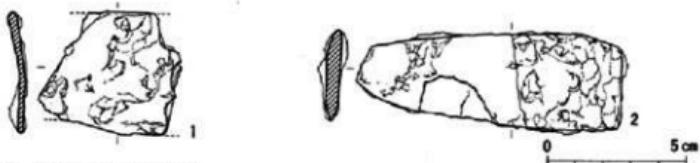
石器 1は黒曜石製の凹基式の剥片鎌である。縦長剥片を素材にしており、打面側を脚部にしている。基部の抉り部分のみに細かな加工調整が行われている。2~4は半月形の總摘具（石包丁）の破片で、外湾する刃がついている。2の石材は粘板岩。小孔の一つと背、刃部が残る。小孔は両面からの穿孔で、直径は22mmを測る。背は直線で、断面はにぶい山形をなす。3は灰白色の石材を用いている。刃部は両刃であるが、あまり鋭利ではない。4は、身の中程から折れ、また背の部分も剝離しているが、原形は11cm前後の長さになろう。直径20mmの小孔は背に片寄って穿孔されているようである。刃部は両面から砥出されているが湾曲せず直線的である。この刃部と平行する擦痕がよく残っている。また身部の研磨痕もよく観察できる。5は灰白色の頁岩質の石材である。団裏面は剝離しており、表面は一部が擦れてくぼんでいる。上端は研磨され直線になっている。原形は不明。6は粘板岩質の砥石である。断面は長方形で4面すべてが砥面に使用されている。

玉類 7、8は碧玉製の管玉。7は淡い緑白色でかなり風化を受けているようである。長さ6.9mm、直径3.35mm。孔径2.1mm。孔の中は螺旋状に穿孔されている。8は縦に割れた破片で、淡い緑色を呈する。長さ6.55mm、推定直径3mm。



32 上層の石器、玉類（縮尺1/1、1/2）

鉄器 1は現存長5.1cm、幅4.5cm、最大厚0.35cmでやや反りがある。図の上下は原形をとどめていると思われるが、左右両端は欠けており原形やその用途を知ることができない。2は鎌と推測した。全体に鏽ぶくれがはげしいが大きな欠損はない。現存長9.5cm、最大幅3.4cm、最大厚0.5cm。図の上部と先端部の断面は丸みがあり付刃されてはいないようであるが、下端部はわずかに丸みはあるものの薄いつくりで刃部と考えられる。基部になる図右端には折り返しは認められない。



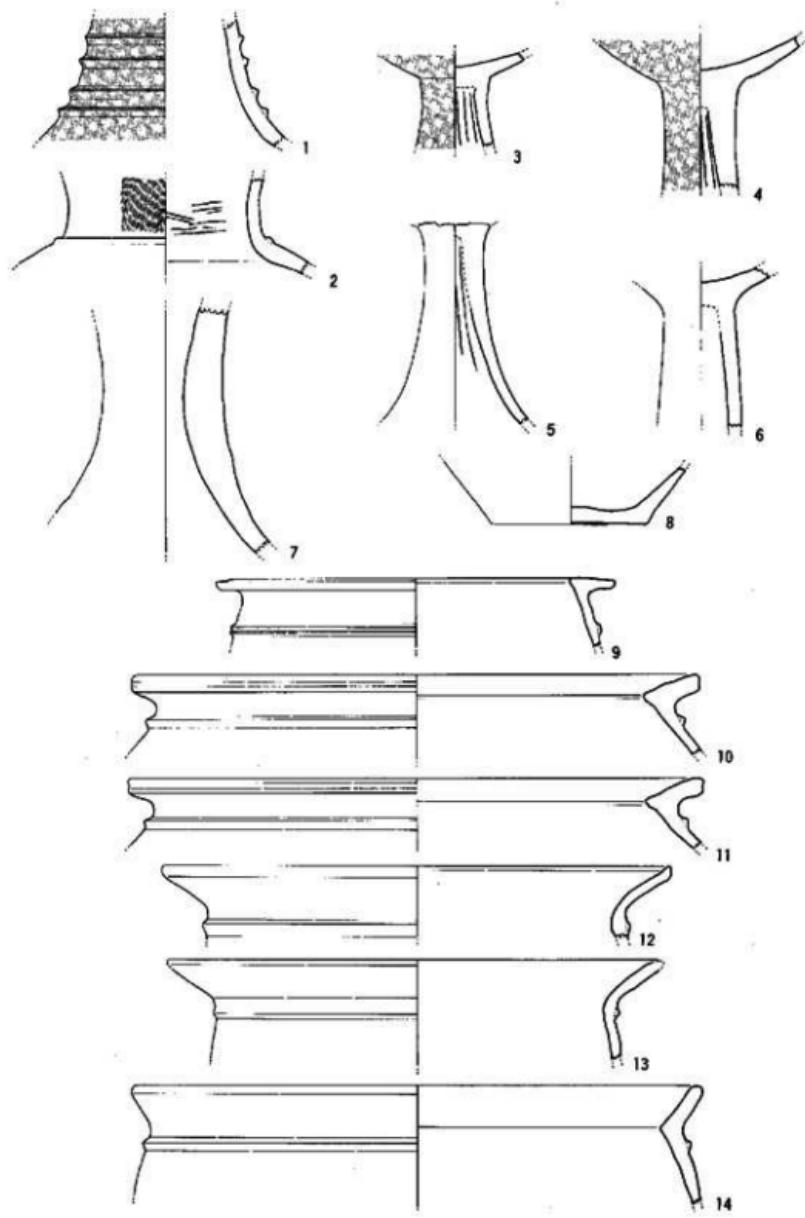
33 上層の鉄器（縮尺1/2）



34 上層の鉄器

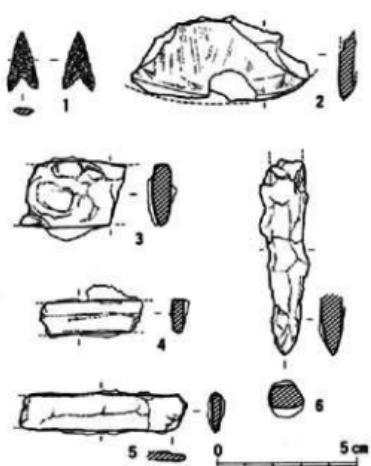
中層の遺物

土器 上層と同じように弥生時代中期後半から後期にかけての土器であるが、後期の土器は少ない。1は細頸壺で、頸部に三角突帯を4条巡らしている。胎土の砂粒は少ないと精良とは言えない。外面は丹塗りが施されている。2の壺は胴部と口縁部を欠いている。直立気味に伸びる頭部と胴部の境には三角突帯を貼付けている。頸部外面は縦のハケ目、内面には横ナデの条痕が見られる。3～6は高杯の脚部で、柱状になるものと据部に次第に広がる2種がある。3、4、6は杯の一部が残る。3、4は精良土に近い胎土が用いられ、外面に丹塗りが施されている。7は分厚いつくりで、下端部は縦のハケ目調整。器台であろう。8は底部。底径は10.6cmでわずかにへこんでいる。9～14は壺の口縁部。9は口径28cm、L字形の口縁部の下方に口唇状の突帯を巡らしている。10、11とともにく字形の口縁部を持ち、胴部への移行部に三角突帯を貼付けている。口縁内端は小さく突出している。12、13も同じようにく字形の口縁であるが、10、11の胴上半部が内傾しているのに対して、直線的で肩に張りがない胴部となっている。12の口縁端部は小さく上方に摘みあげられ、いわゆる「はね上げ口縁」の特徴を持つ。口径は35.2cmを測る。14の口縁部はさらに立ち上がりが強く、内面がへこんでいる。全体に剥離が進むが横ナデ調整のようである。口径39.8cm。赤茶色を呈し、胎土には小砂粒が多く含まれている。

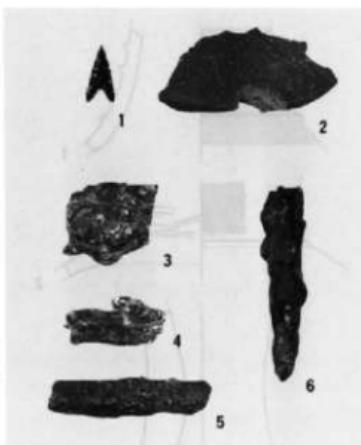


35 中層の土器 (縮尺1/3)

0 10cm



36 中層の石器、鉄器（縮尺1/2）



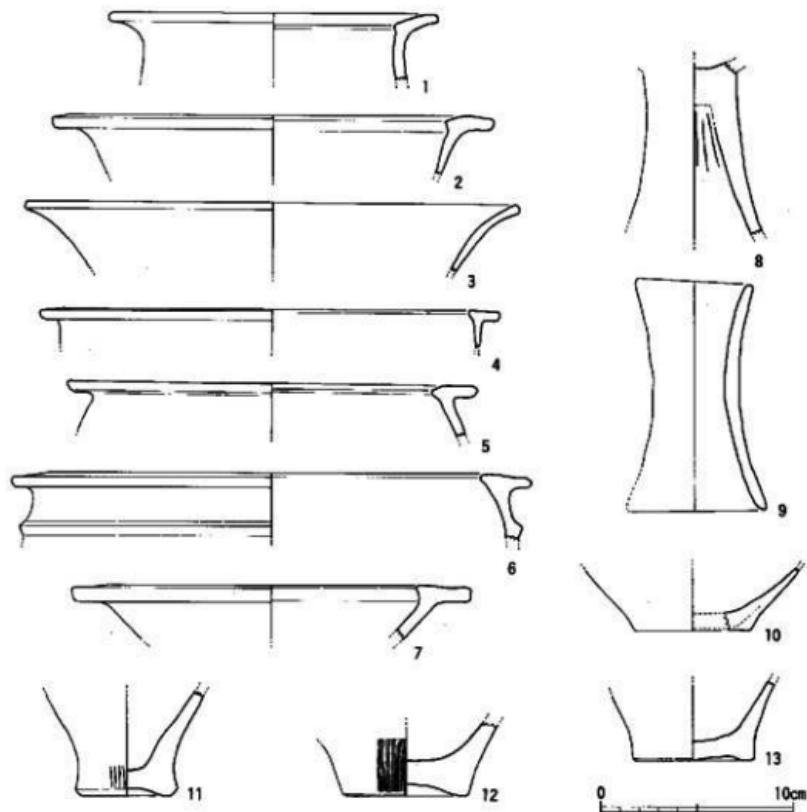
37 中層の石器、鉄器

石器 1は凹基式の石鎚で、全長は21mm。黒曜石の石材はわずかに半透明で、全面にひょうに細かな剥離調整が行われている。2は赤味を帯びた黒灰色の頁岩を素材とする。片面は剥離し、小穴もないが、よく研ぎ出された刃部があることから摺搗具（石包丁）とした。

鉄器 3は小破片で、しかも鏽ぶくれのために全形がわからないが断面は鐵刀の茎状をしている。図左端は破断面は認められないが、本来の形かどうかは断定できない。現存長3.5cm、最大幅2.3cm、最大厚0.7cm。4と5は同じような形状で同一個体と思われるがいまは接合しない。4は現存長3.7cm、最大幅1.3cm、最大厚0.5cm。図上端は平坦となり稜がつく。この特徴は5に顕著に観察できる。5の図下端の断面は刃部のように薄いつくりである。刀子の可能性があるが断定できない。現存長6.0cm、最大幅1.3cm、最大厚0.3cm。6は鏽のために現在は断面が円形になっているが、本来は偏精円形に近いものと思われる。図下端は鈍く尖っている。現存長7.0cm、最大幅1.2cm、用途は不明。

下層の遺物

土器 弥生時代中期後半の土器がほとんどである。1～3は広口壺。1の口縁部は内傾し頸部はあまり開かない。口径22.8cm。2も同じように平坦な口縁部をつくる。内端部は小さく突出しており、にぶい後がある。3の口縁部は頸部から朝顔状に大きく開きそのままおさめる。器台の可能性もあるが器壁がきわめて薄いために壺とした。4～6は壺で、L字形の口縁をもつ。4の胴部は肩の張りがないが、5と6は胴上半部が内傾して倒卵形の胴部となっている。6は口径36.0cm、口縁部の下方に1条の三角突帯が巡る。7は高杯の杯部。口径27.8cmで、口縁部

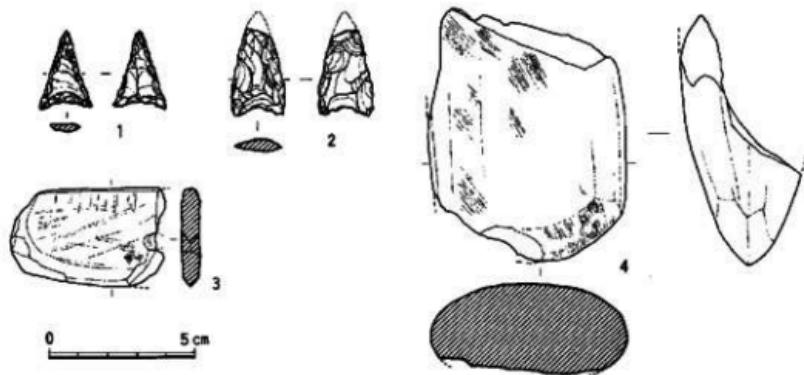


38 下層の土器 (縮尺1/3)

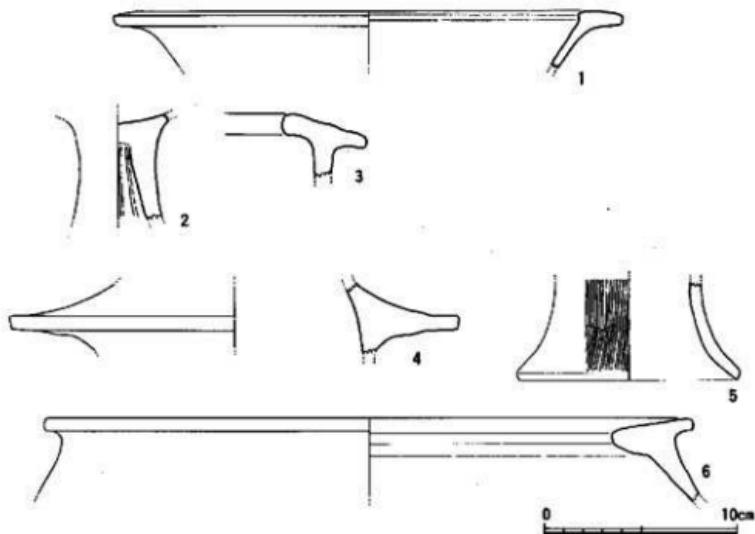
の平坦面はわずかに外傾する。焼成は良好だが丹塗り痕は認められない。8は高杯の脚部。胎土は砂粒が多いが、外面は継のミガキで丁寧な調整が行われている。9は器台。いびつなつくりで上下端が平行になっていない。10～13は底部。10は底径7.8cm、壺の底部であろう。11～13は壺の底部。11は深い上げ底で、外面はいったん縒まってから胴部へ移行する。底径7.0cm、上げ底の深さは5mm。外面の調整は粗いハケ目。12も上げ底で9mmとさらに深くなっている。底径は8.5cm、胴部への移行部に縒りがない。外面の継ハケ目は細かい。13の底部は中央部がわずかにへこみ、外縁部のみが平坦になっているのが特徴である。底径8.4cm。

石器 1の石鏃は基部の抉りがほとんどなく、長三角形をしている。黒曜石の縦長剥片を用いた剥片鏃で、全周にわたって細かな剥離調整を加えている。2はサヌカイト製の石鏃。表裏面

ともに剥離調整は難である。凹基式ではあるが1と同じように抉りは浅く、脚部は短い。3は粘板岩製の徳摘具。刃部の湾曲が小さく長方形に近い。両面ともに研磨されているがその方向は一定ではない。小孔は刃部に片寄って穿孔されている。あるいは極度の砥出しで変形したとも考えられる。4は玄武岩を素材とする石斧。断面は楕円形、刃部は両面から鋭く研磨され、いわゆる始刃となっている。



39 下層の石器（縮尺1/2）



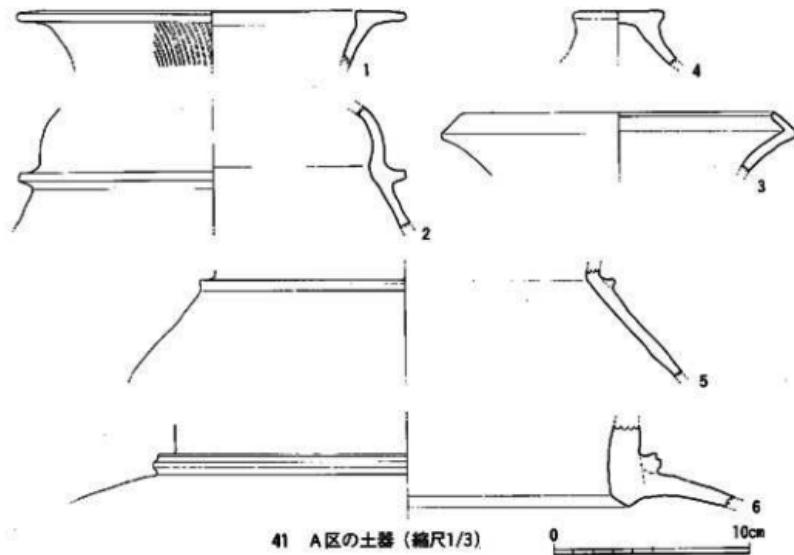
40 3～5号トレンチの土器（縮尺1/3）

3～5号トレンチの遺物

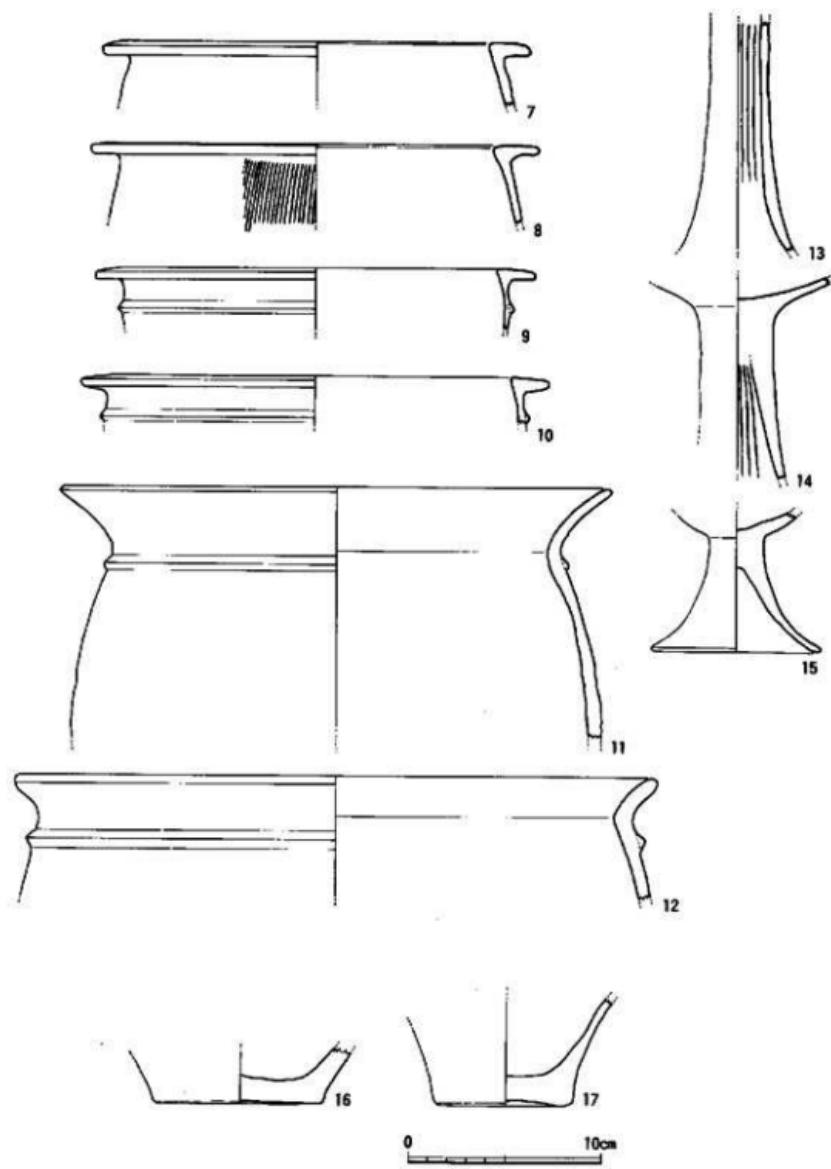
土器 1～3は3号トレンチ、4～6は5号トレンチの拡張区で出土。1は広口壺の口縁部で、口径は35.2cmと大きい。口縁内端部は小さく突出する。2は高杯の脚部。灰茶色を呈し、脚部内面にはしばり痕が見られる。3はT字形の口縁部をもつ壺で、外端が下方に垂れている。焼成はいいが1～2mm大の砂粒が多く含んでいる。口径は不明、壺底の破片であろう。4は筒形器台の鉢部と考えた。焼成はよく、内外面とも赤茶色となる。全面剥離が進み調整痕、丹塗り痕とも確認できない。鉢の直径は31cm。5は器台。底径は15.4cmで、外面は粗い継のハケ目調整。6はく字形口縁で、口径44.6cmの中型の壺である。口縁部は内側に長く突出し、上面は水平ではなく内傾している。体部の最大径が口縁部ではなく肩部にある器形となるのであろう。

A区の遺物

土器 1は広口壺の口縁部で、幅広の水平な口縁部をつくる。口径27cmで、頸部外面は凹凸が目立つが丁寧な継のミガキ状調整が加えられている。2はいわゆる「ひさご形壺」の肩上半部である。焼成はよく、内外面ともに赤茶色を呈する。3は二重口縁壺の口縁部で頸部から反転して強く内傾し口縁部とする。反転部外径で24.8cmを測る。4は壺の摘み部であろう。外面は継のハケ目を横ナデで消している。5、6は中型壺の肩上半部である。5は直線的に内傾し、頸部の移行部に三角突帯を貼付けている。6の頸部の器壁はきわめて厚い。肩部は肩の張る器形となるのであろう。移行部に巡る突帯は口唇状の断面をしている。7～10はL字形の口縁部をもつ壺。7は口径29.6cm。外端がわずかに下方に垂れている。8の口縁上面は、ほぼ水平で



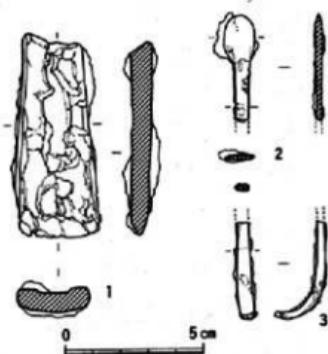
41 A区の土器 (縮尺1/3)



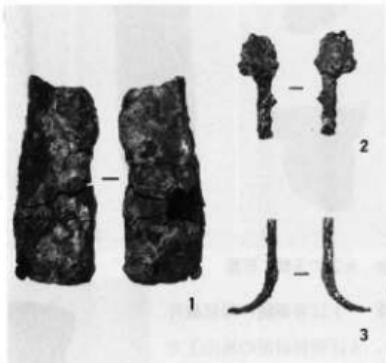
42 A区の土器（縮尺1/3）

胸部外面は粗いハケ目調整。9、10は口縁下方に断面三角形の突帯を巡らす。11、12はく字形口縁部をもつ甕。11の口縁部は12に比べると長めで、屈曲部内面は丸みがある。2点とも肩の張らない胴部で、三角突帯を口縁部への屈曲部より少し下方に貼付けている。口径は11が38cm、12が44.4cmである。13~15は高杯の脚部。13は長い柱状をなし、内面にはしばり痕が見られる。これに比べ15の脚部は高さ8.7cmと短いつくりである。16、17は底部。16の底径は11.4cmで、甕の底部であろう。17はわずかに上げ底で、胴部へはやや内湾氣味に移行している。

鉄器 1は長台形状の鉄製品で現存長7.3cm、最大厚0.7cmを測る。鋸が進んでいるが欠損はなく鉄斧と考えた。図上端が基部で幅は2.1cm、図下端が刃部で幅は2.85cm。刃部は図表面の方から斜めに加工され片刃となっている。体部の横断形は凹状に中央がへこんでいるようである。2は現存長3.8cm、厚さ0.2cmの薄い板状で、図上端は長楕円形となっている。2の断面が凸レンズ状をしているのに対し、3の断面は長方形で幅0.5cm、厚さ0.3cmを測る。図の下方は緩やかに湾曲し、先端はそのままおさめている。湾曲部の両側には後線が観察できる。2と3を合わせて釣り針を想定したが、断面形がそれぞれ異なり、釣り針としての特別の加工もないことから別の用途を考えるべきであろう。



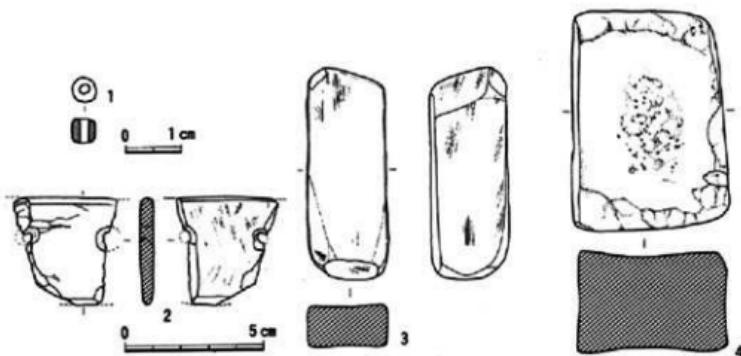
43 A区の鉄器 (縮尺1/2)



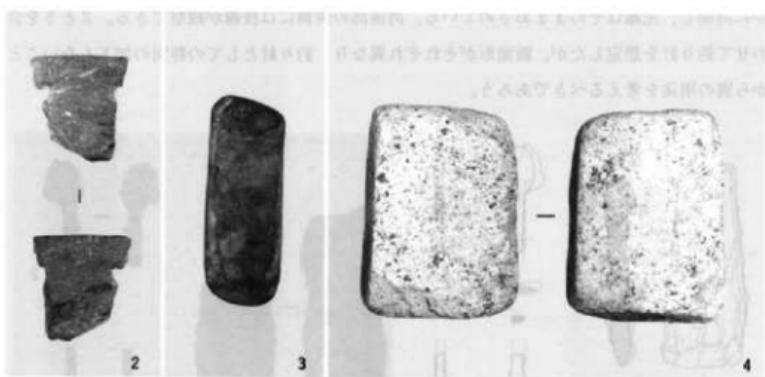
44 A区の鉄器

玉類 1はガラス小玉、やや半透明の淡いブルーをしている。長さ4.0mm、径4.0×4.2mmを測る。

石器 2は穂摘具の中央部破片。小孔は両面からの穿孔で、その間隔は約3cm。背は直線であることから半月形の外済刃となるのであろう。3は小ピットから出土した砥石。上下端の小口部を除いて砥面として使用されている。4は花崗岩質の砥石で、図の表裏面の中央部には敲打痕があり、わずかにくほんでいることから、凹石から砥石に転用されたとも考えられる。

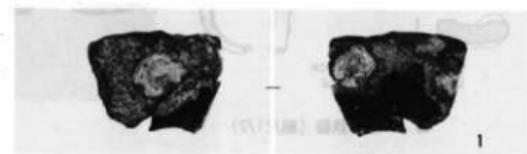


45 A区の玉類、石器（縮尺1/1.1/2）

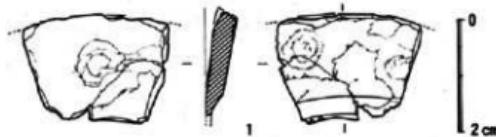


46 A区の玉類、石器

青銅器 1は青銅鏡の縁部破片である。A区南側斜面の地山上で出土した遺物の中に混じっているのを、遺物洗浄時に気がついた。したがって正確な出土地点・状態については不明である。遺存状態はかなり悪く、表面には錆が浮き、縁部端のほとんどが欠けている。しかし、銅質はかなりよく、船載鏡と考えた。やや強引かと思うが、



47 A区の青銅鏡



48 A区の青銅鏡（縮尺1/1）

面径は12~13cmと復元できる。縁部は無文で、厚さ0.4cm、幅1.5cmを測る。また内区部分との段差は3mmと低く、薄手の平縁である。縁部の内側には、鋳上がりが悪いために痕跡的に櫛齒文と思われる短い凸線が認められる。では本鏡は、どのような時期の鏡なのだろうか。表掲に近い出土状況のために明確な時期比定は困難であるが、遺跡全体では弥生時代中期後半~後期の遺物が圧倒的に多いので、この鏡も該期のものである可能性が考えられる。北部九州では弥生時代中期末~後期に、中国の前漢後半~後漢代の鏡が舶載される。本鏡も、そうした舶載鏡の一つであろう。

遺構

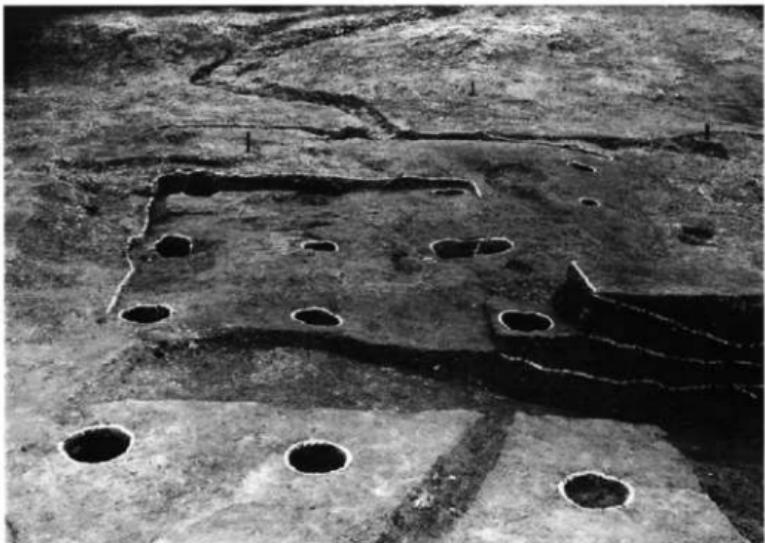
検出した遺構は竪穴住居跡、ピット、溝などである。住居跡に間接しない床面外のピットは30数個を数えるが、なかには掘立柱建物跡の柱穴を思わせるような大きさのものもある。しかし方形の位置に並ぶものではなく建物として捉えることが出来なかった。また溝も住居跡の外部施設としての排水溝以外は斜面に自然に浸食した雨溝と考えられることから、ここでは住居跡の説明だけにとどめる。

第1号住居跡 この住居跡は、南西側の約半分が遺物包含層の途中に位置しており、1号、2号トレンチの土層観察でその存在がわかった。当初この遺構を竪穴式住居跡とするには第3章で記すようにいくつかの問題点があったが、北西隅に壁に接して内側に幅約18cm、深さ約3

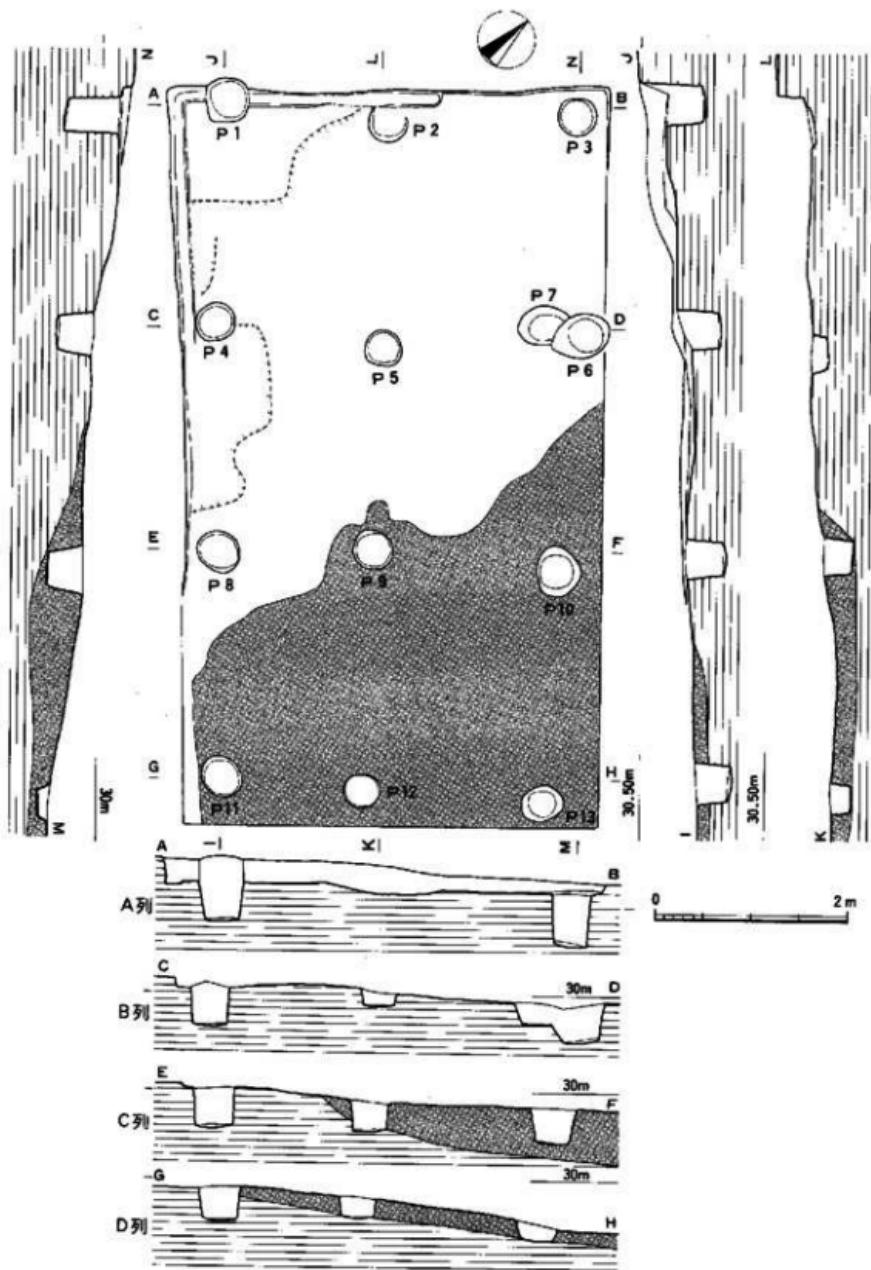


49 1号住居跡（南より）

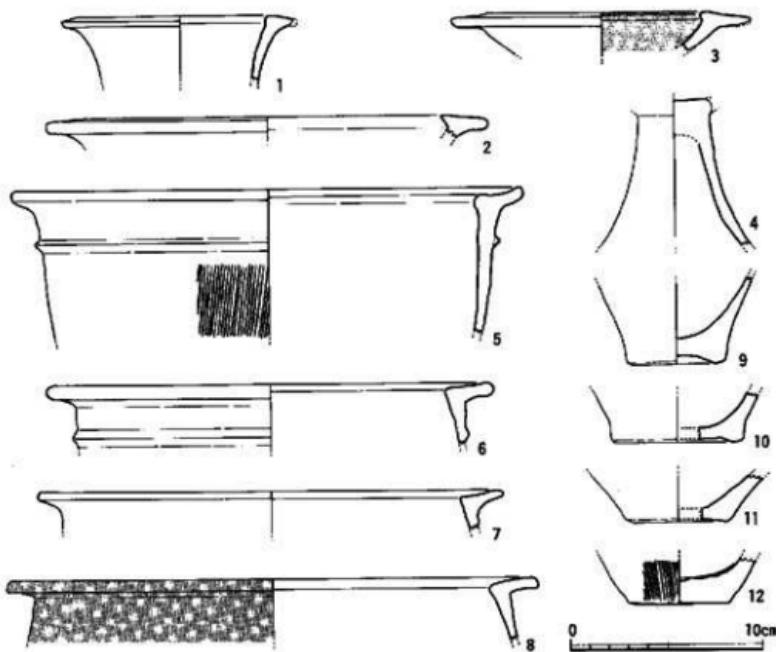
~5cmの壁溝と思われる細い溝が掘られていることなどから竪穴式住居跡とした。プランは短辺を北西に向けた長方形で、その長軸を等高線に対してほぼ直交させ、北からは西に約46度傾斜している。四つの壁は北西側の短辺と北東、南西側の両長辺の一部が残っているに過ぎない。これは南に傾斜した斜面に作られていることが原因と考えられ、南東隅ほど削平を受けて残りが悪い。北西壁は4.6mの長さで、壁の高さは26cmを測る。したがってこの住居跡の推定の大きさは長辺7.7m×短辺4.6mとなる。床面には12個の柱穴が、北より3個4列でほぼ並列に配置されている。いま北西壁から東西にA~D列、P 1~13とすると、その柱間はA列が3.70mと最も広く、南に次第に狭まりD列は3.36mである。P 6のみが2個が切り合っているが、一方が浅く、建て替えではなく建築時の調整であろう。床面の南西半分が遺物包含層に当たっているために検出作業は時間がかかったが柱穴の掘り込み面を捜すことによってこれを床面とした。P 9~13は遺物包含層に掘り込まれており、柱穴の底は南ほど深くなっている。これは傾斜した地形に合わせて掘られたからであろうか。北西壁より約3m離れた所に排水溝と思われる外部施設がある。この溝は弧状に住居跡の北東壁を囲んでいる。また中程からS字形の幅広の溝が標高の高い方に延びている。このS字溝は地山の岩盤をU字形断面に掘り込んでいる。住居跡の排水溝が、高所からの流れ込みを防ぐ目的とすれば一か所に雨水が集中することになり、その目的に矛盾する。別時期の掘削であろうか。



50 1号住居跡（南東より）



51 1号住居跡 (縮尺1/60)

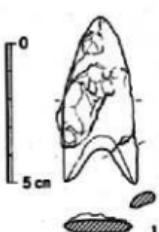


52 1号住居跡の土器（縮尺1/3）

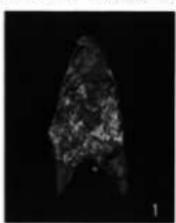
遺物 住居跡は遺物包含層に掘り込まれているために、上下の土層遺物から住居跡の時期が決定できる可能性がある。このため遺物を覆土、柱穴、床面及び床面直下の三つに分けて取り上げた。土器と鉄器が出土したが、土器は細片が多く12点を図示したにすぎない。

土器 3、5、12は覆土出土。4、9は柱穴出土。残りは床面直下で出土した。1、2は広口壺の口縁部。1は小型で口径12.2cm。内端部の突出はほとんどない。2の口径は20.6cm、頸部を欠く。口縁部は内側に鋭く突き出している。3、4は高杯。3の杯部口径は20.6cmと実測したがもう少し大きいか。杯部の内面にはわずかながら丹塗り痕が見られ、本来は外面も塗られていたのであろう。4は大きく開く脚部で、丹塗り痕はないが、外面は綴のミガキを施している。5～8は壺。5の口縁部は上面がへこみ、く字形に近い形状をしている。口縁下方の突帯は小さくこの部分まで横ナデ調整。胴部は肩の張りがなく、そのまま底部へと続く。外面は粗い縦ハケ目調整。6～8はL字形口縁。いずれも胴上半部がわずかに内傾しているが張りがなく、その最大径は口径に及ばない。8は口径36.8cm、精良な胎土が用いられ、外面は丹塗りだが、口縁上面には認められない。9～12は底部。9は深さ6mmの上げ底で、底径は7.0cmを測る。

外面はナデ調整。10の底面は中央部だけがわずかにへこむ蛇の目状をしている。11、12は胸部への開きが大きい。12は外面に粗いハケ目調整。分厚い器壁のつくりである。



53 1号住居跡の鉄器（縮尺1/2）

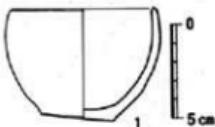


54 1号住居跡の鉄器

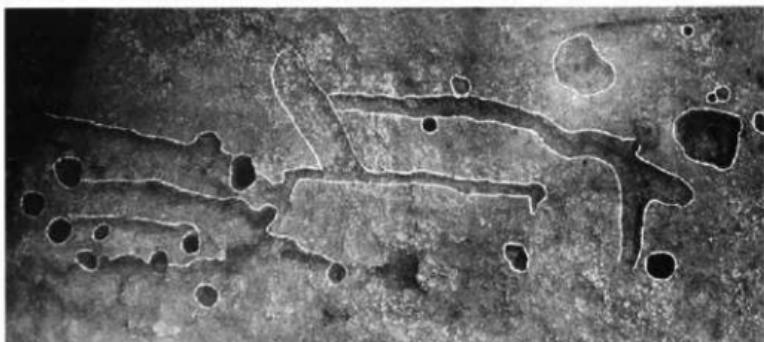
鉄器 1の鉄鎌は覆土から出土した。鎌が進んでいるものよく原形をとどめている。逆刺をもつ凹基式で全長6.0cm、両方に開く基部が最も幅が広く2.65cmを測る。逆刺部、刃部とともに稜がつき鋭利なつくりである。身部は緩やかに湾曲して先端近くは三角形をしている。鎌は先端部だけに付けられ

ている。身部の最大厚は0.45cm。全体に大振りで頑丈な印象を受ける。

第2号住居跡 発掘区の西南隅で検出した。斜面の等高線と平行して2条の溝が掘られている。南側の溝は長さ4.53m、幅約50cm、深さ約25cm。両端が直角に折れている。この北側0.7mにL字形をした幅広の溝がある。斜面のためにすでに壁が削平されたと仮定すれば、細い溝が住居跡の壁溝、幅広の溝が住居跡外側の排水溝とも考えられよう。住居跡想定範囲内の床面に当たるほど中央には、50×70cmの不整指円形のくぼみと2個のピットがある。いずれも住居跡の柱穴とする積極的な根拠はないが、弥生時代後期の土器片が出土した。またこの西側には地山が4段に整形され階段状をしている。13個のピットが集中しており、ここも住居跡の可能性がある。1の鉢はP59から出土した。口径10.6cm、器高7.8cmといびつなつくりとなっている。

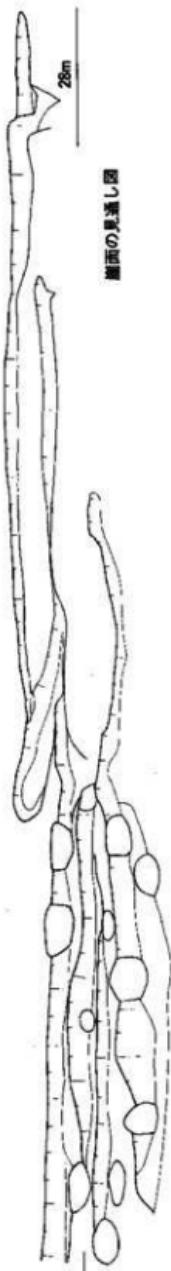


55 2号住居跡の土器（縮尺1/3）

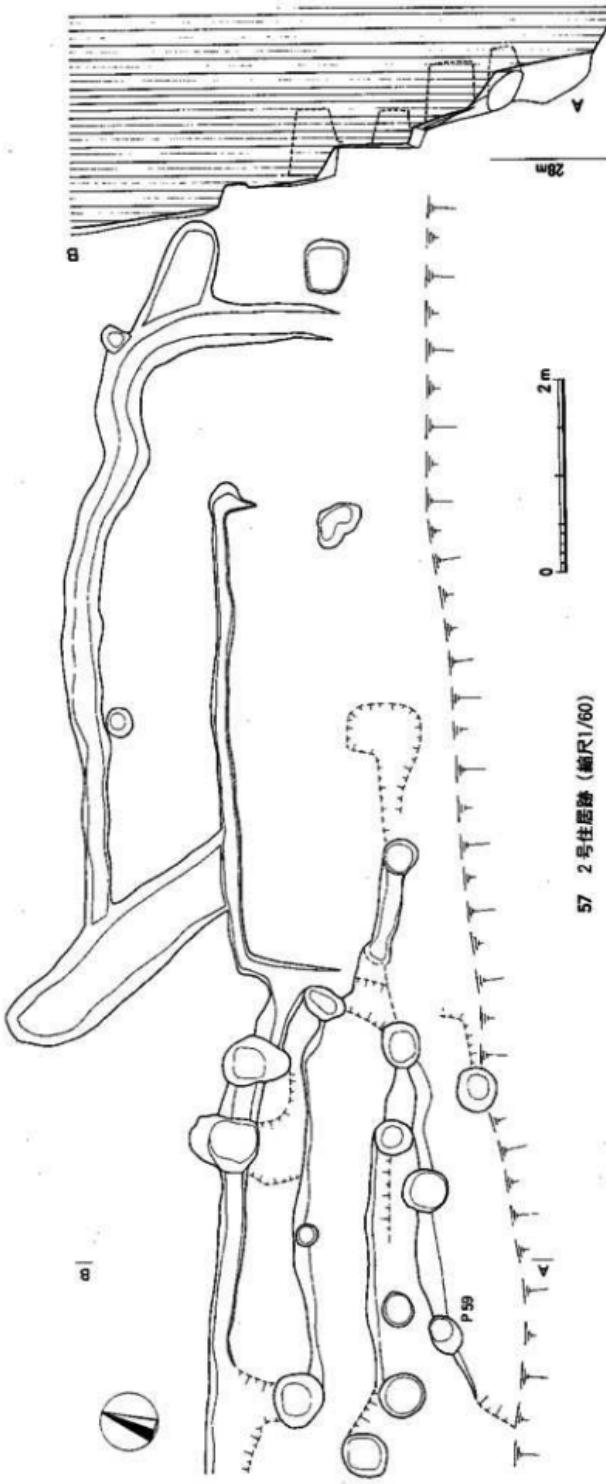


56 2号住居跡（南より）

32 第2号住居跡



断面の見通し図



57 2号住居跡 (縮尺1/60)

B区の調査

B区は赤穂ノ浦遺跡から北西方向に伸びてきた谷の最深部に当たる。赤穂ノ浦遺跡ではこの谷に多くの遺物が堆積していた。銅鋳錫型もその一つである。銅鋳錫型の年代や周辺遺跡の性格を明らかにするためには、この谷における遺物包含層がどの位置から始まり、またいつの時期から堆積したかを調べる必要があった。B区の場所はかなり離れてはいるが同じ谷であることから期待された。A区南端を掘り下げたところ、地山は急激に落込み、しかも土層は後世に埋められてかなり擾乱していることがわかった。さらに谷の中央部に移動し、トレンチを設定した。ここでは更に深くなり、約3.5mでようやく青灰色の粘土層に達する。土層は同じように乱れて弥生時代の遺物はまったく発見できなかった。

C区の調査

C区は1976年の1次調査区の北側に当たる。発掘調査によって重要な内容の遺跡であることがわかり、関係者の努力で遊歩道の路面レベルを高くして埋め戻された所である。このような保存の経緯がありながら、今回破壊するような事になったのは非常に残念なことと言わざるをえない。切り替え路線の範囲に入るのは、1~3号住居跡である。これらの住居跡はすでに完掘されているので最発掘はしなかった。石斧片1個を表採した。

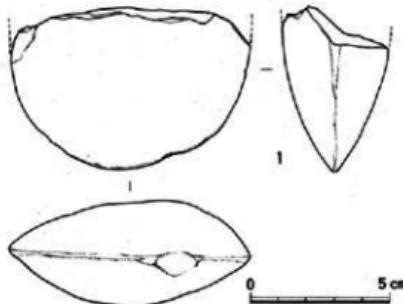
石器 1は太型蛤刃石斧の破片。全体に風化しているが、刃部は丁寧な砥出しが行われている。玄武岩質の石材を用いている。



58 B区の調査（谷を埋めた擾乱土の除去。）



59 C区の調査（前方の中学校が宝満尾遺跡。）



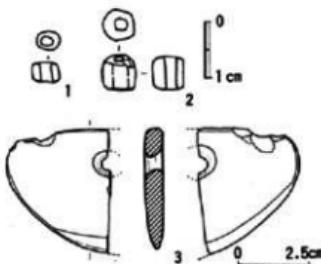
60 C区の石器（縮尺1/2）

D区の調査

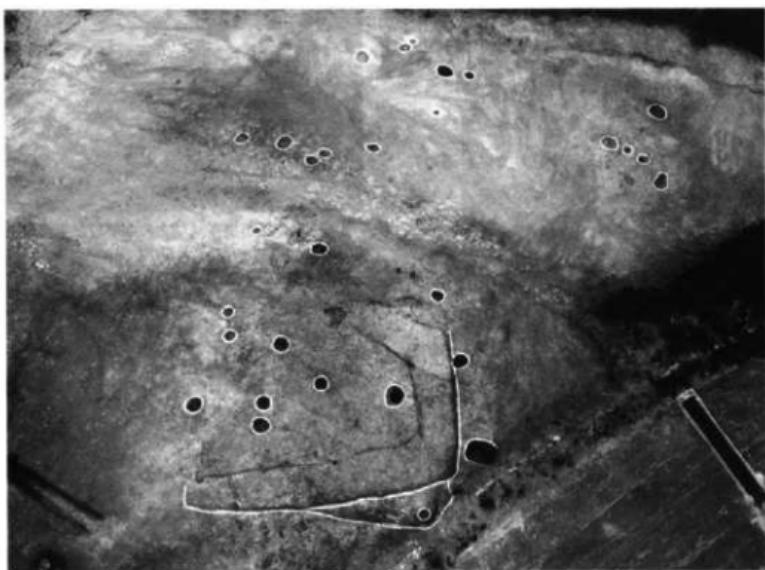
D区は1次調査区のC区と同じ尾根にあるが、今回新たに発掘する所なので区別してD区と呼んだ。C区との間には遊歩道が通っている。この遊歩道を登りめるとアスレチック場に着く。この遊歩道の南側約400m²が発掘対象地である。発掘前の地形は、遊歩道に接して等高線が緩やかに回ってテラス状になっているが、すぐに急斜面になり谷を埋めた子供広場となる。その比高差は4.5mである。席田遺跡群におけるこれまでの調査では、このような急斜面でも住居跡が発見されているので、試掘の時点から注意して遺構の検出作業をした。また1次調査で発掘された竪穴住居跡群の南限を確認するのも目的の一つであった。なお遺構検出作業においてガラス玉と穂摘具が出土した。

玉類 1は半透明の淡青色をしたガラス玉。きわめて小さく長さ3.4mm、径2.7×3.6mmである。2も1と同じような素材が用いられている。長さ5.85mm、径5.2×5.8mm。

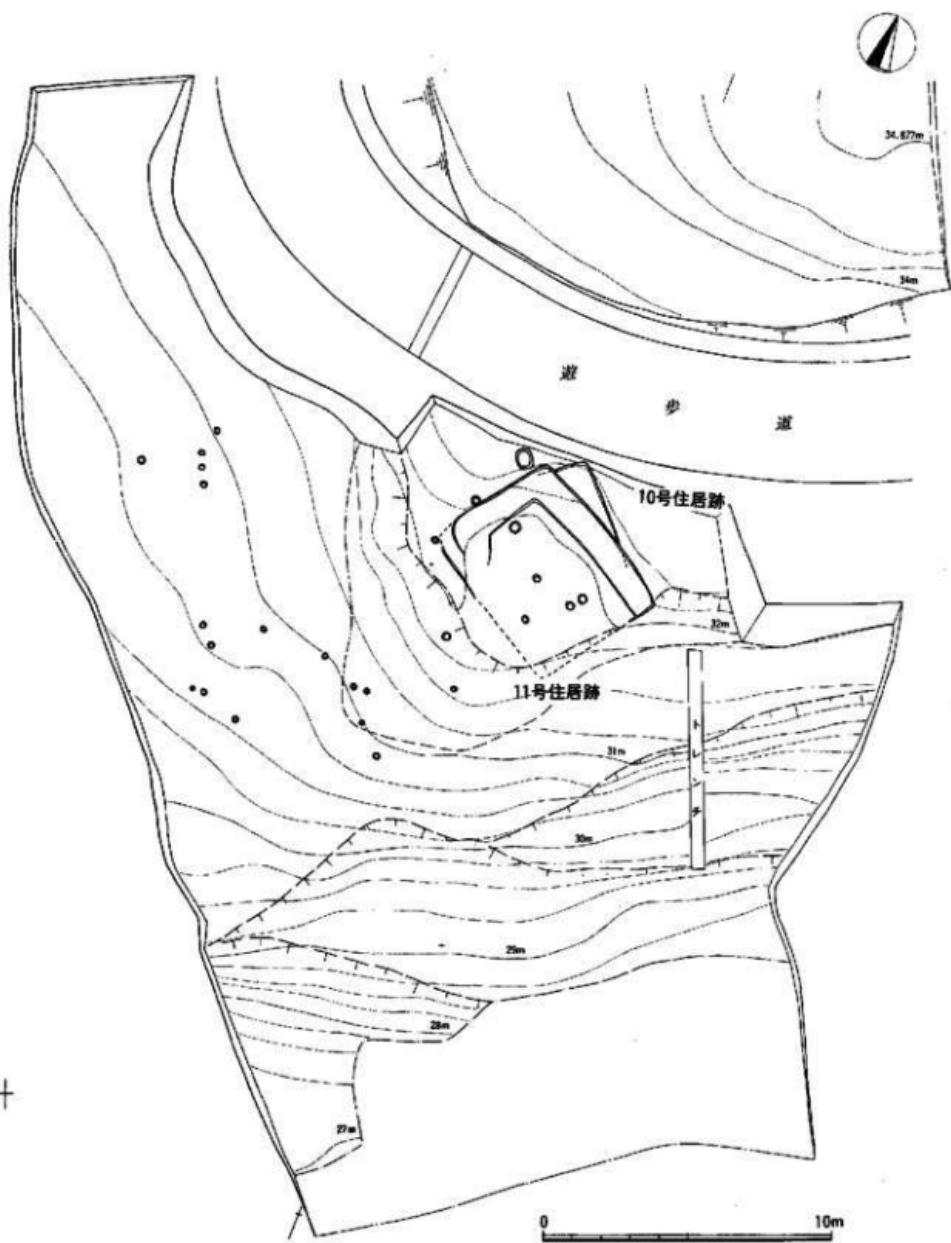
石器 3は玄武岩を素材とした石包丁である。全体に風化が進んでいる。背は直線ではなく、やや湾曲している。



61 D区の玉類、石器（縮尺1/1、1/2）



62 D区の全景（北より）



63 D区の遺構 (縮尺1/200)

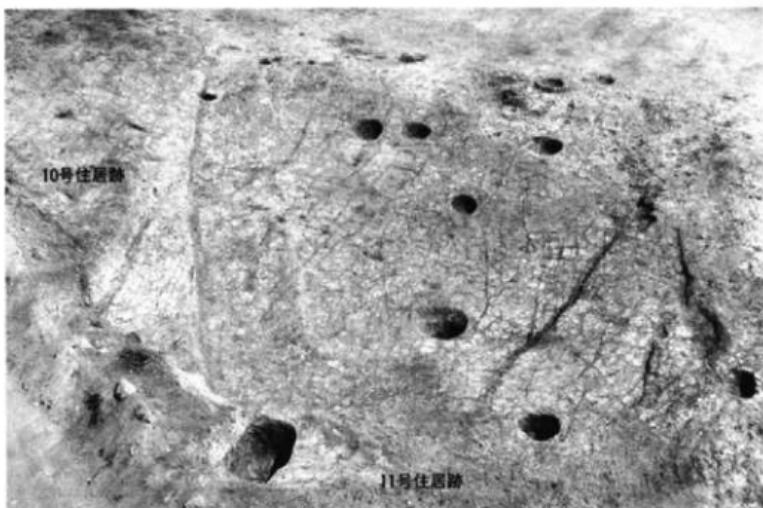
遺構

今回の発掘では竪穴式住居跡2軒と10数個のビットを検出できた。ビットは1次調査でも竪穴式住居跡の回りで見られるが、径が小さく、また建物としてのまとまりもないことから柱穴とは考えにくい。住居跡番号は1次調査からの通して10、11号とした。

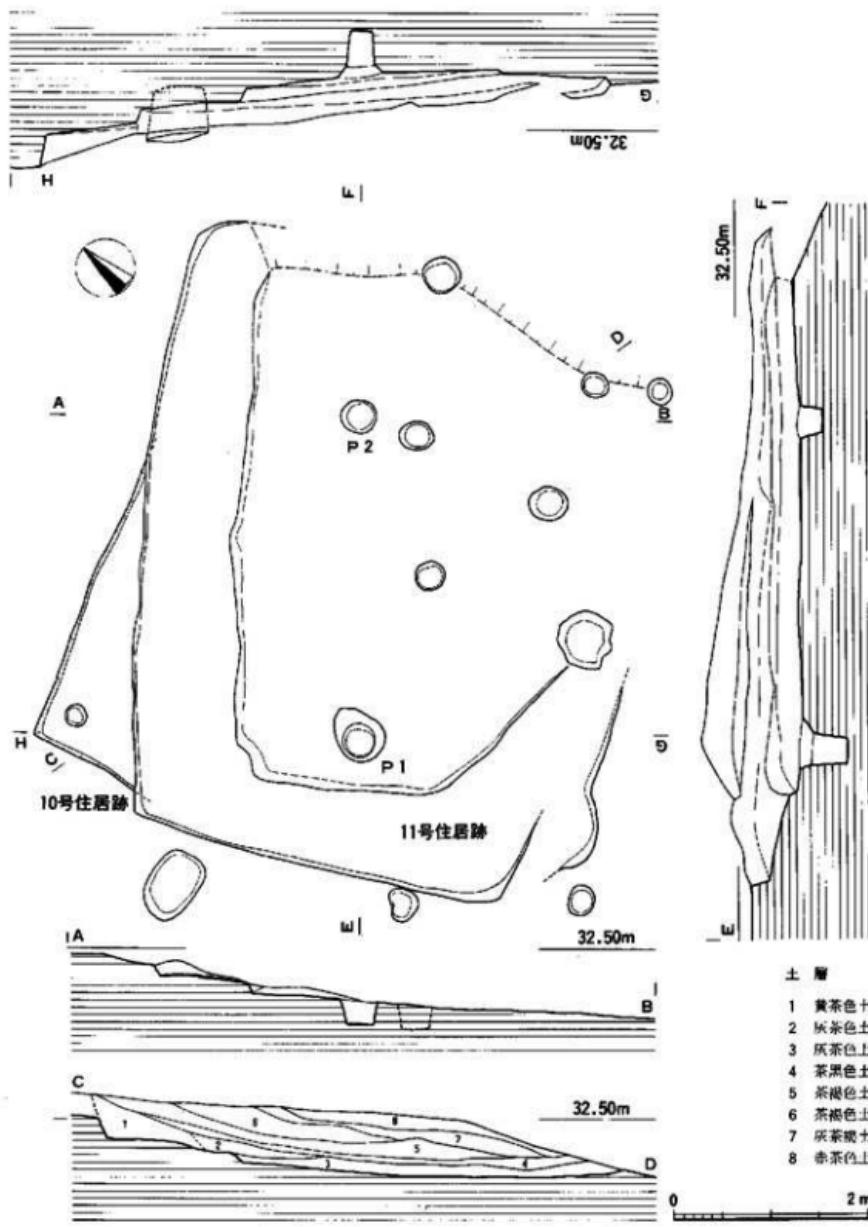
第10号住居跡 テラス状になっている所に黒褐色土が 3×4 mの範囲で落ち込んでいるのが見つかった。この落込みは不整円形で、中央部は赤茶色土が入り込んでおり黒茶色土は環状になっている。これは円形の竪穴に土層がレンズ状に堆積し、後に上部が削平された結果と思われた。このために中央に土層観察の帯を残して掘り下がったところ、黒褐色土層の下にはさらに灰茶色土層があり、深さ約60cmで竪穴式住居跡が現れた。住居跡は2軒が切り合っている。北側の古い住居跡を10号、南側の新しい住居跡を11号とした。10号住居跡は、北コーナーだけが残っているに過ぎない。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、その高さはわずかに38cmである。床面は南に傾斜し、1個のビットがある。規模は明らかに出来ないが5m前後の方形のプランが推測できる。また時期を確定できるような遺物は出土していない。

第11号住居跡 10号の床面よりさらに17cm深く掘り込まれた住居跡である。南側の壁が削られているが、三つのコーナーが残っていることから、およその大きさを知ることができる。プランは長方形で、短辺を東、西壁とすると本来の壁の長さが残っているのは北壁だけである。西壁は南端が不明瞭であるが、 4.5×6.2 m前後の大ささになるのであろう。

各コーナーは直角ではなくやや隅丸に近い。長軸は現在の等高線に対して約45度に傾いてい



64 10,11号住居跡（北西より）



65 10.11号住居跡 (縮尺1/60)

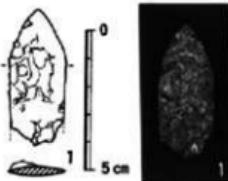
る。北、西壁に接してベッド状の高まりがある。これは地山を削り出しており、その高さは最も残りのよい部分で15cmである。南壁にもわずかだがその痕跡があり、もとは入り口の一部を除いてコ字形になっていたのではなかろうか。

床面には9個のピットがある。この中には10号住居跡の柱穴も含まれていると思われるが、11号の主柱穴は北壁に平行するP1とP2の2本柱を考えた。

遺物のはほとんどは覆土からの出土であるが、10、11号住居跡の時期は、これらの土器から弥生時代後期前半と言ふことが出来よう。

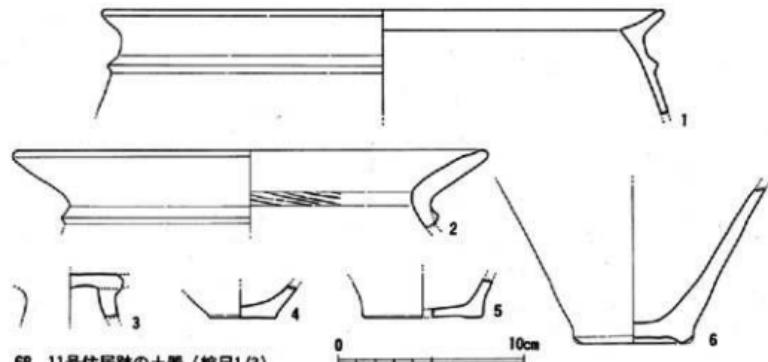
遺物 土器、鉄器、石器の計11点を図示したが、鉄器以外はすべて覆土からの出土である。

鉄器 1の鉄鎌は11号住居跡の西壁に接して出土した。身部は細長く、先端が三角形状に尖っている。基部を欠いており原形は不明だが、逆刺のある凹基式になるのであろう。現存長4.85cm、最大幅2.0cm、断面は偏指円形で最大厚は0.3cmである。



66 11号住居跡の
鉄器（縮尺1/2）

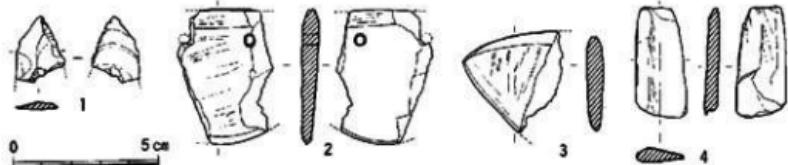
土器 1、2は甕。1は口径40cmのく字形の口縁部で、上面はへこみ、内端部には棱がある。2は器壁が分厚く、頸部の外面に三角突帯1条が貼付けられている。屈曲部内面には粗いハケ目痕が見られる。口径34cm。3は高杯の脚部。4～6は底部。4は底径4.9cm。平底から緩やかに湾曲しながら胴部へ伸びている。小型壺の底部であろう。5は外表面が明茶色をした底部である。胴部への移行は、まず垂直気味に立ち上がり外に開いている。底径8.4cm。6の胴下半部は逆ハ字形に直線的に開く。底部は剥離して凹凸が目だつ。



68 11号住居跡の土器（縮尺1/3）

石器 1は黒曜石の継長剥片を素材にした石鎌。いま脚部が折れているが剥片の打撃面を脚部にしている。基部は両面からの抉り加工があり、凹基式の剥片鎌になるのであろう。2はやや

黄味がかった灰白色の粘板岩で作った穂摘具で、半月形をした外湾刃式である。刃部は両面からの砥出しであるが、表裏でその幅が極端に異なる。小孔の間隔は2.2cmである。3は粘板岩質の緻密な石材が用いられている。刃部は両面から丁寧に研磨され、かなり鋭利な刃となっている。背は直線ではないので銀杏状の形になるのであろう。4は滑石の加工品で最大厚5mmの板状となっている。両面ともに斜めの擦痕が認められる。用途は明らかでない。



69 11号住居跡の石器（縮尺1/2）

第3章 おわりに

これまで大谷遺跡2・3次調査で検出した遺構と遺物について、発掘時の所見とその後の整理作業で得られた成果について記してきた。報告書という本書の目的から、まず事実の記述を優先するために十分に説明できなかった部分や、いくつかの問題点もあるのでここに補足してまとめとする。

遺物包含層

発掘対象地の最北端に当たるA区で遺物包含層を確認した。この遺物包含層は、北から深く入り込んだ谷に形成されたものである。傾斜地に堆積しているために厳密に分層発掘しえたとは言い難いが、出土遺物は上、中、下層でおおまかではあるが、時期区分が可能なようである。

上層は、弥生時代中期後半から後期の土器が混在している。中層は、上層と同じ様な時期の土器が出土するが、後期の土器が少なくなる傾向がみられる。そして下層は中期後半の土器が主となっている。

土器の総量は、狭い発掘面積にもかかわらずコンテナに計31箱という多さであった。また土器だけではなく、穂摘具（石包丁）、石鎌、石斧、砥石などの石器、玉類、鉄器、さらに数点ではあるが大型壺の口縁部も含まれており、ごく近くに壺墓墓地や住居跡などの弥生時代の集落が営まれていたことを窺うことができよう。

このような遺物の種類や組成、あるいはその量は弥生時代のごく普通の低地（平地）集落遺跡と大きな違いは内容的にも指摘できないが、9点の鉄器は本遺跡の性格を知る上で重要であろう。もちろん鉄器の数量について他遺跡との明確の比較基準が設定されているわけではないが、この9点に加えてA区第1号住居跡とD区第11号住居跡で鉄鎌、1次調査第3号住居跡で

鉄斧も出土しており、これまでの席田遺跡群内の遺跡としては圧倒的な数量である。

大谷遺跡一帯が周辺遺跡の中で優位な位置を占め、核的な集落であったことは、検出された遺構の規模やあり方などからも容易に推測されることである。なお、包含層の上部からは、須恵器などの古墳時代以降の遺物もわずかながら採集できるが、包含層中にはまったく含まれていない。

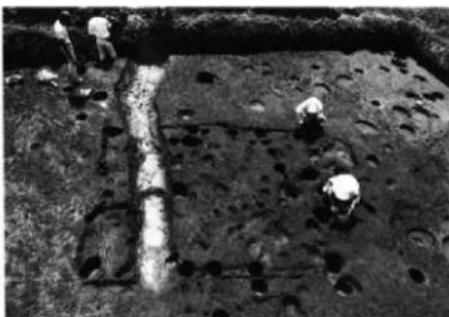
これらのことから、この包含層は弥生時代中期後半頃から堆積が始まり、後期には完全に埋め尽くされ、現在の地形に近い姿になってしまったと考えられる。大谷遺跡の谷におけるこのような埋没時期と変遷は、4~6次調査の中尾遺跡や8次調査の赤穂ノ浦遺跡の前面の谷においても共通する状況が見られた。

このような現象の原因については、地質、地形学や環境学など関連諸科学分野からの検討、究明が不可欠であるが、弥生時代における低地集落の拡大と拡散による丘陵の土地利用に強く関係していたであろうことは、席田遺跡群の尾根やその斜面に分布している遺跡の展開時期や存続期間と一致していることからも推測することができる。いわゆる尾根における開発の波が、それまでの深い谷を埋め尽くす環境変化を招くような大規模なものであったことを物語っている。ある意味では弥生時代における自然破壊、乱開発だったと断定しても過言ではなかろう。

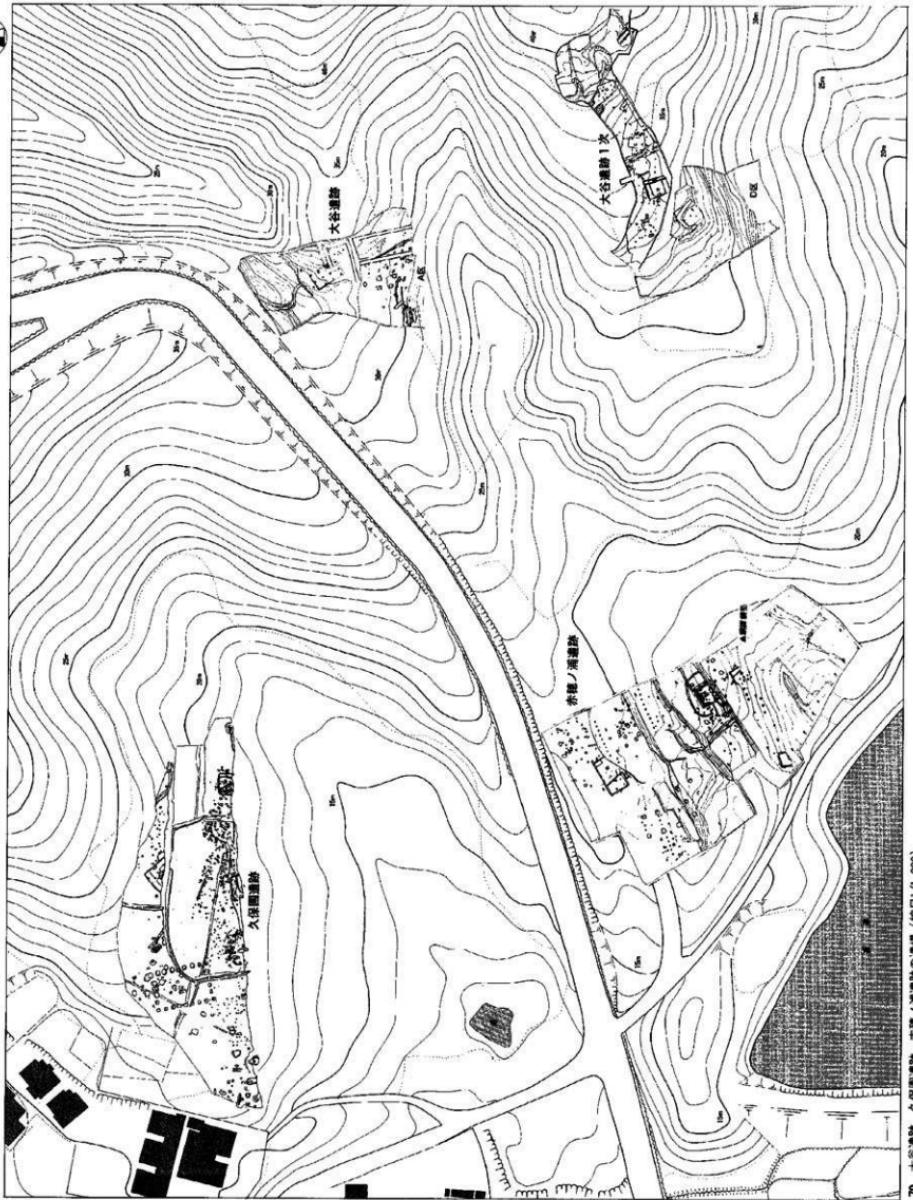
住居跡

1次調査では9軒が検出され、また旧道路建設でもその切り通しで1軒確認（遺跡登録名は上ノ浦遺跡）されているので、今回の4軒の住居跡を加えると合計14軒となる。この14軒が大谷遺跡の尾根に営まれていた住居跡の总数ではなかろうが、席田遺跡群では集落としての構造を最もよくとどめているといえよう。

A区第1号住居跡は、遺物包含層の堆積途中に造られており、その先後関係から弥生時代中期終末から後期初頭前後の時期が考えられる。同時期の一般的な住居跡に比較すると床面に整然と並んだ12本の柱穴は類例がなく、また集落の中心からもはずれていることなどから、はたして住居跡と考えていいのか疑問であった。ただ地山に掘り込まれた壁と壁溝を持っていることから掘立柱建物ではなく竪穴式であることは確かである。



71 井相田遺跡



1989年に調査された低地の遺跡である博多区井相田遺跡では弥生時代前期の遺跡であるが、周壁に12本の柱を配した竪穴式住居跡が普通の竪穴式住居跡と一緒に発見されており、席田遺跡群固有の遺構と言うわけではないが、その用途や住人の違いなどは、その構造の特異性からも当然考慮する必要がある。現代人の感覚からしても、室内の12本の柱はきわめて使いにくい。

A区第2号住居跡は、岐溝と排水の溝があることから住居跡と認定した。このように崖面に接して住居跡が營まれるのは席田遺跡群においては、そう珍しいことではない。

中尾遺跡の第2・3地点では、狭い階段状の斜面を利用するために、山側を削り出し、その堆土を崖に埋めて水平な敷地を確保している。この方法は現代の宅地造成とまったく変わらない工法なので驚かされる。これらの住居跡には、背面からの雨水対策として外部に排水溝が巡らされるのが多いが、最も風水害の被害を受けやすいことには変わりがなく、生活環境としては劣悪である。あえてこのような所に占地しているのは、住宅用地が尾根の上部だけではなく斜面にまで及んでいたことを示すものであろう。

D区では切り合った2軒の住居跡を検出した。1次調査の9軒のうち3軒が切り合っており、少なくともこの尾根には、弥生時代後期前半から2度の建て替えが行われたことがわかる。このことから集落としての存続期間を知ることができるが、次の古墳時代まで存続するわけではなく決して長期間にわたる集落ではない。

席田遺跡群は終戦後の長い間、米軍の弾薬庫として市民の立ち入りが禁止されてきた。このために最近の急激な土地開発から免れ、丘陵全体が山林としての自然景観が残っていた。この席田遺跡群の調査当初は、この山林という景観に惑わされたくらいがあった。もちろん前面の肥沃な福岡平野を生產基盤とする大集落の存在は、それ以前に発掘調査されていた宝満尾遺跡や金隈遺跡の成果からも予想されることではあったが、なぜこんな生産性の低い山間部へ進出してきたのか、農耕以外に生業があったのではないかという疑問や前提条件をフィルターにして遺構、遺物を理解しようとしていた。久保岡遺跡の5間×8間の掘立柱建物跡も、赤穂ノ浦遺跡の銅鐸鋳型も、そして大谷遺跡の尾根に展開している集落も、何か特別な歴史的性格を帯びた特殊な遺跡として認識し、評価しようとしていたのではなかろうか。例えば赤穂ノ浦遺跡を銅鐸製作地と仮定すれば、その経済行為などの蓄積として宝満尾遺跡の舶載鏡や1次調査の青銅製鏡先、そして今回の鏡片や鉄器を保有できるような集団の成長として語れるかもしれない。また他には例を見ないような掘立柱建物跡や竪穴住居跡も銅鐸の製作や祭紀に関わる施設、あるいは祭祀者の住居とも想像できよう。

しかし稲作技術の向上による生産量の飛躍的な増収が加速度的に人口増を招き、その解決策として弥生時代中期に扇状地や丘陵部の開墾、進出となつたという従来の説は、この席田遺跡群にも該当するであろう。

最近精力的に調査が行われている福岡県小郡市や筑紫野市における三国丘陵の発掘例からしても、丘陵、山間部の遺跡はここ席田遺跡群だけではないので決して特別視すべきではない。ただ三国丘陵においては、弥生時代前期から山間、丘陵部への進出が開始され、中期にはすでに丘陵全体の開発が完了しており、地域によっては遂に山から平地へということもあったであろうし、丘陵部への進出も一度だけではなく波状的に繰り返されたであろう。また水稻耕作だけではなく、各種生産の分業的な役割も考慮すべきかもしれない。いずれにしても類例がないからといって特別、特殊化するのは避けるべきであろう。

昨年、博多区那珂遺跡23次調査でも同じような大型掘立柱建物跡が検出された。このように低地遺跡での類例遺構の増加は、大谷遺跡を中心とする周辺遺跡の集落構成や景観が、低地集落と大きな違いがなかった事を示すようになってきた。ただ那珂遺跡群でも銅戈鋌型をはじめとして、多くの青銅器製作関係の遺物が見発されており、核的な集落であったことは言うまでもない。

席田遺跡群における発掘調査は、ほぼ終了したがこの地域における集落の実態に迫るには、まだまだ福岡平野、奴国全体を視点においての細かな追求が必要であろう。

青銅鏡について

A区で出土した鏡片の時期については、すでに述べたように弥生時代中期末から後期に舶載される中国前漢後半へ後漢代の鏡の一つと考えたが、つぎに鏡式について記す。

本鏡は形態的な特徴では、内区部分と段差の低い薄手の平縁であることから、前漢代の鏡式や、後漢末葉に登場する神獸鏡や画像鏡系統の鏡式は考え難い。前漢末葉から登場する規矩鏡や四乳鏡や、後漢代の「長宜子孫」などの銘をもつ連弧文鏡、細線式の獸帶鏡、レリーフ彫りで夔鳳や獸首を描出した單夔鏡、夔鳳鏡、獸首鏡・双頭龍鳳文鏡などの一部が考えられる。このうち、規矩鏡や獸帶鏡は、縁部を锯齒文・複線波文・流雲文などで飾ることが多いので、一応除いておく。さらに、これらの中で、縁部の内側に锯齒文がめぐるものは、四乳鏡・連弧文鏡である。四乳鏡は全体に面径が10cm以下の小型品が圧倒的に多い。本鏡の復元面径から考えると、連弧文鏡の中型鏡である可能性がもっとも強い。類例と考えられるものとして、福岡県嘉穂郡碓井町笠原や田川郡香春町採銅所宮原出土の連弧文鏡を挙げておきたい。



72 那珂遺跡の掘立柱建物跡

福岡市博多区 席田遺跡群

新立表古墳

2・3号墳



完成した「とびうめ園体」会場

遺跡名	新立表古墳 2・3号墳	調査番号	8414	遺跡略号	S TK
所在地	博多区東平尾字新立表 外	開発面積	1,400m ²	調査対象面積	1,400m ²
開発工事名	福岡市 陸上競技場建設造成工事	発掘面積	800m ²	調査期間	MS. 1/8~2/3

第1章 はじめに	
1	発掘調査に至るまで……1
2	発掘調査の組織と構成…7
3	周辺の古墳……2
挿図 3 周辺の地形図	
5	新立表 1号墳
6	貝花尾 1号墳
7	貝花尾 2号墳



第2章 発掘調査の記録

1	発掘調査の概要と経過……4
8	遠景
9・10	2号墳の作業
11	3号墳の作業
12	削られる古墳
13	競技場完成



2 新立表2号墳の調査

1 墳丘 5

14~19

現況図、墳丘図



2 埋葬施設

石室の掘り方 10

20~24

石室実測図

周壁 13

25~33

敷石 16

屍床 16

34~37

入り口部 18

38~39

墓道 19

40

3 出土遺物

須恵器 20

41~47

鉄斧 24

48~49

馬具 25

50~51

その他 26

52~53



3 新立表3号墳の調査

1 埋葬施設 26

54~59

2 出土遺物

土器 30

60~61

耳環 37

61



第4章 おわりに 31

62 宝満尾古墳

63~64 北ノ浦古墳

65~66 天井石

参考文献

席田遺跡群調査表

凡例と要約

- 新立表（しんたておもて）2号墳は、1981年の分布調査で確認された。席田遺跡群の中で標高の最も高い位置にある古墳で、これまで現状保存されていた。ところが国体のメイン会場となる陸上競技場の建設工事によって大規模な地滑りが起き、やむなく発掘をせざるを得なくなつた。
- 建設工事の造成は、新立表古墳の保存区域を越えて入り込んでおり、いわばルール違反の行為が地滑りの一原因になったことは明かである。石室のすぐ東側はすでに地割れが起き、きわめて危険な状況での発掘調査を強いられた。このため墳丘東側部については安全対策上調査を断念した。
- 同じ尾根の先端には1976年に新立表1号墳が確認されており、今回の古墳を2号墳と呼んだ。また表土除去作業でもう1基の古墳を検出し、これを3号墳とした。
- 2号墳の東側は版築状に盛土されているが、全体的に墳丘の残りはよくない。墳丘の実際の大きさは17m前後と推測され、西側の墳丘裾部は地山を削り出し下方からの錯覚を利用して墳丘をさらに大きく見せている。
- 埋葬部の掘り方は、東側の盛土をある程度積み上げた後に掘られており、長さ5.7m、幅3.9mの大きさである。
- 2号墳の埋葬部は、試掘時の予想に反して横穴式石室であった。しかも長闊壁の中央に入り口部を設けたいわゆるT字形石室と呼ばれる特異な構造である。
- 石室の主軸はN-59°-E。奥壁4.5m、袖部4.7m、北側壁2.29m、南側壁2.05mで、やや胴張りのある羽子板状のプランである。
- 入り口部は1枚の板石で閉塞され、長さ1.2mの短い墓道がつくが明確な石積みの痕跡は造らない。
- 石室には両側に2列計4列の屍床が平行に区画されている。床面は全面に角礫が敷つめられている。
- 石室内には2個の天井石が崩落していたが、その大きさからかなり急な持ち送りの構造が考えられる。また赤色顔料板が認められ、石室内部は赤く塗布されていたと思われる。
- 遺物は須恵器や鉄斧、馬具があるが、石室内からは4点のみで主に墳丘裾部から出土した。須恵器は少なくとも2型式あり、追葬の時期差とも考えられる。
- これらの遺物から2号墳は6世紀初め頃の築造と推測される。わが国のT字形石室の古墳としては、最も古い時期の古墳と言うことになるが、いまその系譜や伝播経路については明らかにできなかった。
- T字形石室の出現要因についても明かではないが、4列の屍床があることから2号墳の場合は家族墓的な追葬を強く意図、意識した結果だろうと考えた。
- 3号墳は墳丘が完全に失われている。石室も散石の一部を残すのみなのでその構造は断定できないが、南西に開口する半室の横穴式石室を考えた。
- 遺物は3号墳の副葬品と思われる須恵器、耳環の他に平安時代以降の陶磁器が出土しており、古墳崩壊後に祭祀的な場所として利用された可能性がある。また弥生時代の大型蛤貝石斧があり、大谷遺跡で推測した尾根開発の一資料となるであろう。
- 今回の調査とは直接関係ないが、山頂の松には人形が打ち込まれており、現代の民俗例として付け加えておく。

第1章 はじめに

1 発掘調査に至るまで

1980年に国体のメイン会場として東平尾運動公園が決まり、関連施設の建設計画が新たに加わることになった。このため1980年にテニスコート予定地の北ノ浦地区と、陸上競技場、サブトラック予定地の新立表、新立裏地区で遺跡確認のために分布調査と試掘を実施した。

新立表の南斜面では、須恵器の破片が数点採集され、頂上部では古墳埋葬部と思われる石材が露出していたために試掘したところ、堅穴系らしき石室が確認された。席田遺跡群の古墳としては最も標高の高い位置にあり、それに加えて埋葬部の形式からもきわめて重要な古墳であると判断し、公園建設課と保存のための協議を行った。この場所は陸上競技場建設地内に入っていたが、現状保存されることになった。ところが1984年から始まった建設工事は保存区域を越えて土取りが行われ、しかもも地滑りまで起き、急きょ発掘をせざるをえない事態となった。

2 発掘調査の組織と構成

調査委託 福岡市都市計画局公園建設課

調査主体 福岡市教育委員会

文化部埋蔵文化財課

柳田純孝、松延好文、

力武卓治、大庭康時

調査作業員

大部茂久、椎藤利雄、山崎光一、池田光男、山口満、三浦力、曾根崎昭子、桑野正子、井手口美代子、黒木静子、江越初代、関政子、古賀博子、野口ミヨ、高野皓代、間加代子、大庭智子、日野光嗣

整理作業員

村田喜代美

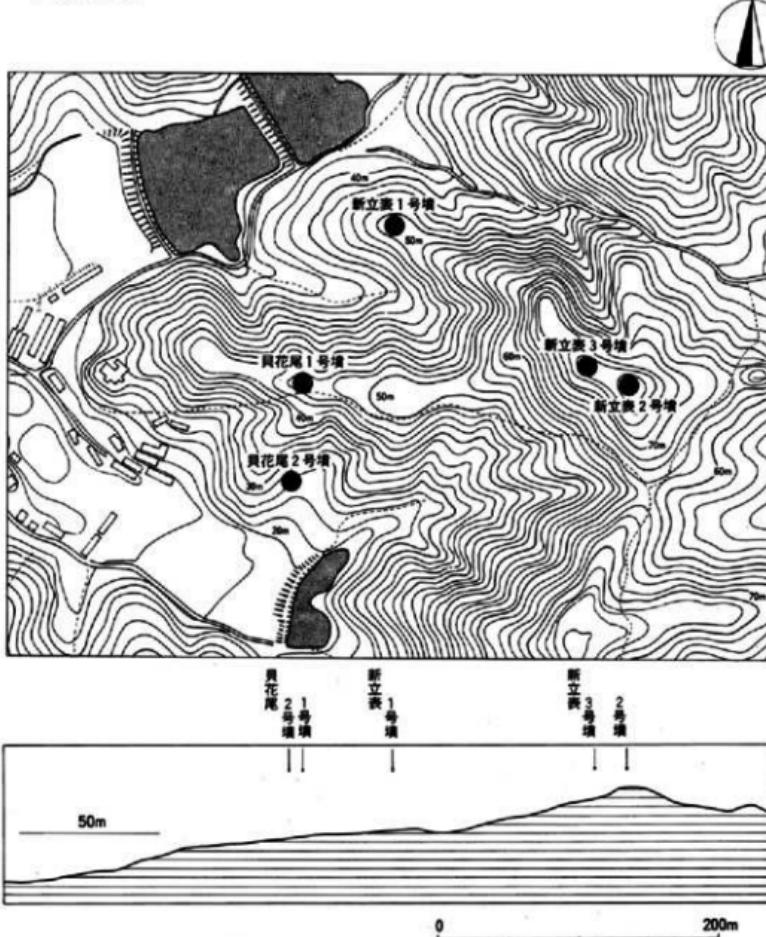


1 地割れが進む崖面



2 地滑りが起きた工事現場

2 周辺の古墳



3 周辺の地形と古墳 (縮尺1/400)



4 アスレチック場からの古墳展望

3. 周辺の古墳

月隈丘陵の山稜線上には、標高80m前後の山頂状の高まりがいくつかある。今回発掘するようになった新立表2号墳はそのような山頂部に位置している。先に報告した大谷遺跡と同じように、この山頂部からも多くの中丘陵が東西の平野部に向かって派生している。西に伸びた丘陵の先端、小字「新立表」では、1976年に試掘調査が行われ、腰石だけを残す石室が確認された。

この新立表1号墳は、現状保存が決定したために石室内の掘り下げはされず、周辺の地形や墳丘の測量と石室の実測のみが行われた。埋葬部の規模や副葬品などの細かな発掘データはないが、報告書によると、埋葬部は南西の丘陵斜面に開口する両袖の横穴式石室で、直径10m以上の墳丘が想定されている。

一方、西に伸びる丘陵にも貝花尾(かいばなお)1、2号墳の2基の古墳が発掘されている。

貝花尾1号墳は、尾根に造られた直径12mの円墳で、長方形プランの竪穴系横口式石室の埋葬部をもつ。直刀、鎌先などの鉄製品や須恵器などが副葬されていた。5世紀後半代の築造であろう。

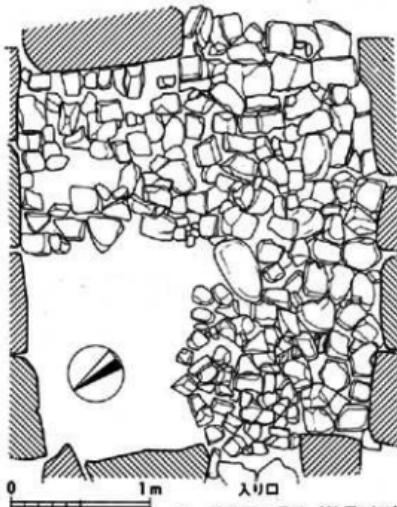
貝花尾2号墳は、丘陵の南斜面に造られた直径10m以上の円墳である。埋葬部は約2.8×2.5mの方形プランの石室、腰石だけなので上部構造を明かにしない。床面は敷石でその中央には1個の円碟が置かれている。副葬品には須恵器の有蓋高杯、壺、提瓶や鉄製品の斧、直刀などがある。築造年代は6世紀初めごろであろう。



5 新立表1号墳



6 貝花尾1号墳



7 貝花尾2号墳 (縮尺1/40)

第2章 発掘調査の記録

1 発掘調査の概要と経過

1984年12月上旬、博多区南八幡遺跡の調査が完了したので、次の調査予定地である大谷遺跡に移動して発掘調査に着手した。ところが12月中旬になって公園建設課より新立表2号墳が崩壊しそうだと連絡があった。

東平尾運動公園では「緑豊かな自然をそのまま生かして」という基本構想のもとに公園作りが進められてきたが、現実には多くの遺跡が施設建設のため消滅している。また貝花尾2号墳のように保存を確約しているながら破壊された事例もあり、「またか」という怒りがその時の率直な感想であった。

さっそく現地を踏査したところ、保存範囲を越境して土取りが行われ、その造成は石室のごく近くまで及んでいた。崖面では地割れがいたる所に起こり、丘陵全体が東に移動しているような感じである。地表は何枚ものシ



8 志免町側から見た新立表古墳



9 2号墳石室の掘り下げ



10 発掘作業のようす

ートで覆われ雨水の侵入が防がれてはいるものの、それまでに十分に水分を含んだ丘陵は、大規模な地滑りがいつ起こっても不思議ではないような状況を呈していた。

調査は緊急を要するものの、危険箇所の表示や山頂の古墳までの道路取り付けなど作業員に対する安全確保を最優先とし、これらの準備を造成工事を受注していた西光建設株式会社が年内に済ませることになった。

年明け早々の1月8日から調査開始。調査委託が大谷遺跡と同じ公園建設課のために、大谷遺跡は中断できたが、しかし年度末に予定していた博多駅築港線第2次調査の延期はどうてい出来ないことがあった。後半は二つの遺跡を同時に発掘するという異常な体制になった。寒風にさらされ、またいつ起るかわからない崖崩れにおびえながらの作業であったが、可能な限り発掘面積を広げるように努めた。この結果、2号墳は後で記すようにT字形の横穴式石室という珍しい構造の埋葬部であることがわかった。また尾根の先端部でもう一つの古墳を検出できた。2月26日にすべての作業を完了し、博多駅築港線の発掘現場に合流した。途中、2号墳の移築復原の話も公園建設課より出たが実現されないまま、2基の古墳は3月22日、重機が一気に削平してしまった。延べ日数が41日と長かったのは、厳寒期の悪天候のせいばかりではなく、1遺跡担当者1人で能率の悪い作業をせざるをえなかったのが最大の原因である。幸い事故は起きなかつたものの安全対策ばかりでなく極めて問題の多い遺跡であった。



11 3号墳の石室検出



12 古墳を削る重機



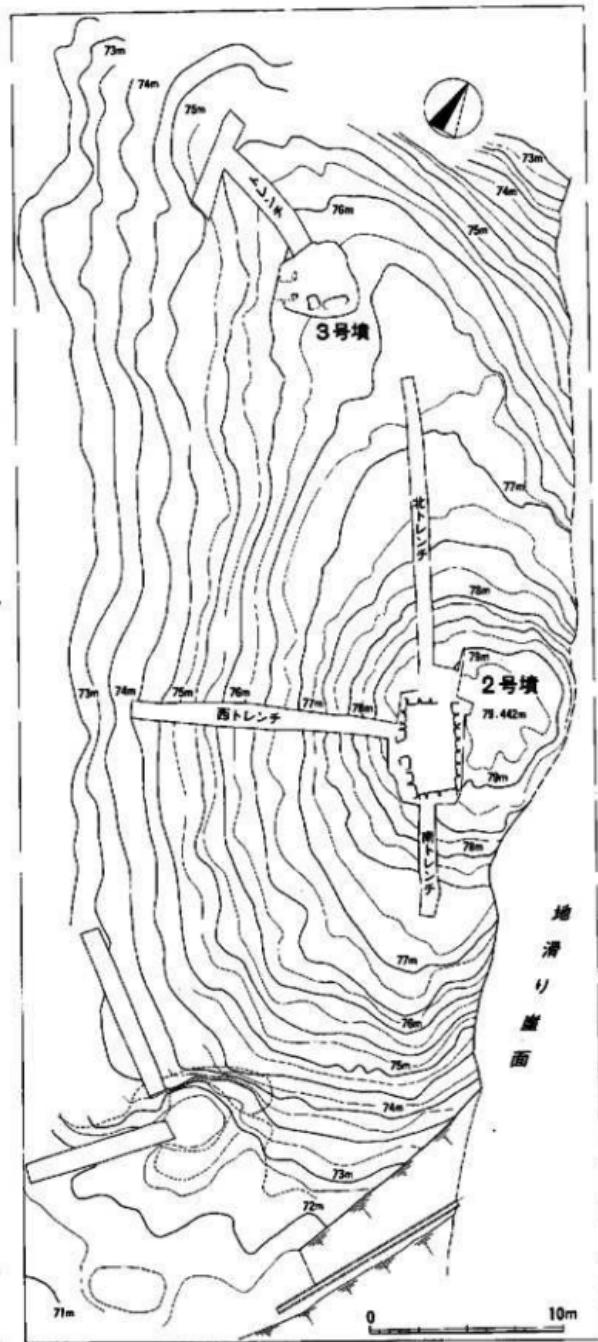
13 完全に消滅した古墳（丸尾展望台より）

2. 新立表2号墳

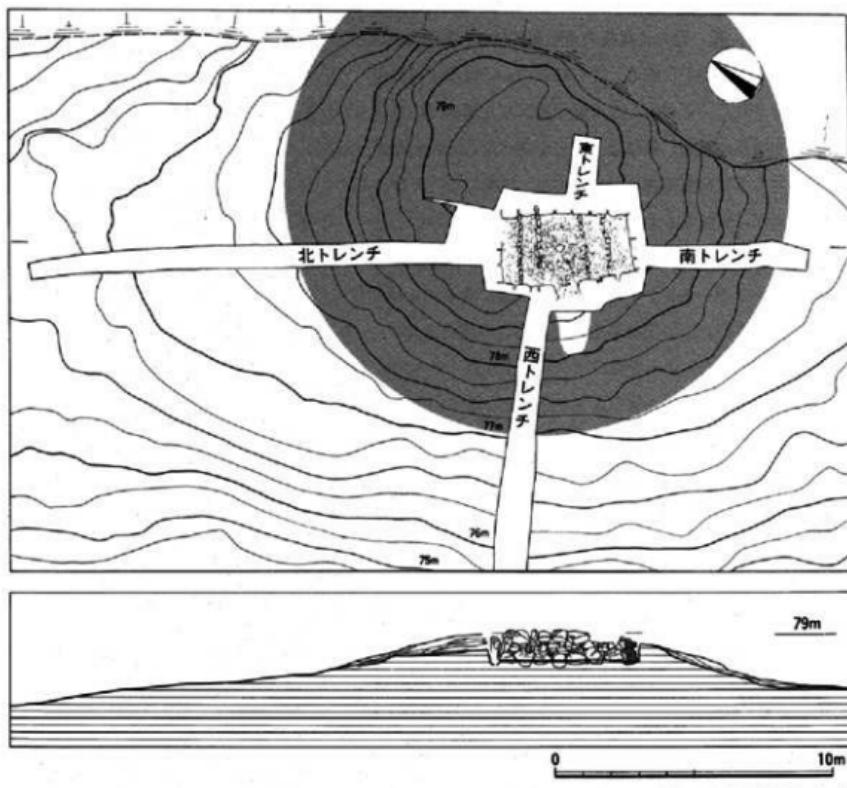
福岡国際空港横の東平尾のバス停から東に曲がって都市計画道路席田浦田線の道を車で行くと、東平尾の集落を通り過ぎてすぐに運動公園の中に入る。間もなく道は右に急カーブし、勾配がきつくなる。登りつめた所が「とびうめ園体」のメイン会場である。陸上競技場はすでに完成し、その偉容が迫ってくる。会場入口の右手には上部を削平され、崖面に芝が張られた低い丘陵の残骸を見ることができる。新立表2号墳はこの頂上にあった。

昭和初期の月隈丘陵の地図によると、現在の丸尾展望台から北北東に向かって山稜線が伸びている。この山稜線は高低差が激しく、決して穏やかな山容とはなっていない。

2号墳は標高約79mのこのような高まりの一つに作られていた。頂上部の等高線の間隔は裾部よりも広く、北西方向にわずかながら平坦面がある。そのまま伸びて尾根となり、その先端部に1号墳が立地している。その距離は約400mで、比高差は約37mを測る。



14 2・3号墳の現況図（縮尺1/300）



15 2号墳の墳丘図（縮尺1/200）



16 2号の墳丘（西より）

1 墳丘 雜木伐採後の地形測量では、等高線は尾根と同じ方向に流れているが、標高75mからは長楕円形に回る。さらに77.5mはほぼ正円に巡っていることから直径17m前後の墳丘が予想された。その中心は試掘で確認した埋葬部の東3mの位置に片寄り、やや不自然であった。まず墳丘の規模、外部施設などを調べることにしたが、造成工事によって墳丘の破壊は、挿図15のように埋葬部間近かまで迫り、東側についてはきわめて危険であったために、調査は墳丘の西側に展開するように決めた。まず埋葬部の中心から、この崖面に沿って北、南トレンチ、そして直角に西、東トレンチを設定した。

北トレンチ トレンチ全長17m。基盤になる地山は埋葬部中心より約6.5mまでは平坦で、ここで高さ約25cmの段落ちがある。現在の墳丘土は8.3mまで残っているが、段落ちしている所までは地山上に黒みを帯びた黄茶色土が薄く乗っている。またその上部の土層も濃淡の黄茶色土が互層になって版塗のような状態を示していることなどから、段落ち部までを本来の盛土と推測した。表層は土の繋りが悪く、明らかに二次堆積である。

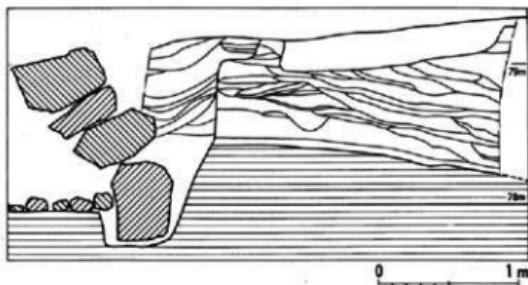
南トレンチ 南側壁ですでに地山が露出し、そのレベルは北トレンチに比べて26cmも高くなっている。地山はそのまま南に傾斜し、埋葬部中心から約7mで緩やかになる。この地山の上には3枚の土層があるが、水平ではなく二次堆積である。本来の盛土はすでに流出してしまっている。

西トレンチ 地山は埋葬部中心から約3.9mまでは水平で、北トレンチと同じような黄茶色土を主とする土層が見られる。この西側は地山が露出してそのまま谷に落ちている。6.5m付近で数個の石が据を回るように現れ、外護列石と思われたので拡張したが、自然の露頭であった。

東トレンチ 北、南、西の3本のトレンチでは盛土の流出が激しく、盛土の範囲や埋葬部掘り方との関係など不明な点が多くあった。東



17 東トレンチの盛土



トレンチは、崩落の危険があったために2.5mの短いトレンチであるが、興味深いことが多い。盛土は黄茶色土と黒色土を基本にして数種類の土を互層にし、また各土層の厚さも10cm以下と薄い。先の3本のトレンチに比べるときわめて丁寧な作業を繰り返している。また石室の側壁を構築しながら盛土が行われているのに対して、東トレンチでは、石室床面より約80cm以上の盛土が先に行われているのが観察できる。これらのことから墳丘の直径は約17mと推測される。古墳築造前の自然地形は、埋葬部の北から東南にかけて高く、北西から南にかけては斜面となっていたことがわかる。この斜面を最大限に利用して、裾は地山を削り出してあたかも墳丘のような視覚効果を狙っているようである。また埋葬部をわざと斜面側の西に寄せて構築し、さらに埋葬部の東側に高い盛土を施した。このような一見不自然な墳丘の構造は、入り口部の位置や盛土の土量など多くの要素が原因で決定されたものではあろうが、開口している西側下方からの視線を大いに意識していた結果であろう。

2 埋葬施設 1981年の試掘では、古墳の確認をするのが目的であったために、周壁の上部より2段まで掘り下げるのみで再び埋め戻した。その時の観察では、石室の規模は長さ約4.5m、幅約1.6mの細長いプランで、南に入り口部をもつ竪穴系の構造が推測された。ただ石室内にはすでに天井石が落込み、周壁の残りも悪く、副葬品の遺存はあまり期待できそうもなかった。

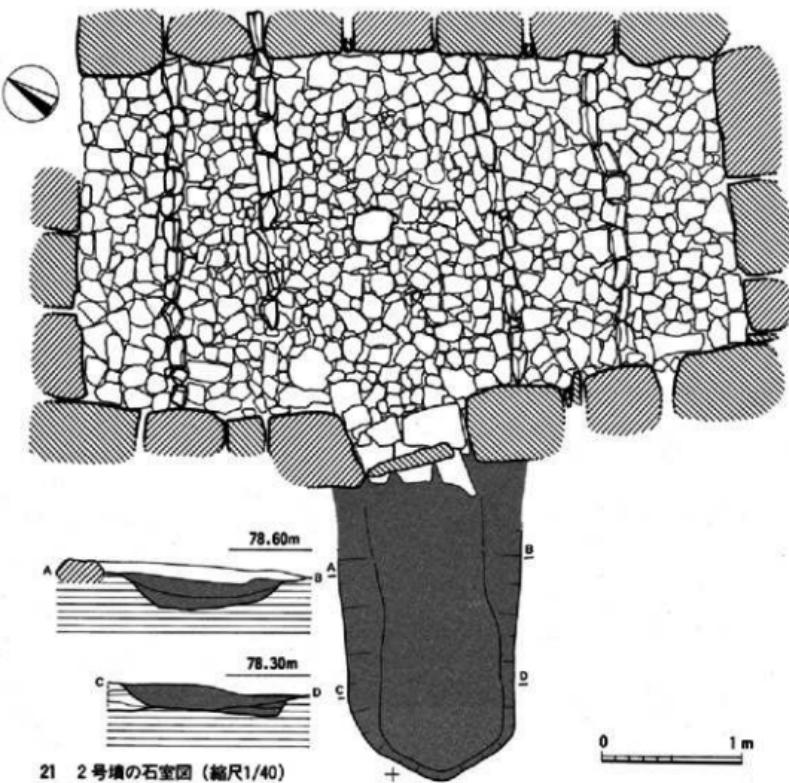


19 2号墳の石室（南西より）

石室の掘り方 地山を $3.9 \times 5.7\text{m}$ の長方形に掘り込み水平な床面を作る。その深さは東トレントでは約50cmを測る。さらに周壁の腰石部は床面よりも20cm前後深く掘り込んで安定を図り、石室が構築される。石室は長方形のプランであるが、長側壁の西壁幕道が取り付き入り口部が造られている。いわゆるT字形の横穴式石室である。したがって長側壁の東壁が奥壁、短側壁の北、南壁が側壁と言うことになる。内法は奥壁が4.5m、北側壁が2.29m、南側壁が2.05m、袖部壁が4.7mである。石室の主軸はN-59°-Eである。床面には角礫が散かれ、奥壁に平行して四つの屍床がある。



20 2号墳の石室（北より）



21 2号墳の石室図（縮尺1/40）

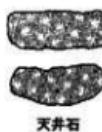
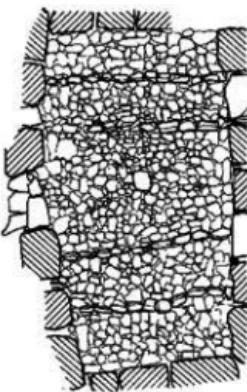


22 2号墳の石室（北より）

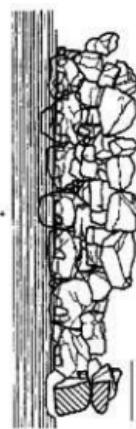
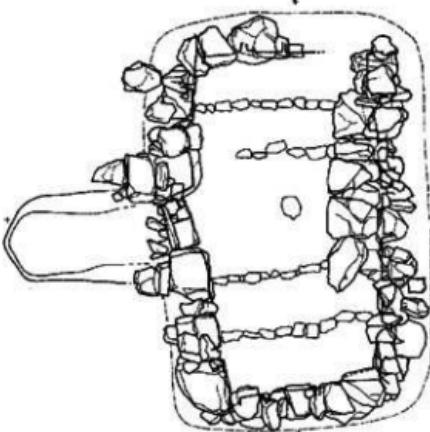


23 2号墳の石室（東より）

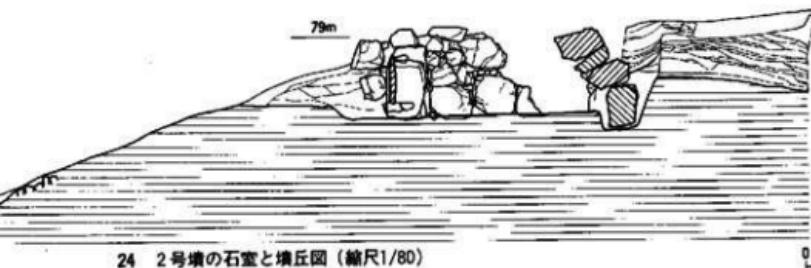
12 石 室



天井石

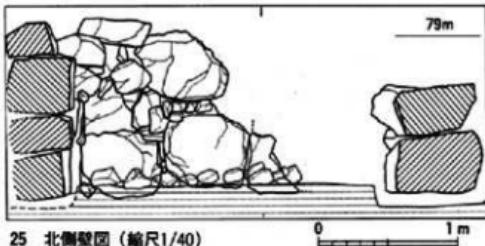


75m



24 2号墳の石室と埴丘図 (縮尺1/80)

北側壁 コンクリート製の測量杭設置工事で約半分が壊され、現在は腰石3個と2~4段の積み石が残る。内法2.29m。腰石は横に立てられその面は揃えられているものの、2段目からは大きさも不揃いで目路も通っていない。積み上げはほぼ垂直である。

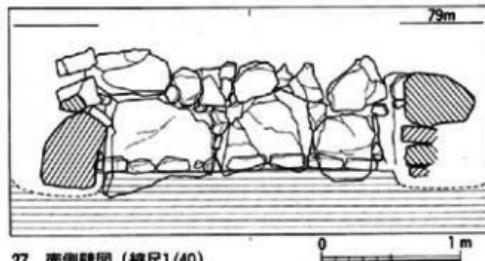


25 北側壁図 (縮尺1/40)



26 北側壁

南側壁 内法は北側壁よりもやや短く2.05mである。奥壁に対し直角ではなく96度と開いている。3個の腰石は北側壁よりも大きく、床面からは75cmの高さである。2段目は6個の石が雜に小口積みされており、間にには角砾が充填されている。



27 南側壁図 (縮尺1/40)



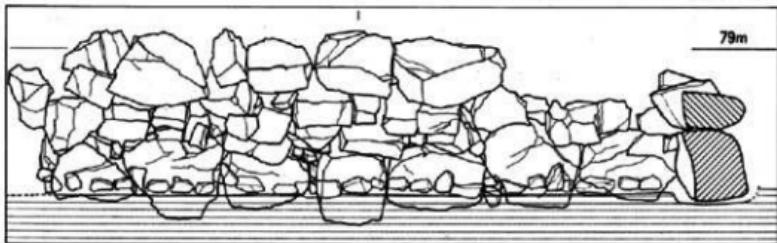
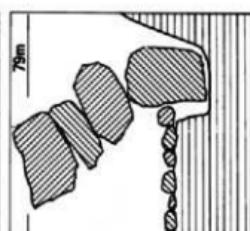
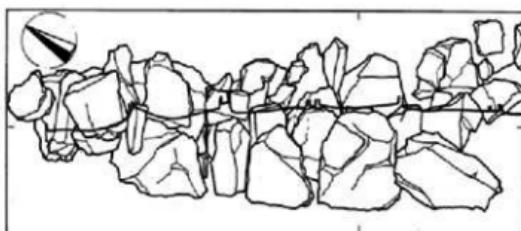
28 南側壁

29 奥壁
礫石より4段目29 奥壁
礫石より3段目

奥壁 内法4.5m。内傾した4段が残っている。この傾きは持ち送りの角度を示す可能性があったことから、上部より実測を繰り返しながら取り外していった。各段の面は描っているものの図30でわか



2の側面



30 奥壁図（縮尺1/40）

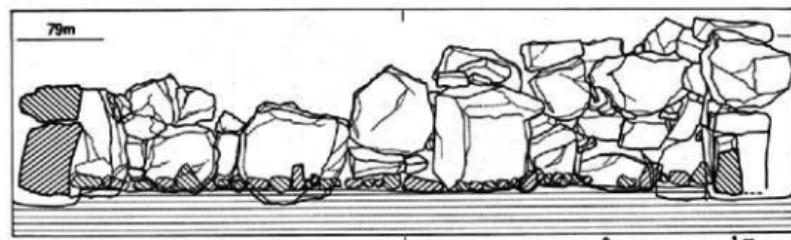
0 1m

るよう に 2 段目から 崩壊している。腰石は 7 個。直線ではなく中央部がわずかに膨らんで いる。積み上げ方法は両側壁と同じように腰石は立てて、2 段目からは小口積みである。北東隅より 2、3 番目の腰石の間に細長い角礫が差し込まれているが屍床区画石の延長線にあり、石室の設計を考える上で注目される。

西側壁（袖部） 腰石は入り口部を中心 北に 4 個、南に 3 個である。入り口部で最も膨らみ、奥壁との幅は 2.6 m を測る。内法は直線で 4.2 m、実長 4.7 m である。他の側壁に比べて腰石は不揃い で、その上の積み方にも統一性がない。



31 北西隅の石積み



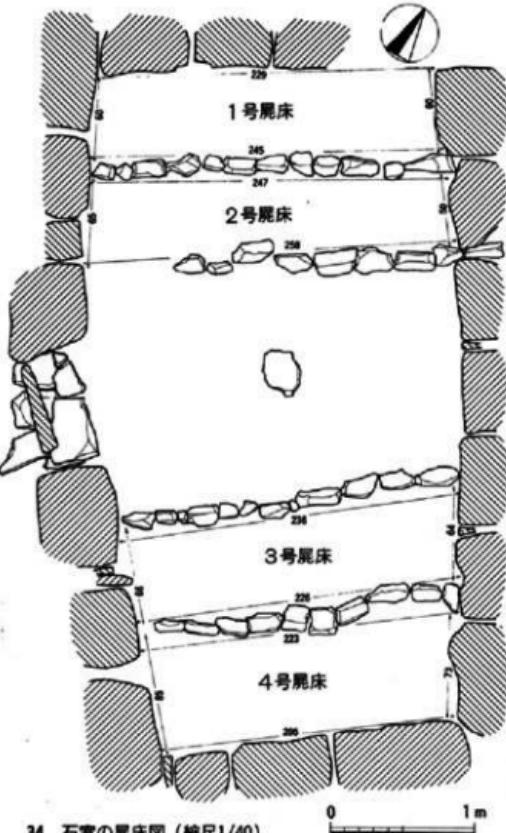
32 西側壁図 (縮尺1/40) 0 1m



33 西側壁

石 石室の残存状況はきわめて悪いが、床面には敷石が完全に残っていた。敷石は幅4~8cm、長さ5~15cm大の角礫が用いられている。腰石に接する周囲から整然と敷詰められており、まったく隙間がない。床面の中央付近はやや小さめの石が多い。石室の実測割付は、南、北側壁の中点を結ぶ線の中心に機械を設置して行った。この点には一回り大きい平たい石が置かれていることに気が付いた。つまり石室はこの石を基点にして設計、構築されているようである。

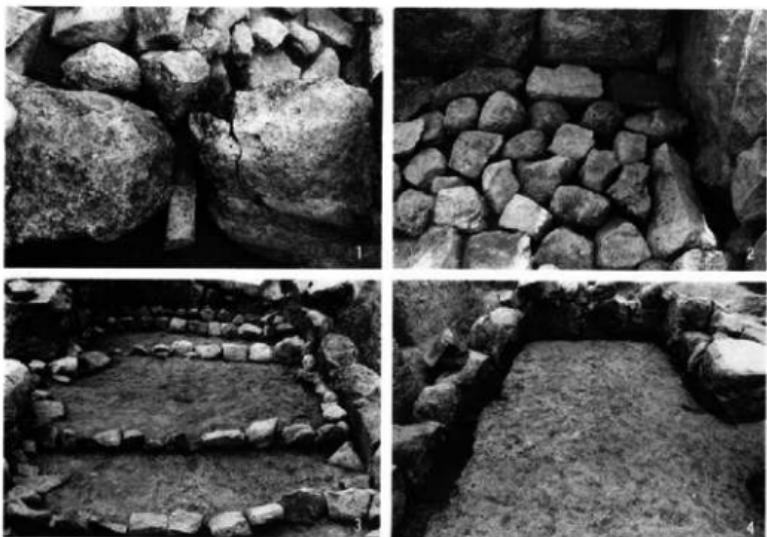
屍床 屍床は両側壁に寄って各2列、計4列が設けられている。その区画は、10~12個の長方体状角礫の側面を上にして並べ、両側から敷石で押さえている。いま奥壁に向かって左の北側壁から1号~4号屍床と番号を付けた。1、2号と3、4号は互いに平行ではなく南、北側壁の方向に平行になっている。



34 石室の屍床図 (縮尺1/40)



35 屍床の埋葬規定 (奥壁側を横位としているが、各屍床の計測によるとすべて入り口部(西側)の方が幅広い。)



36 床面の各部 (1. 尾床区画石が腰石の間まで入り込んでいる
2. 腰石は腰石部に大きな角礫が用いられている
3. 尾床区画石を残した状況
4. 腰石をすべて取りのぞいた状況)



37 石室の尾床

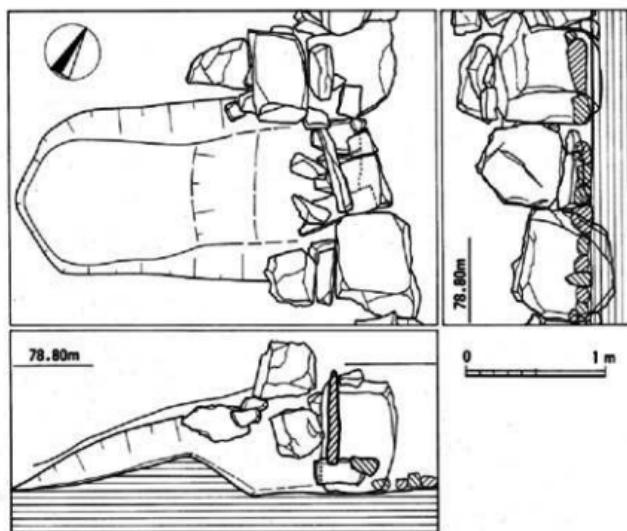
入り口部 試掘の時は、石室の北壁が南壁に比べて幅が広く羽子板状に近いプランであることから、南側に開口していると想定していた。ところが南側壁には入り口の施設はなく、また半分が壊れている北側壁にもそれらしき痕跡はなかった。西側壁の北から2.25cmで腰石がない部分があり、ここが入り口部であることがわかった。入り口の幅は約90cm、両側は大きな石が据えられている。特に北側の石は幅70cm、高さ80cm、厚さ55cmで、自然石の平坦面を意識的に入り口と石室内側に向いている。入り口部は、石室掘り方より西に幅約1.3m、長さ50cmに張り出して床面と同じ深さに掘り込み、敷石よりも大きい偏平な石を3個並べ、さらに2個の石を積み、この上に板状の石を立てている。この石は将棋の駒形をした高さ62cm、厚さ10cm弱の大きさである。黄茶色土を埋める途中に外側から2個の石を据え、倒れるのを防ぎ閉塞している。



38 石室の入り口部

- (1. 閉塞状況。石室内側より)
- (2. 閉塞状況。右側が基道)
- (3. 板石をはずした状況。石室内側より)
- (4. 入り口部。敷石をすべて取りのぞいた状況。基道より)

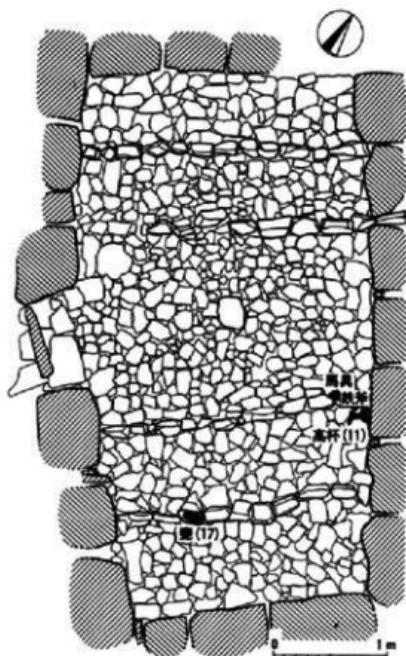
墓道 入り口部の
さらに西側に長さ
2.2m、幅1.3mの
墓道がつく。墓道
は、途中で約20cm
高くなっている。
入り口部の袖石に
接して数個の角礫
が盛土中に置かれ
ている。これは墓
道の側壁と言うよ
りも、入り口部の
補強として置かれ
ているようである。



39 入り口部と墓道（縮尺1/40）



40 墓道の土層



41 随物の出土位置（縮尺1/50）

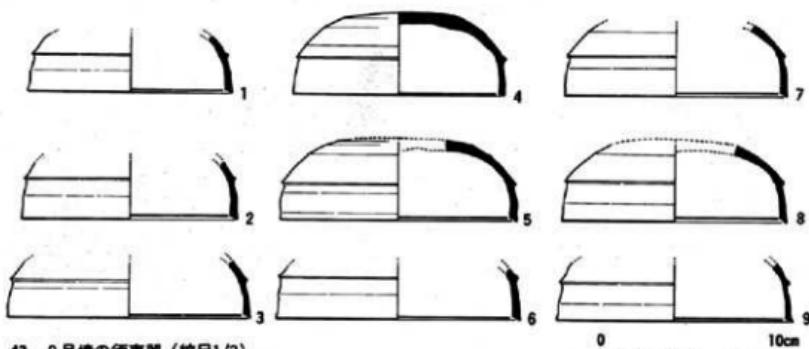
3. 出土遺物

遺物の出土総数はきわめて少なく、須恵器20点、鐵器3点を図化できたにすぎない。これらは、石室の崩落土や墳丘西斜面で出土した。石室の敷石上で検出されたのは、11の高杯、17の壺、鐵斧、馬具の4点のみである。



42 随物の出土状況（南より）

須恵器 杯、高杯、壺、提瓶の器種が出土した。1～9の杯蓋は、主に西トレント墳丘裾部で出土した。当初はある程度のまとまりがあることから、墳丘供獻とも考えたが、墳丘盛土の二次堆積土の中に含まれているものが多く、また細片となっていることなどから、追葬あるいは

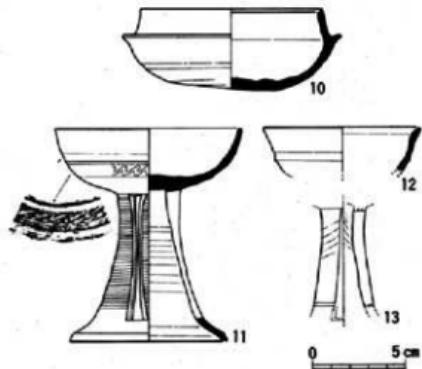


43 2号墳の須恵器（縮尺1/3）

は盜掘時に石室より取り出されたものであろうと推測される。1は口径11cm、体部高2cm、丸みのある天井部がつくのである。2は口径11.6cm、外面は灰色、内面は濃灰色を呈する。3の口径はやや大きく13cmを測る。口縁端部は鋭く切り込まれている。4は接合復原できた。口径11.4cm、器高4.4cm、口縁部高は2cmである。丸みのある天井部は約 $\frac{1}{5}$ がヘラ削りである。天井部内面は回転横ナデ後にナデ調整。5は口径12.8cm、胎土は精良ではないが砂粒は少ない。口縁部は微妙に湾曲し、口縁端部は鋭い段をつける。6は口径13.2cm、口縁部はほぼ垂直に立っている。7は口径12.6cm、天井部は焼成時に灰を被っている。ヘラ削りは天井部の $\frac{1}{4}$ に施す。8は口径12.2cm、回転横ナデ調整はあまり丁寧ではない。口縁部はほとんど凹凸がなく、わずかに外に開いている。9は口径12.8cm、口縁部の厚さは均一ではない。

杯身 10は杯蓋と同じように西墳丘裾で出土した。口縁部の一部を欠いているが接合してほぼ完形品に近くなかった。口径10cm、受け部径12cm、器高4.3cm、受け部は水平でなく、上方に小さく突出している。たちあがりは長さ1.6cmで、内傾している。端部内面は段がつく。底部のヘラ削りは $\frac{1}{4}$ に及んでいる。胎土には小砂粒が多く、調整も丁寧ではない。

高杯 11は3号屍床の奥壁に接して出土した。敷石の上ではあるが、すでに杯部と脚部が割れしており埋葬時の状態を示すとは考えにくい。無蓋高杯で、杯部には浅い凹線を2条巡らし、その間に波状文を付けている。口縁部は丸くおさめる。口径10.1cm。脚部は細長く、1段の長方形透かしを3方に入れている。切口は鋭利だが、焼成時に変形している。脚裾は大きく開き、端部は緩く屈曲して内面はやや凹状



44 2号墳の須恵器（縮尺1/3）

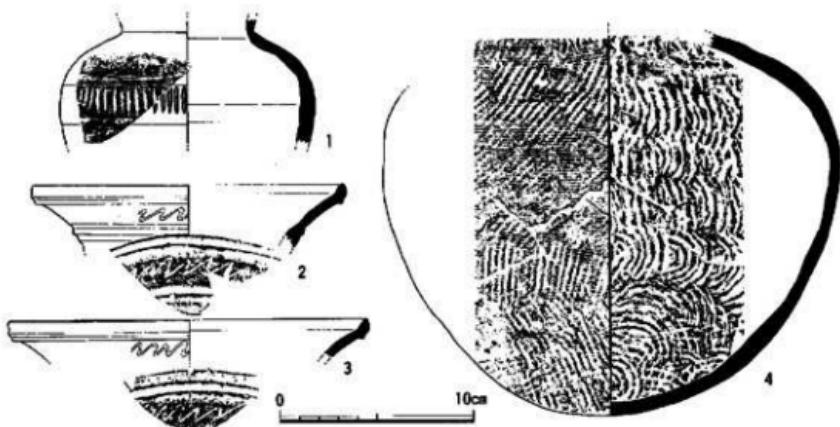


45 2号墳の須恵器

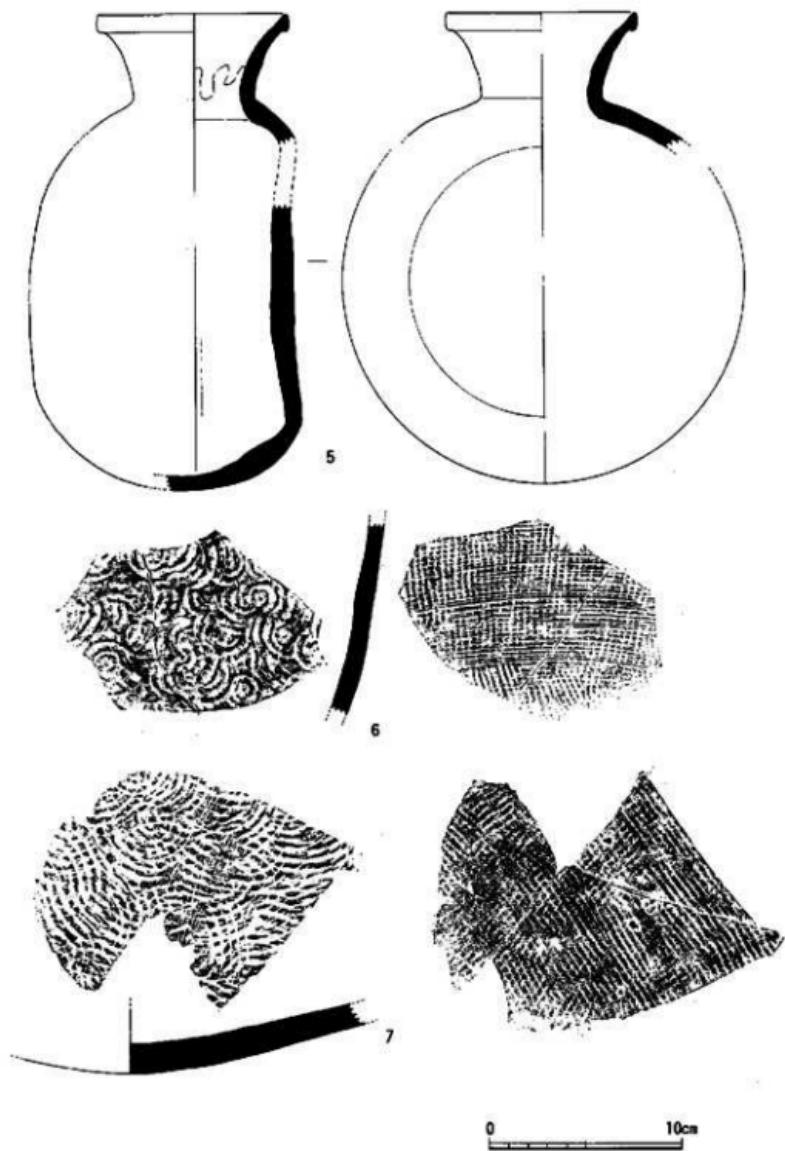
となる。脚端径8.5cm、器高11.4cm、脚高8.1cm。内面は灰色、外面は濃灰色である。12、13はともに石室崩落土より出土した。12は無蓋高杯の杯部小破片。杯部はにぶい小さな突帯を摘み出しただけで、他に装飾はない。口縁部は11のように丸くおさめないで、小さく外に開く。口径8.6cm。13は高杯脚部。透かしは1段3方で、長方形であろう。裾部の上方には、細かい沈線を1条巡らす。脚部はきわめて細く、しばり目が見られる。

壺 14は胴上半部の破片で、石室崩落土から出土した。体部最大径は、中位よりやや上にあるが、肩の張りは弱い。体部には板材の押圧文が施され、上半部には灰がかかっている。頸部がわずかに外に開く小型の短頸壺であろう。

壺 15~17、19、20のうち17以外は、石室崩落土あるいは墳丘西側で出土した。15~17は小型の壺である。15の頸部は朝顔状に大きく開き、端部を上方に屈曲して、そのまま丸くおさめて口縁部にしている。外面には小さな断面三角形の突帯をもつ。頸部の中ほどには、にぶい突帯がありこの上方に波状文を巡らしている。調整、施文ともに雑である。口径16.2cm。16も同じ様な特徴をもっているが、口径が18.8cmと一まわり大きく、口縁端部も先細いなどの違いがある。17は3、4号屍床の区画列石の上に4点の破片となって出土したが、この破片と石室崩落土の破片とが接合できた。したがって石室の副葬品であることは間違いないが、対象となった屍床までは明らかにできない。体部は丸底から緩やかにのび、上半部で反転して頸部へとつながる。最大径は23.7cm。内面は円形の叩きで、底部より上方の叩きは横方向に移動しての作業が行われている。頸部近くは部分的にナデ消されている。外面の平行叩きは、底部周辺が右下がり、中位が継、上部が左下がりである。さらに上半部にはカキ目が加えられている。19、20は大型



46 2号墳の須恵器 (縮尺1/3)



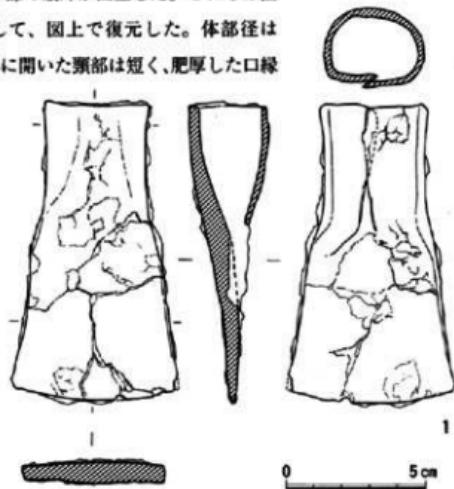
47 2号墳の須悠器 (縮尺1/3)

甕の破片。19の外面は平行叩きの後にカキ目調整。胎土の砂粒は少なく、焼成もよい。20の外面には中心から逆時計回りの螺旋文があることから、底部の破片とした。

提瓶 18は石室の崩落土より口頸部と体部の破片が出土した。これらは直接に接合できないが同じ個体と判断して、図上で復元した。体部径は20.3cm、背面はわずかにへこんでいる。外に開いた頸部は短く、肥厚した口縁部がつく。肩にかけて自然軸がかかり美しい。現存部には把手は見られない。

鉄器 鉄斧と馬具の轡が出土した。

鉄斧 3号屍床の高杯（11）を取り上げると、この下に鋸びぶくれた袋状鉄斧が現れた。現存長10.8cm。袋部の折り返しは一部が完全に重なっている。上端の断面は蒲鉾形で 4.8×2.9 cmである。肩はないが袋部の下端でわずかに膨らみ、先端の刃部にかけて外に湾曲しながらのびている。弧状の刃部は幅約6cmを測る。

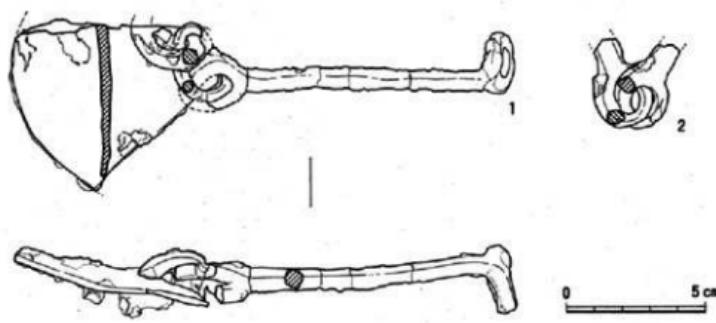


48 2号墳の鉄斧（縮尺1/2）

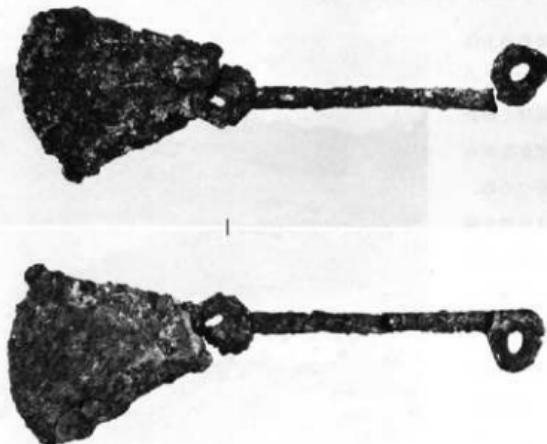


49 2号墳の鉄斧

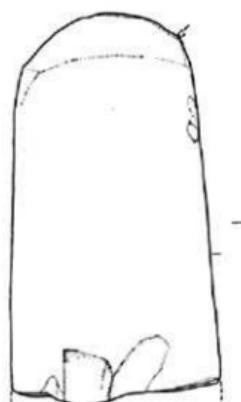
馬具 高杯、鉄斧とは3号屍床の区画石を挟んでごく接近して出土した。出土時には細片となっていたが繕び落しの結果、図のように接合できた。この他に8点の破片がある。2は轡の鏡板、引手、遊環、街が接着している。鏡板は最大厚約4mm、本来の形状は推測できない。遊環は鏡板の外側に付いている。引手の長さは約11.8cm。手綱をつなぐ環の外径は約2.2cmで、その傾きから轡の左側か。3は二連式街の連結部であろう。外径は引手と同じようにどちらも約2.2cmである。



50 2号墳の馬具（縮尺1/2）



51 2号墳の馬具



0 5 cm



52 表掲された石斧（縮尺1/2）



53 石斧

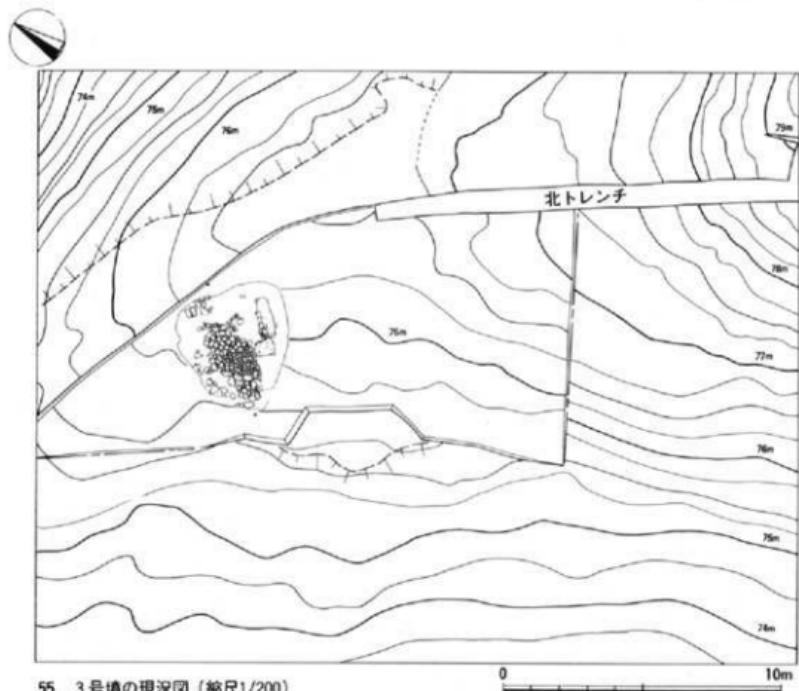
石斧 2・3号墳の間で出土した弥生時代の大型
蛤刃石斧である。刃部近くで折れ現存長13.8cm、
断面は約6.7cmの楕円形。玄武岩質。

3. 新立表3号墳の調査

2号墳は丘陵の頂上部に位置しているが、この丘陵は北西に延びて等高線の間隔がわずかながら広がり平坦面をつくる。この先端部で3号墳を確認した。2号墳からは約20m離れている。墳丘の盛土は完全になくなっているために、表土の除去作業をして初めてその存在がわかった。



54 3号墳



55 3号墳の現況図（縮尺1/200）



56 3号墳（北東より）



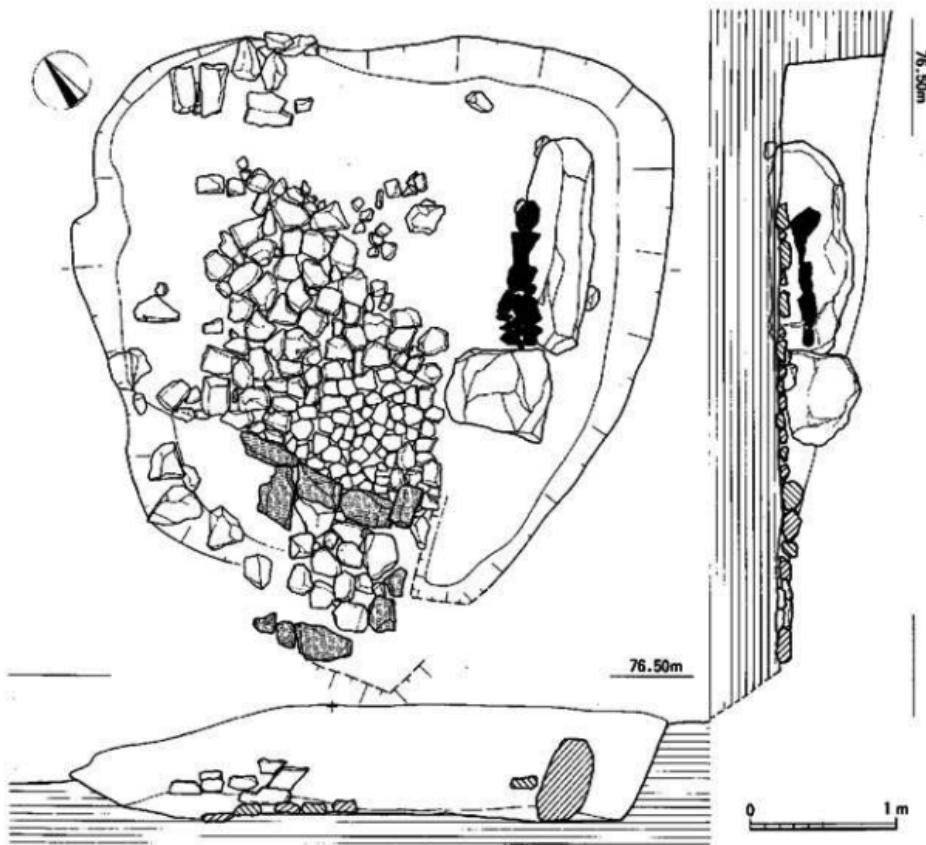
57 空から見た2・3号墳



58 3号墳の石室

1. 埋葬施設

墳丘の大きさについては、いま盛土がまったく残っていないこと、さらに地山の整形も認められないことなどから明らかにできない。石室の掘り方プランは、北東側を底辺とする台形状をしている。各辺は直線ではなく、また各コーナーも丸みがある。長さは北東壁が約3.5m、南東壁約3.8m、南西壁2.3mである。北東壁はほぼ垂直に掘り込まれ高さは78cmを残している。床面は水平だが、壁は南北方向に次第に低くなり、南北壁では15cm前後となる。掘り方内には腰石と思われる2個の石と敷石が残っている。南東壁の2個の石のうち大きい偏平な石には根固め石が見られるが、もう一つは床面から浮いており、動かされているようである。敷石は角礫を用いており、本末は全面に敷かれていたのであろう。特に南北側には大きめの角礫が使わ



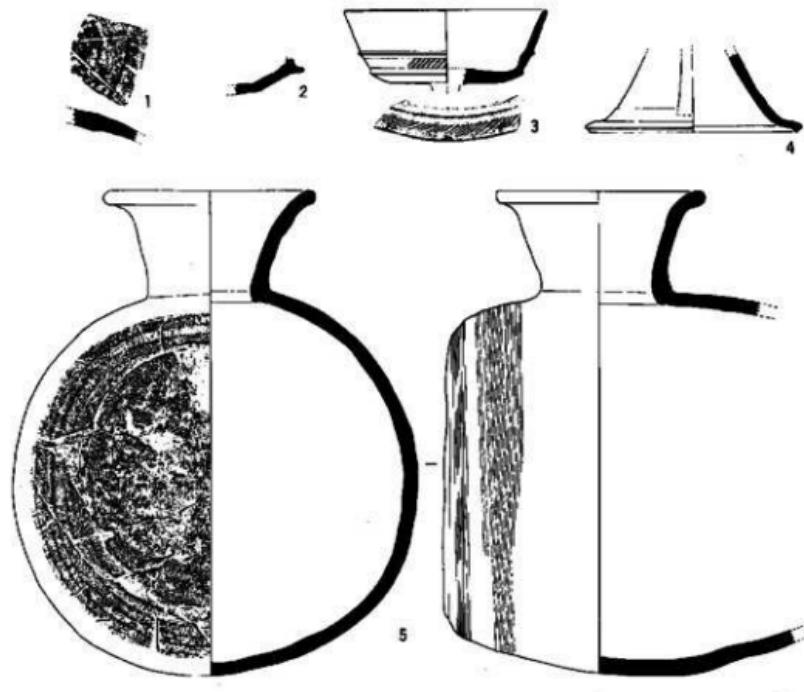
59 3号墳の石室図（縮尺1/40）

れ、図でアミをかけた石は側面を上にしている。この部分を後遺部として、単室の横穴式石室を想定した。遺物が少なく時期決定は難しいが須恵器から6世紀後半頃が考えられる。また南東壁の腰石の中程に敷石が寄せられ、この間より陶器片などが発見された。おそらく後世に別の用途で使用されたのであろう。

2 出土遺物

明らかに3号墳にともなうと断定できるものは、敷石の間から出た9、10の耳環のみである。また古墳とは直接関係のない時期の多様な器種が出土しているが、これは先に記したように3号墳の崩壊後の使われ方を反映しているのであろう。

須恵器 図示したのは杯、高杯、提瓶の3種であるが、この他に甕の破片がある。1はヘラ記号のある杯、蓋か身か判断できなかった。2は杯の身。小さく突出した受け部をもつ。底部はヘラ削り調整。3は無蓋高杯の杯部。ほぼ水平な底部に直線的に開く口縁部がつく。下半部には2条の突帯を摘み出し、この間に粗い斜行文を入れている。口径10.6cm、杯部高3.8cm。4

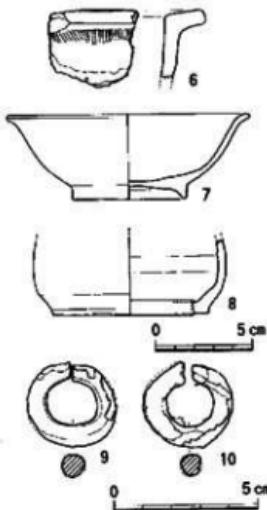


60 3号墳の須恵器（縮尺1/3）

0 10cm

は高杯脚部。大きく開いた裾部は、端部でさらに屈曲している。透かしが切り込まれているが全形は不明。5は口頸部や体部の背の形状やつくりから提瓶と考えたが、背の反対側が異様にのびて特異な形となっている。口縁部径10.8cm、体部径20.7cm、器高25cm。

その他の土器 6は3号墳の北西部の山上より出土した。赤茶色した素焼の土器でL字形口縁の屈曲部に細かいハケ目が残っている。時期不明。7は灰黒色をした高台付きの椀。内面は中心より放射状のナデ調整痕が残っている。口径12.6cm、高台径6cm、器高4.4cm。8は陶器で底部外面をのぞいて灰緑色の釉がかけられ、釉端は赤褐色となる。
耳環 9、10は敷石の間より出土したが、原位置ではなからう。どちらも胴芯銀張り。直径は9が3.1×2.9cm、10が3.2×2.9cm。9は切れ目が接している。同じような大きさから対だった可能性がある。



61 3号墳の遺物（縮尺1/2、1/3）

第4章 まとめ

これまで新立表2・3号墳の発掘結果について説明してきたが、古墳の被葬者、古墳の造営年代、あるいは席田遺跡群における他の古墳との比較、月隈丘陵での古墳のあり方等については、紙面の関係から一切触れることができなかつた。今回の発掘によって石室の構造など新たな知見も得られたので、これらの成果と残された問題点について補足、整理しておく。

屍床について 新立表2号墳の埋葬施設は、試掘時の予想では南に開口する竪穴系横口式石室と考えられた。ところが発掘してみると短側壁にはその施設がなく、西の長側壁中央に扉石状の石材で閉塞された入り口部が見つかった。当初の予想は完全にはずれ、いわゆるT字形の石室で、しかも4列の屍床をもつという他に例のない構造であった。その胴張りのある羽子板状プランだけを見ていると、最初の計画では南壁に入り口部を設ける予定であったものが、急に変更されて西の長側壁に造られたのではないかと疑いたくなる。しかしながら本石室は、周壁の腰石をすべて据えてその上に入り口を設けるような竪穴系の方法とは明らかに異なっている。それは、入り口部以外の腰石部が床面より一段深く掘り下げられ腰石の安定が図られているのに対し、入り口部は床面と同じ高さで西に張り出し、ここに短い墓道が取りついている。これは石室掘り方の掘削段階から西側開口が予定されていたことを示している。また入り口部

両側に大きめの腰石が用いられ袖石として強調されていることからも設計変更ではないことが断定できよう。さらにこの石室の企画、構築が石室中央の偏平な石を基点（起点）として、きわめて計画通りに作業を進められていることも先ほどの設計変更の否定材料になろう。

T字形石室については、かって大野嶽夫氏が和歌山県岩橋千塚を中心として朝鮮、日本列島の類例を集め、その構造や編年などを考察されている。大野氏の論考によると我が国におけるT字形石室の総数は90基、分布は北部九州から福島県まで広範にわたっており、特に琵琶湖西岸の大津市周辺、和歌山県岩橋千塚周辺、出雲の松江市周辺、そして北部九州に集中している。これらは6世紀前半から7世紀後半の約200年間に造営されている。

新立表2号墳は6世紀初め頃の築造と考えられるので、全国のT字形石室の中では、最も初期の古墳ということになるが、その系譜については、直接に関連があると伝わったとは考えられず、むしろ横穴式石室という共通の埋葬方法を採用していく過程で、各地域ごとに独自の変容を遂げていったものと考えられる。

大野氏の論考には記されていないが、ではなぜT字形の構造を取り入れたのかという本質的な疑問が残る。

岩橋千塚のように玄室の面積が4m²以内で單墓墓的な小石室が多いのに比べると、新立表2号墳は2倍以上の面積となっており、明らかに複葬、追葬を強く意識して造られている。これは横穴式石室の出現、導入自体が追葬という目的があったことからすれば、ごく当たり前のことではあるが4列の屍床を区画していることからも、追葬という行為が新立表2号墳の重要な目的であったことが納得できよう。

石室に屍床を設けた古墳は、九州では主に筑前、筑後、肥前、肥後地方に分布しており、それほど珍しいというわけではない。その分布状況から沿海性的特徴が指摘されたり、筑紫國造弊井の勢力拡大と結びつけて理解しようとする説などが提唱されている。これらの石室における屍床の区画方法、配列は多様で、互いに規格性は認められないが、屍床が石室に一つの場合と二つ以上の場合とでは、その追葬行為あるいは被葬者の社会的な、あるいは血縁的な身分や地位に対する埋葬意識が違うのではないか。つまり屍床の出現の一つとして、単なる追葬だけではなく、次の埋葬予定者が古墳築造時から存在していたということを考慮すべきであろう。もちろん追葬時に新たに屍床を追加するということもあったであろう。しかし新立表2号墳の石室は、最初から4体分の屍床が区画され準備されているのである。しかも通常の屍床のように奥壁に対して平行、あるいは縫型ではなく左右に各2列が整然と並んでおり、被葬者は家族における夫婦、あるいは親子のように同列に埋葬される必要があったのであろう。

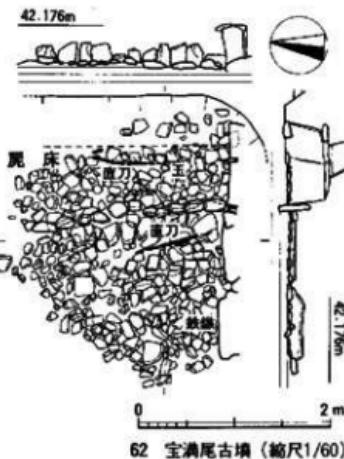
このように新立表2号墳の石室は、被葬者の数ばかりではなく、その関係を重視、最優先にして企画されたために、奥壁側から詰め込むといった、ある意味では無計画で乱暴ともいえる

埋葬方法が敬造され、長側壁に入り口を開けたT字形石室が出現したと考えられる。

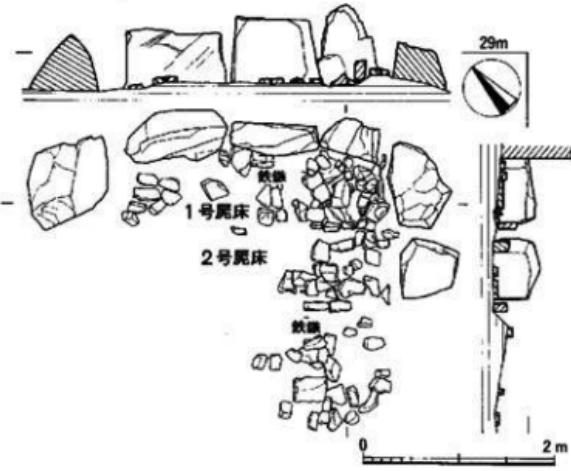
このような理由が席田遺跡群の他の古墳においても共通して言及できるのであろうか。これまでの分布調査では、10基の古墳が確認され、うち5基が試掘、あるいは発掘されている。屍床をもつのは、新立表2号墳の他に宝満尾古墳と北ノ浦古墳の2基が知られている。

宝満尾古墳は、席田中学校建設工事に先立って発掘調査が実施された。赤穂ノ浦遺跡の谷を挟んだ南側の小さく北に派生した尾根の頂上部に位置する直径20mの円墳である。墳丘の多くが失われ、埋葬部の石室もほとんどが破壊されている。石室は南側壁の腰石の一部と床面のみが半うじて残っていた。発掘の結果、石室は西に開口する横穴式で床面には全面に敷石があり、屍床は奥壁に平行に偏平な礫を1個立てて区画されている。屍床は現在長215cm、幅70cm。副葬品は、屍床内から玉類、直刀、不明鉄器、屍床外から直刀、鐵族が出土した。屍床内における副葬品の出土状況から、南に頭位を置いた1名のみの埋葬と推測されている。なお屍床内には赤色顔料が塗布されていた。築造年代は出土遺物や墳丘下で検出された石蓋上・壙墓の検討から6世紀前半から中葉にかけてと考えられている。また石室のプランは、最も小さく想定して2.5m×2.3mの方形プランとされている。

北ノ浦古墳は、席田遺跡群1次調査で現状保存するために補足的に墳丘測量と石室の清掃、実測が行われた。中尾遺跡の北東約170m、尾根の頂上部に位置している。その報告によると直径10m以上の円墳で、埋葬施設は南北に開口する横穴式石室とされている。主



62 宝満尾古墳 (縮尺1/60)



63 北ノ浦古墳 (縮尺1/60)

満尾古墳と同じように石室の残りはきわめて悪く、奥壁と側壁、床面の一部を残すのみである。石室の平面は長さ2.8m以上、幅約2.7mと推測されている。屍床は奥壁に沿って2列設けられている。奥壁寄りの1号屍床は、長さ約2.4m、幅約70cm。2号屍床は、長さ約2.4m、幅約50cmである。角礫を立てて区画しているが、新立表2号墳や宝満尾古墳と異なるのは、各屍床の間に10cm前後の空間があること、また側壁との間にも30cmほどの空間ができるよう仕切り石が見られることである。石室内からは鉄鏃が出土しているが、築造年代を明確に示す遺物はない。



64 北ノ浦古墳の屍床

以上二つの古墳の石室屍床は、石室の主軸に直交するように奥壁に平行にして1ないし2列が設定されており、明らかに新立表2号墳とは異なる。またどちらも石室面積が狭く、その規模からすれば、新立表2号墳とは大きな格差があるといえよう。

新立表2号墳は、4体埋葬という、おそらく家族埋葬の目的からT字形石室が採用されたのであろう。

石室の構造について 従来の横穴式石室のように短側壁（小口部）に入り口部を造らなかったことによって、石室構築の工法、技術的難易度の増減についてはいま明確にできないが、石室の上部構造については、天井石の大きさや壁隅の石の架け方、あるいは墳丘の盛土や裾部の地山整形などからある程度の想像は可能である。

周壁の石は大小不揃いで目路が通るわけでもなく、積み方は全体的に粗雑な印象を受ける。

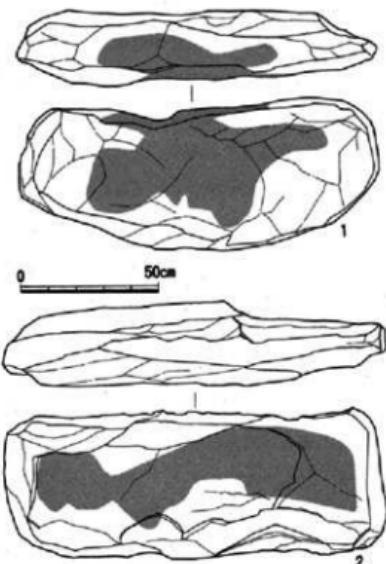
これではあまり背の高い構造は考え難い。周壁で最も残存状況のよい奥壁では、腰石より4段が残っていたが、すでに内側に倒壊しており実際の持ち送りを知ることができない。ただ北西隅では長、短側壁の両方に架けられた石があり、床面より高さ80cmほどから持ち送り状になっていたものと考えられる。また石室内に落ち込んでいた2個の天井石には、図のように長さ1.1mにわたって赤色顔料の痕跡が認められる。床面から見上げた天井石の全面に塗られていたとすれば、石室の幅が約2.5mなので、その $\frac{1}{2}$ の持ち送りが必要ということになる。一方墳丘の高さは3m以上は考えられないでの、持ち送りはかなり急な傾斜であったということになる。

古墳の年代について

新立表2号墳より出土した遺物はきわめて少ない。石室内で発見された遺物も確実に原位置をとどめているとは思えない。したがって果して追葬が行われたのかさえも確認できないのだが、墳丘裾部出土の遺物を石室より持ち出されたものと仮定し、中村浩氏の須恵器分類に当てはめれば少なくとも杯蓋口径の大小、あるいは提瓶の存在などからI型式5段階とII型式1段階の二つの型式に分類できる。この型式差を追葬の時期差として考えれば、6世紀前葉の短い時間に埋葬が終わったことになる。

席田遺跡群の古墳について

席田遺跡群における古墳は、5世紀後半から6世紀にかけて造営が開始されているが、ほとんどが新立表2号墳と同じ頃に集中している。石室構造は、横穴式石室の他に貝花尾1号墳、丸尾1号墳のように竪穴系横口式石室がある。ただ古墳の立地を見ると、尾根裾や斜面に造ら



65 2号墳の天井石（縮尺1/20）



66 石室に落ち込んだ天井石

れているのは、貝花尾2号墳と丸尾1号墳の2基のみで、他は各尾根の最頂部に位置し、あたかも各尾根を占有したかのような景観であるが、先のように墳丘も石室も小さく、副葬品も質素で、有力首長の大型墳とは比較にならない。またこの地域には、後にも大型墳も群集墳も築造されず、6世紀以降には有力者を支える基盤がすでに消滅、あるいは他地域に吸収されていたということであろう。

この地域で最後の光芒が放たれていたのは、大谷遺跡、宝満尾遺跡、そして赤徳ノ浦遺跡などが営まれていた弥生時代中期後半から後期のことであろうか。

参考文献

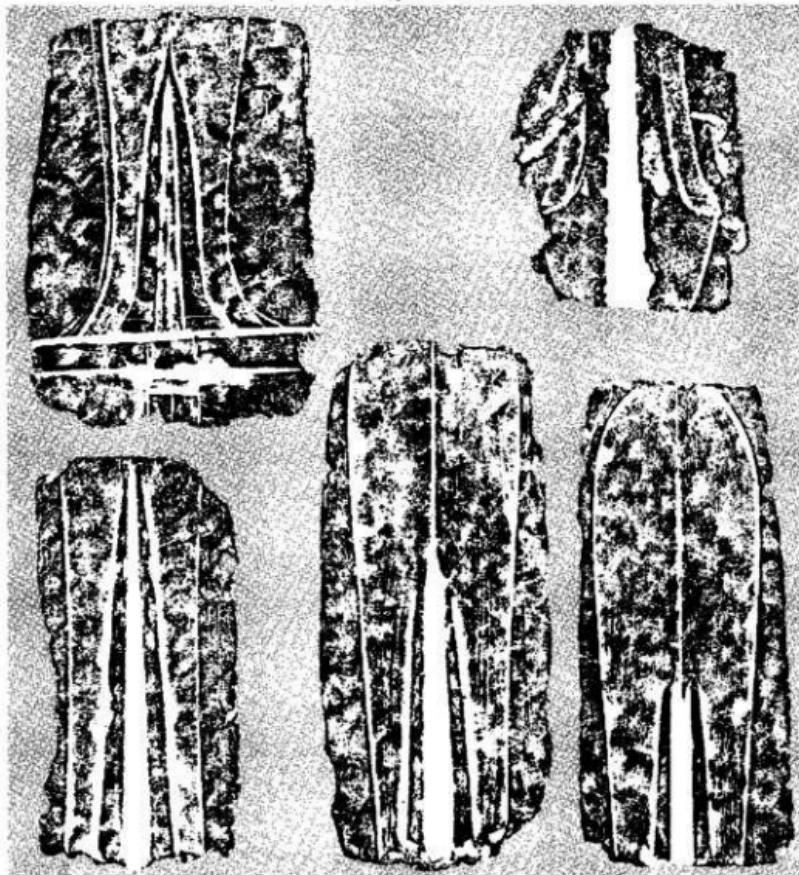
1. 柳沢一男「豊穴系横口式石室再考」森貞次郎博士古稀記念『古文化論集』1982年
2. 大野嶽夫「岩橋千塚と周辺の横穴式石室(上、下)」『古代学研究』109.110 1986年
3. 桥崎彰一『世界陶磁全集2 日本古代』小学館 1979年
4. 中村 浩『和泉陶邑窯の研究—須恵器生産の基礎的考察—』柏書房 1981年
5. 春日市教育委員会『赤井手占墳』春日市文化財調査報告書 第6集 1980年
6. 甘木市教育委員会『小田茶臼塚古墳』甘木市文化財調査報告書 第4集 1979年
7. 須恵町教育委員会『乙積木古墳群II』須恵町文化財調査報告書 第2集 1986年
8. 小郡市教育委員会『鈴隈1号墳』小郡市文化財調査報告書 第49集 1988年

年度	次数	遺跡名	調査番号	発掘原因	調査期間	報告書
1975年 昭50	1	貝花尾 1号	7512	自転車道	1975. 8月～9月	44
		2号	7512	自転車道		44
		貝花尾 1号墳	7513	遊歩道	1975. 12月～ 1976. 1月	44
1976年 昭51	2	新立表 1号墳	7611	遊歩道	1975. 10/13～ 10/26	44
		大谷 1次	7613	遊歩道	1976. 10/15～ 1977. 1/24	46
1977年 昭52	3	貝花尾 2号墳	7612	遊歩道	1976. 12/4～ 12/24	46
		久保園	7701	野球場	1977. 4/1～ 10/17	91
1978年 昭53	4	中尾 1地点	7834	管理広場	1979. 2月～3月	109
1979年 昭54	5	中尾 2地点	7834	管理広場	1979. 4月～6月	109
1980年 昭55	6	中尾 3地点	7834	管理広場	1981. 2月～3月	109
		北ノ浦 1次	8103	テニス場	試掘. 1981. 7月～8月	—
1981年 昭56	7	新立表 2号墳	—	国体会場	試掘	218
		赤徳ノ浦	8229	野球場	1982. 4月～9月	未刊
1982年 昭57	8	丸尾 1・2号墳	8230	子供広場	1982. 12月～ 1983. 1/14	114
1983年 昭58	9	北ノ浦 2次	—	テニス場	試験	—
1984年 昭59	10	大谷 2次	8402	道路	1984. 11/15～ 12/27	218
		新立表 2・3号墳	8414	国体会場	1985. 1/8～ 2/26	218
1985年 昭60	11	大谷 3次	8515	道路	1985. 3/16～ 6/1	218

福岡市南区

高宮川幡宮

所蔵鋳型の調査報告



目 次

1. 調査の経緯	2	第4号鋳型	15
2. これまでの調査	3	第5号鋳型	16
3. 周辺の遺跡と鋳型出土地	5	5. まとめ	22
4. 鋳型	7	広形銅戈鋳型	22
第1号鋳型	10	広形銅矛鋳型	23
第2号鋳型	11	文献	26
第3号鋳型	12		

図版目次

P.L. 1 第1号鋳型 (広形銅戈鋳型)	P.L. 4 第4号鋳型 (広形銅矛鋳型)
P.L. 2 第2号鋳型 (広形銅矛鋳型)	P.L. 5 第5号鋳型 (広形銅矛鋳型)
P.L. 3 第3号鋳型 (広形銅矛鋳型)	

挿図目次

第1図 高宮八幡宮と周辺の鋳型出土地・遺跡	6	第6図 第5号鋳型実測図	20・21
第2図 第1号鋳型実測図	8・9	第7図 広形銅矛鋳型の接合部位と断面	25
第3図 第2号鋳型実測図	12・13	第8図 皇后峯出土広形銅矛鋳型実測図	27
第4図 第3号鋳型実測図	14・15		
第5図 第4号鋳型実測図	18・19		

表 目 次

表1 広形銅戈鋳型の比較	22	表2 広形銅矛鋳型の比較	24
--------------	----	--------------	----

例 言

*本報告は、福岡市教育委員会が福岡市文化財指定事業の一環として1988年12月10日に実施した高宮八幡宮(福岡市南区高宮四丁目)所蔵鋳型5点の実測調査(調査番号8858)の報告である。

*本報告は「1. 調査の経緯」を力武卓治が、その他を後藤直が執筆した。実測図作成は第1節に記したように5人で分担し、写真は力武が撮影した。編集は後藤が担当した。

*表紙の拓本は高宮八幡宮所蔵鋳型5点(水野・猪口・岡崎1953より、縮尺は9分の2)。

1. 調査の経緯

福岡市教育委員会文化課は1988年度の福岡市指定文化財の対象の一つを市域内出土の弥生時代青銅器鋳型とし、その候補のなかに福岡市南区高宮四丁目にある高宮八幡宮所蔵の鋳型5点をあげた。

高宮八幡宮は社伝によれば、寛仁年間（1017～1021）に社殿を营造し、建久年間（1190～1199）当神社を高宮の西南、宮の尾に遷して高宮、平尾、野間三村の氏神、那珂郡の鎮守神とし、また慶長7年（1602）本宮を古宮の跡、東南の地に遷し、現在に至るという。

加藤一純・鷹取周成編『筑前國懶風土記附録』高宮村の条には

「八幡宮 ミヤヤマ 神殿方九尺・拝殿二間三間

祭禮九月十五日・奉祀平山諸岐

産神なり。祭る所應天皇・神功皇后・玉依姫命也。祠は村の南二町許山中にあり。む

かしの社は村の坤二町許小高き所なり。古宮山と云。」

である。

鋳型は神体ということで戦後長く人の目に触れることがなかったが、文化財指定のための事前調査をお願いしたところ志賀正信宮司をはじめ氏子総代の方々にご快諾いただき、実測、撮影を許可された。

調査は1988年12月10日の10時から同宮の拝殿で始めた。寒さと拝殿での作業のため予定以上にてまどり、午後8時に鋳型の実測と撮影を終えた。

鋳型は神体のため直ちに文化財に指定できないとのことで、指定候補からはずさざるをえなかったが、実測図・写真的公表は差支えないとのことであった。そこで調査結果を、席田遺跡



高宮八幡宮

群の発掘調査報告書の末尾を借りて発表することにした。

調査の機会を与えられた高宮八幡宮の志賀正信宮司はじめ関係各位に厚くお詫び申し上げる。

文化財指定事務担当

岩下拓二（文化課文化財管理係長）

猪方裕之（文化課文化財管理係）

飛高憲雄（埋蔵文化財課第2係長）



調査状況

調査担当 実測 1号鉄型 後藤 直（埋蔵文化財センター所長）

2号鉄型 宮井善朗（埋蔵文化財課職員）

3号鉄型 田崎博之（埋蔵文化財課調査員）

4号鉄型 田中克子（埋蔵文化財課調査員）

5号鉄型 池田祐司（埋蔵文化財課調査員、現埋蔵文化財課職員）

撮 影 力武卓治（埋蔵文化財センター文化財主事）

2. これまでの調査

高宮八幡宮所蔵鉄型のもっとも古い記録は青柳種信の『筑前國續風土記拾遺』にみえる。これより先に編まれた加藤一純・鷹取周成の『筑前國續風土記附録』には、高宮村の条に八幡宮の記事はあるが鉄型への言及ではなく、さらに貝原益軒『筑前國續風土記』には高宮村も高宮八幡宮も記載がない。

青柳種信『筑前國續風土記拾遺』卷之六那珂郡の高宮村の条には

「八幡宮田ノ次と云地に在、產神也、八幡之神を祭る神社ハ鐵の礎石也、其數あまた有、……」とあって、高宮八幡宮の神体が早くからこれら鉄型であったことがわかる。

青柳種信はまた、『柳園隨筆』に那珂郡井尻出土の銅矛鉄型について記した中で、

「此事を鳥飼社神主平山道榮に物語せしに、かゝる石は吾も見し事あり同郡高宮村八幡宮の神体即ち此度掘出たると同じ物なりと云へり」

とものべている^(註)。

この二つの記事からすると、古器物に関心が深かった青柳種信も、高宮八幡宮の鉄型は実際には見ていなかったらしい。

その実態をはじめて紹介したのは八木奘三郎であった。1907年夏、八木は福岡県の遺跡・遺

物を調査し、高宮八幡宮では鉄型を実見し拓本をとり、

「此物の発見は何時頃なりや、口碑記録に存せざれば知ること能はざれども斯く一箇所に多く集まれるは珍しき例なり、今實物を検するに一として接合するものなく、盡く別個の型たることを示せり」

と報告している（八木1908）。

つづいて1913年に東京帝室博物館の和田千吉が高宮八幡宮や岡本熊野神社の鉄型等を調査した。この時和田を案内した森弘は高宮八幡宮の鉄型について『筑前國横風土記拾遺』の記事を引き、さらに

「其祭神三座、及型石の數則ち左の如し。

香椎宮 型石二個

八幡宮 同 二個 都合五個を藏置せり

宝満宮 同 一個

右八幡神社の鉄型石の継手構造は、上下相欠ぎの仕口なるも岡本熊野神社の型石継手仕口は、突合せ栓差とし、……」

と、興味深い観察結果を述べている（森1914）。

和田千吉の調査結果と拓本は高橋健自の研究に供されて公表された（高橋1914・1925）。

大正年間に北部九州の弥生時代研究を精力的に進めた中山平次郎は、須佐岡本の鉄型片を紹介したり（中山1927・1929a）、青柳種信が記録した井戸の広形銅矛鉄型一対の出土地の探索に努力したが（中山1924）、高宮八幡宮の鉄型は調査していない。

また森本六爾も、井戸出土鉄型にふれた一文によると青柳種信『柳園隨筆』の写本を見ており（森本1933）、高宮八幡宮の鉄型の存在を知っていたはずだが、調査した様子はない。両人とも実見できない事情があったのかもしれない。

その後は、戦後すぐに岡崎敬が調査しているが、拓本が公表されただけで報告はない（水野ら1953）（表紙図）。

これ以降は神体として長く人目に触れることなく、今回の調査まで実見した専門家はいないようである。

(注)『柳園隨筆』は全文が公開されることなくすでに戦災で失われている。写本を見た考古学者は森本六爾だけのようだ。『柳園隨筆』の井戸出土銅矛鉄型記事は、鉄型の図とともに久留米市高良神社蔵銅矛の箱の裏に記されている。高橋健自、中山平次郎、森弘はこれから引用しているのだが、この記事中の高宮八幡宮鉄型の部分をも記すのは森弘のみで（森1915）、高橋と中山は略している。

3. 周辺の遺跡と鋳型出土地（第1図）

高宮八幡宮（第1図A）の鋳型5点は文政年間（1818～1830）以前に同社の神体になっていて、その発見の時・所・状況および同社に納められた経緯等は一切不明である。江戸時代にこうした遺物が発見されたときは発見地の寺社に納めることが多いようであるから、高宮八幡宮の鋳型5点も同社を産神とする高宮村内かその近辺で発見されたとみてよいだろう。

高宮地区は西の鴻巣山からのびてくる丘陵が福岡平野に面するところで、北東約1kmを那珂川が北西に流れる。丘陵部と縁辺沖積地の遺跡の分布状況は、南西側の穴観音をふくむ寺塚古墳群（同図2・3）と弥生時代後期土器を探集した東側の高宮A遺跡（1）を除くと、戦後早くから住宅地として開発されたために把握されていないし、発掘調査例も皆無である。

若久丘陵を問にはさんで南西側の大橋地区は、片桐山から北東にのびる丘陵がぱきるところで、東側を那珂川が北流し、やがて北西に向きをかえる。この丘陵の北西先端部の野間A遺跡（9）の範囲内の野間門ノ浦（8）では、1934年に細形銅矛が発見され（東京国立博物館蔵）、その南東約1kmの三宅岩野（15）でも細形銅矛が発見されている（福岡市教育委員会1971）。

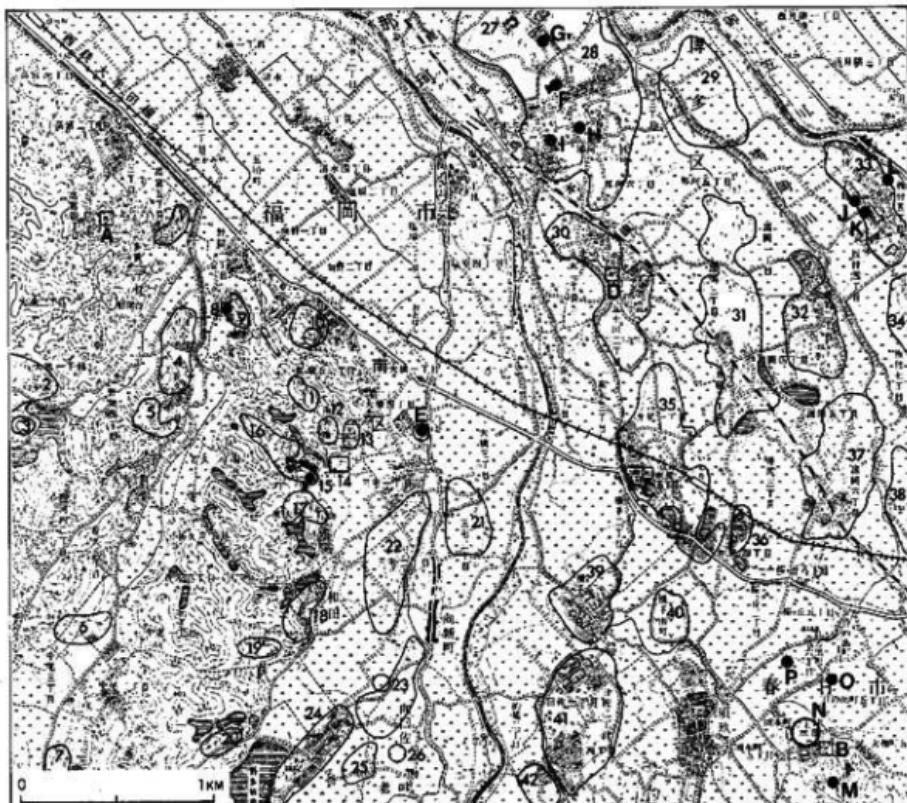
大橋付近でも発掘調査例はきわめて少ない。丘陵北端の野間B遺跡（10）で弥生時代中期前半の円形竪穴住居跡4棟などと円墳を調査し（力武・常松1989）、丘陵東側微高地の大橋E遺跡（E）で弥生時代中期土坑や銅劍らしい鋳型小破片を見出し（横山1990）、その南西側で三宅廃寺跡（14）の一角を調査した（二宮1979）程度である。

これより南ではたびたび発掘調査がおこなわれ、野多日遺跡の弥生時代初めの水田跡（山崎1987）などがあげられる（23・25・26）。

那珂川の東側に目を転ずると、比恵遺跡群、那珂遺跡群（28）、板付遺跡（33）など多数の遺跡が知られ、その南には須玖・岡本遺跡（N）に始まる春日丘陵上の遺跡群があり、相当量の発掘調査が実施されている。そしてまたこの一帯は弥生時代の青銅器鋳型が最も多く発見されている地域でもある。

那珂遺跡群では、1948年に那珂八幡古墳（F）の盛り土に包含されていたらしい中広形銅戈の鋳型破片が採集された（那珂八幡古墳調査団1978）。近年は第8次調査（G）で中期後半～末の遺構から矛か戈と見られる鋳型断片、中細形銅矛用と見られる巾子、取瓶破片などが出土し（下村1987）、さらに20次調査（H）では弥生時代の大溝から中広形銅戈の鋳型破片が、23次調査（I）でもこの大溝の続きから中細形銅戈の鋳型破片が発見された（ともに未報告）。

板付遺跡では1972年に広形銅矛鋳型小片と矛らしい鋳型小片各1点（J）、1978年に中広形戈ともみられる鋳型破片1点（K）、1979年に種別不明鋳型小片1点（L）、計4点が出土している（後藤・沢1976、山崎1980、山口1981）。板付遺跡の南東約1.5kmの大野城市仲島遺跡でも銅矛



第1図 高宮八幡宮と周辺の鋳型出土地・遺跡

- 〔鋳型出土地・所蔵地〕 A 高宮八幡宮、B 熊野神社、C 井尻熊野推現、D 五十川妙楽寺、E 大橋 E 遺跡、F 那珂八幡古墳、G 那珂遺跡第8次調査地、H 那珂遺跡第20次調査地、I 那珂遺跡第23次調査地、J 板付遺跡 (1972年)、K 板付遺跡 (1978年)、L 板付遺跡 (1979年)、M 冈本四丁目遺跡、N 須玖岡本遺跡、O 須玖永田 (エイダ) 遺跡、P 須玖唐梨 (トウナシ) 遺跡
- 〔遺跡〕 1 高宮 A 遺跡、2 寺塚 A 古墳群、3 寺塚 B 古墳群、4 中村町遺跡、5 若久 A 遺跡、6 扇形原遺跡、7 花烟 C 遺跡群、8 野間門の浦 (細形銅矛出土)、9 野間 A 遺跡、10 野間 B 遺跡、11 大橋 A 遺跡、12 大橋 C 遺跡、13 大橋 D 遺跡、14 三宅廃寺、15 三宅岩野 (細形銅矛出土)、16 大橋 B 遺跡、17 和田田藏池遺跡、18 和田 A 遺跡群、19 和田 B 遺跡群、20 野多目浦ノ池遺跡、21 三宅 C 遺跡群、22 三宅 B 遺跡群、23 野多目 B 遺跡群、24 野多目 A 遺跡群・野多目古墳群、25 野多目 C 遺跡群 (野多目打拈遺跡)、26 野多目古屋敷遺跡、27 剣塚古墳、28 那珂遺跡群、29 那珂深ラサ遺跡群、30 五十川遺跡群、31 諸岡 A 遺跡群、32 諸岡 B 遺跡群、33 板付遺跡、34 高畠遺跡、35 井尻 B 遺跡群、36 井尻 C 遺跡群、37 笹原遺跡群、38 三筑遺跡、39 横手遺跡群、40 寺島遺跡群、41 曰佐遺跡群、42 上曰佐遺跡

の鋳型破片が出ている(舟山1983)。

御笠川をこえた月隈丘陵の赤穂ノ浦では1982年に横帯文銅鑄鋳型破片が発見された(力武1982)。

春日丘陵北の沖積地では須玖永田遺跡(O)で小型微製鏡鋳型の破片2点と矛の中子、ふいごの羽口、銅津、銅塊などが出土し(丸山・平田1987)、須玖唐梨遺跡(P)で種別不明鋳型小片2点、矛の中子11点が出土した(平田・中村1988)。また須玖パンジャク遺跡と駿河遺跡でも銅矛鋳型などが発掘されている。このほか春日丘陵北端の岡本4丁目遺跡(M)の小銅鑄鋳型(丸山1980b)、赤井手遺跡の鋳型10点も発掘調査で出土している(丸山1980a)。

この地域ではほかに、出土状況等詳細ははっきりしないが古く発見された鋳型や記録がある。

須玖・岡本遺跡(N)では1920年代前後に多くの鋳型破片が採集されているが(中山1927・1929a、浜田ら1930、森本1931)、最も重要なものは天明7(1787)年に皇后峯で掘り出され、今も熊野神社(B)に残る広形銅矛鋳型である(八木1908・高橋1925、水野ら1953)(第8図)。

井戸では、前節で述べたように、寛政年間(1789~1801)の末に熊野権現(C)近くの塚の際から一対の広形銅矛鋳型(長さ約109cm)が掘り出されているが、現存しない。これまで多数の鋳型が発見されているが、鋳造にさいし対をなす2枚が見つかったのはこれが唯一の例である。

このほか五十川の妙楽寺(D)にも広形銅矛鋳型の袋部の破片が所蔵されている。所伝どおり五十川で発見されたものであろう。(中山1929b、福岡市教育委員会1987)。

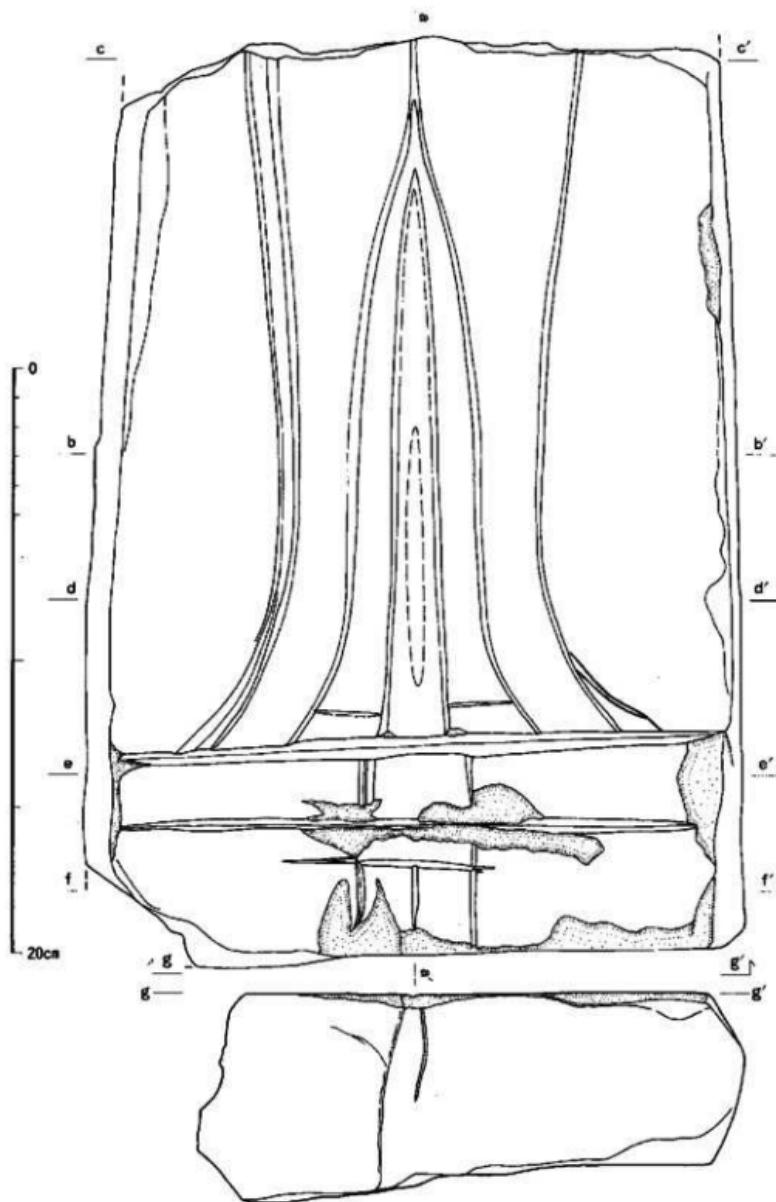
このように春日丘陵上から那珂遺跡群まででは多数の鋳型が発見されており、発見地のすべてが青銅器鋳造地ではないにしても、この地域が弥生時代の青銅器とくに武器形祭器製作の中心地であったことを物語っている。高宮八幡宮の5点の鋳型も、後述のように鋳造に用いられた証拠を欠くようにみえるとはいって、「奴國」の中枢部での武器形祭器製作の一環として作られたことは疑いない。

4. 鋳 型

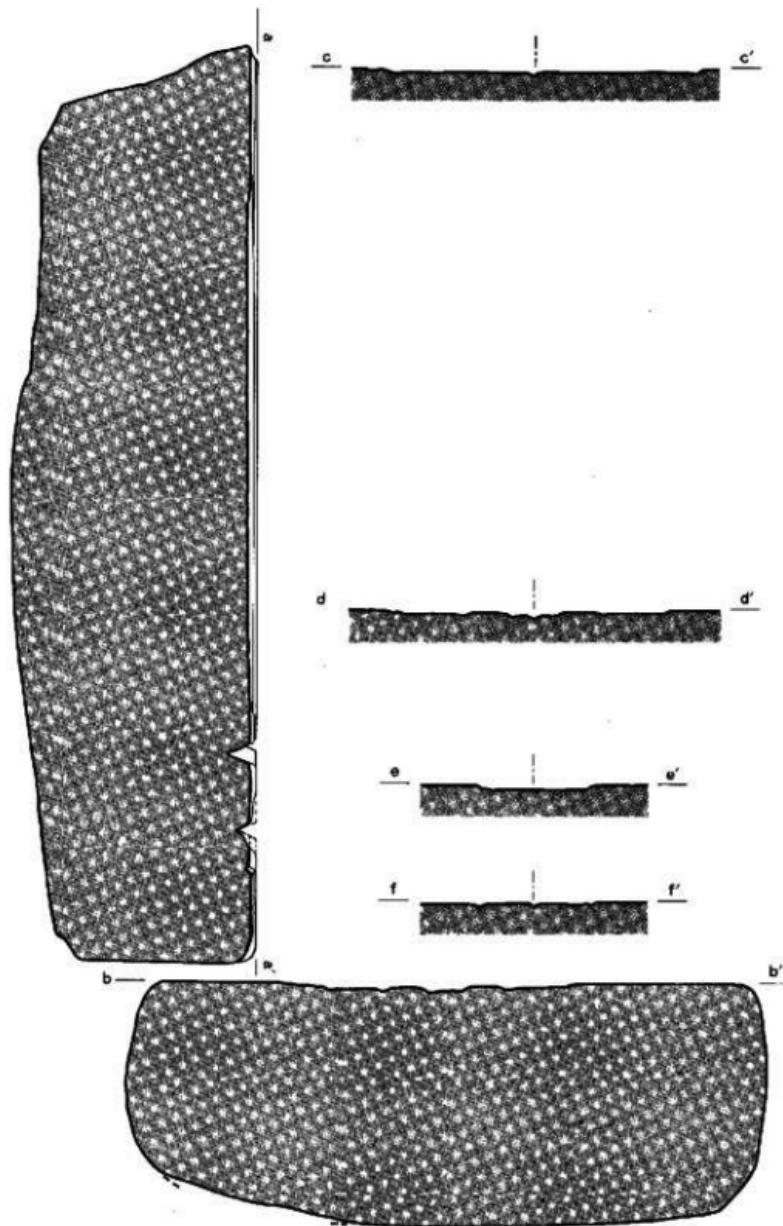
高宮八幡宮の神体となっている石は6点あって、うち5点が鋳型である。他の1点は断面隅丸長方形で両面が彎曲する鋳型と同質の自然石だが鋳型ではない。

5点の内訳は広形銅戈鋳型1点、広形銅矛鋳型4点である。広形銅戈鋳型を第1号鋳型とし、広形銅矛鋳型は間部分があるものを第2号鋳型、機部分までのものを第3号鋳型、柄上半部から鉾部までのものを第4号鋳型、同じく鉾先端近くまであるものを第5号鋳型とする。

石材の鑑定は行っていないが、緻密な石質で、北部九州の弥生時代青銅器鋳型の石材の多くと大きな違いはない。表面はやや黄味を帯びた灰~暗灰色だが内部は白色で、これが本来の石



第2図 第1号鉄型実測図



の色だろう。表面には鉄分のような茶色の付着物が一部に見える^(註)。

注目すべきことは彫り込まれた型とその周辺に溶鋼により黒く焼けた痕跡が認められず、鋳造には使用されなかつたらしい点である。またのちに砥石に転用されてはいない。

第1号鋳型 (P.L.1、第2図)

広形鋼刃鋳型である。上部は折れて失われ左下角も欠ける。残存長31.9cm、幅は基部近くが最大で22.6cm、先端方向へせまくなり折損部での幅は20.6cm、厚さは中軸線上のほぼ中央が最大で8.4cm、先端部で7.5cm、基部側で6.9cm、基部側面左側で7.1cmを測る。

表面(鋳型面)はていねいに磨いて平坦に整える。多くの鋳型にある中軸線に平行する条線は目立たない。

基部側の側面も平坦かつなめらかに整えて、鋳型面に対し直角をなす。この面の左半分の上部は表面が薄く剥落しているが、残存する下部は右半分より4mmほど出っ張っている。

両側面は敲打により整え、さらに整状の工具で削ったらしく水平方向の面が連なるところもあり、外に張るゆるい曲面をなす。裏面も削りと敲打により平坦に整えわずかに彎曲する。一部剥落した部分がある。

横断面は蒲鉾型ともいえるが長方形に近い。縦断面は基部側から少し厚みを増し、先端側へ再び厚みを減じる。

合印は、基部側面の中軸線上に鋳型面下3.7cmまで刻まれた少し曲がった細線のみで(g-g'断面)、両側面には見当たらない。

彫り込まれた広形鋼刃の型は機のすぐ上で折れて失われているが、他の広形鋼刃鋳型とおなじく、本来一枚の鋳型に先端部まで彫っていただろう。型の残存全長は28.3cmである。

内と基端部の間にはガス抜きの溝はなく、内の両側縁から延びる幅2mmほどの線2本とその中央に同様の細線1本が彫られているにすぎない。中央の線は型を割り付ける際の中軸線、両脇の線は内の割付線の延長とみられる(f-f'断面)。また内の基部の左右両側にも細い線が出ているがこれも内端部の割付線であろう。内は幅3.9cm、長さ3.8cmで、鋳型面より1.5mm前後彫り込まれ(e-e'断面)、内の基部はさらに一段深く彫っている。

内には、中軸線に直交する幅0.5cm、長さ19.8cmの溝が重なっている。溝は深さ0.6cmで胡よりも浅く、両端は鋳型の外に通じてはいないらしい。剥落のため内との関係は明らかでないが、溝は型とは無関係で、型全体が彫られた後になんらかの理由で刻んだと考えるのがよい。

胡は、中軸線上での幅が0.6cm、深さ0.9cm強、長さ21.0cm、中軸線に対する角度は92.5°前後で、両端は鋳型の外に突き抜ける。

脊は長さ19.5cmで、胡に接する部分で幅が2.5cm、深さ0.2~0.3cmで、脊に接するところを

少し深くする (b - b'断面)。また下半部中央が少し凹む (d - d'断面)。

機は長さ21.8cm、胡に接する基部での幅(左右の柄の外側どうしの長さ)が8.8cm、製品では匕面となるように彫られ、下端の幅1cm前後は穿のため彫り残す。

接の彫りは縁から側面へ深くなり、側に接するところはさらに一段深く彫る。接の左側は縁が二つあるようにみえ、彫りがしっかりしているのは内側である。内側の縁をとれば、接幅が最もせまいところでは中軸線の左側幅は4.2cmで右側幅4.3cmと等しく、胡に接する接の基部では左側幅が7.1cm、右側幅が7.2cmである。外側をとれば、最小幅9.0cm、基部幅15.3cmとなる。鋒の現存最大幅部分(c - c'断面)では中軸線の右側幅が5.75cm、左側幅は内側の縁をとれば5.1cm、外側をとれば5.85cmとなる。

鋒部の中軸線部分は少し深く彫ってある (c - c'断面)。

第2号鋲型(P.L.2、第3図)

広形鋼矛鋲型である。闇とその上下が彫られている。

鋲型の基部側は折れて失われている。現存の長さは22.8cm、幅は基部側で18.0cm、先端側で17.7cm、厚さは基部側(9.3cm)から先端部側(7.9cm)へ薄くなる。横断面は蒲鉾形で、側面と裏面は削りと敲打で平滑に整える。右側側面には鋲型面下1.7cmほどに幅1.8cm前後の深い溝(深さ2~3mm)が通っている。左側側面上部は高さ1.6cm前後、幅0.7cm前後の階段状になっている。いずれも仕上げはそれほどていねいではない。

上端側の側面は上下左右が折損しているが、鋲型面下約3.6cmに溝が彫られている(残存幅1.5cm、長さ約10cm)。溝の面は平滑に仕上げている。これにより、現在の残存部の少し上が本来の上端部で、この先に別の鋲型を継いで鋲造する方式であることがわかる。

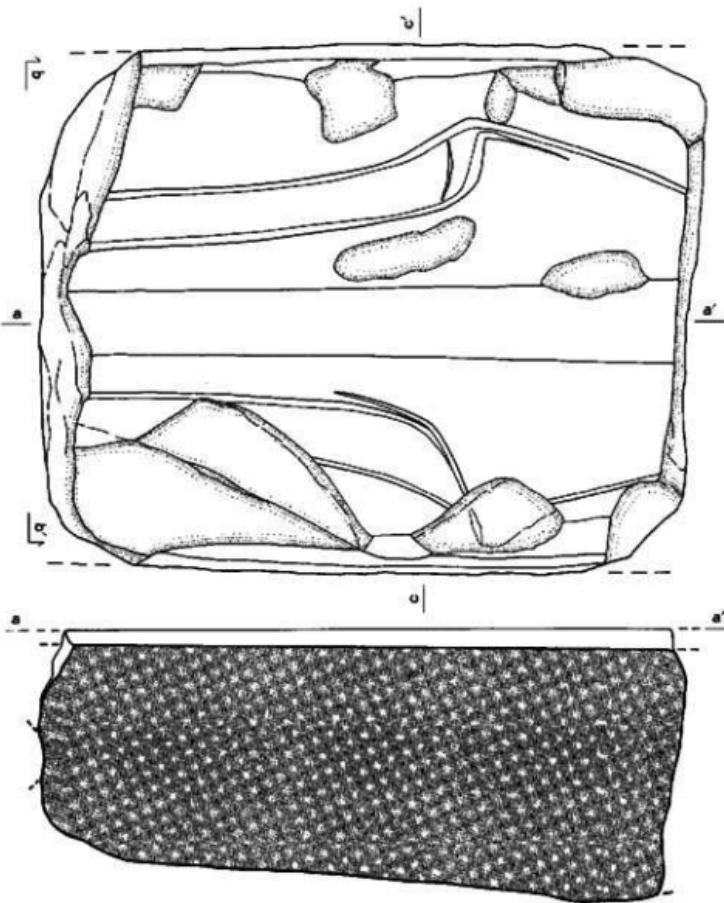
基部側の側面は折損面で、本来は茎と湯口部までつづいていただろう。

側面に合印はない。

鋲型面は平滑に整えていたはずだが、損傷が著しい。刃の型は左側側縁部がかなり失われている。型の残存長は21.3cmで、闇より上部が13.9cm、下部が7.4cmである。闇幅は推定13.9cm、身幅は闇下部の残存部で10.9cm、上部の残存部で推定9.0cmである。脊は断面半円形に彫り、幅は下端で2.9cm、上端で2.2cm、深さは下端で0.7cm、上端で0.4cmを測る。

機は匕面をなすように彫られ(深さ約0.1cm)、上端部で右側の幅が1.4cm、左側の幅が1.3cmである。

葉部は機側が深く縁側が浅く彫られ(深さ約0.2cm)、上端部での幅は右側が2.0cmで、左側は2.1cmと推定される。闇近くでの葉部の形態は左右で多少となる。右側葉部内の細い刻線は型とは無関係の疵だろう。また左側葉部と機の境は2本の線が階段上になっているが、内側



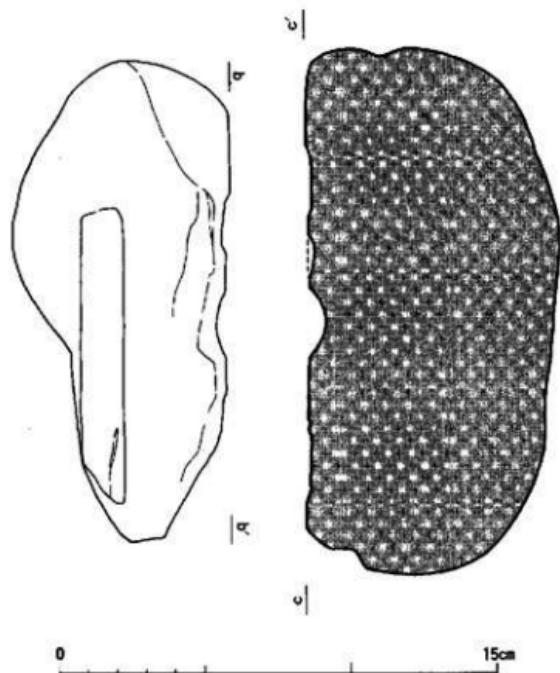
第3図 第2号鋳型実測図

の線は彫り間違えたらしい。

第3号鋳型（P.L.3、第4図）

広形銅矛鋳型である。柄の下部から鉢下端部までの型が彫り込まれている。

鋳型は全長31.0cm、最大幅15.8cm、下部幅15.5cm、上部幅15.0cm、厚さは最大部分で8.8cm、下部で8.6cm、上部で8.15cmを測る。側面には水平方向に、裏面には中軸線に直交する方向に



削り整えた痕跡が明瞭に残っている。また敲打による調整痕もみえる。断面は長方形で、両側面は鋳型面に対してほぼ直角をなし、裏面との間は小さな丸みを帯びている。

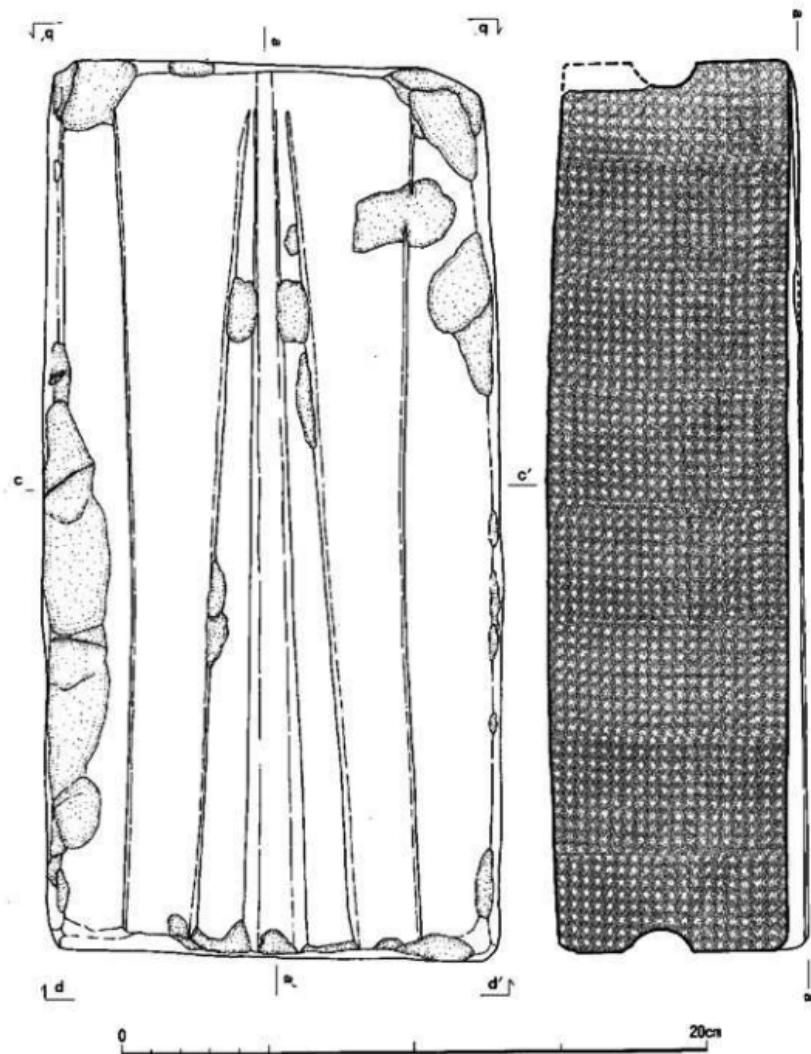
上下両端の側面は鋳型面に対し直角の平滑な面をなし、断面半円形の溝が彫られている。下端側面の溝は鋳型面下3.7~4.2cmにあり、幅2.2cm前後、深さ0.8cm、上端側面の溝は鋳型面下3.4cmにあり、幅2cm前後、深さ0.9cmを測る。この鋳型が上下に少なくとも一つずつの別の鋳型を組いで使用する方式のものであったことを示す。

合印はない。

鋳型面は平滑に整え、型の内外には中軸線方向の条線がある。型の全長は30.2cm、上端から1.3cmの所が樋の上端になり、下端は樋の途中で終わっている。

身幅は下端部で10.2cm、樋の上端部で10.35cm、上端から約17cm下で最も狭く9.4cmである。

脊は逆台形状に彫り込み底は平坦にし、鎬となる後はない。幅は下端部で2.2cm、上端部で0.7cm、深さは下端部で0.6cm強、上端部で0.3cm弱。樋はややビ面をなすように彫られ、幅は下端部で5.8cm、上端部で1.4cm。葉部は樋側から縁側へ浅くなるように彫っているが、壁に接



第4図 第3号鉄型実測図



する部分はなお一段深く、また縁に接する部分も一段深く彫り込んでいる (c - c'断面)。

第4号鎌型

(P.L.4、第5図)

広形銅矛鎌型である。柄の半ばから鉾先端部のやや下までの型が彫り込まれていて。

鎌型は全長39.5cm、最大幅 (c - c'断面) 18.0cm、下部幅 17.2cm、上部幅 15.5cm、厚さは先端部から下部へ薄くなり最大部分で 7.8cm、下端部で 5.5cm を測る。

断面は長方形というべきであり、鎌型面と裏面はほぼ平行する。裏面は敲打と削りで平坦に整える。両側面は外へ怪く弓曲し、鎌型面との間は明瞭な棱をなす。側面はかなり平滑に整え、裏面との間は小さな丸みを帯びかつ棱をなしてい

る。

左側面には鎌型面下 1.7cm に幅 1.4cm、深さ 0.3cm の溝が、右側面にも鎌型面下 1.3cm に幅 1.2cm、深さ

0.2cmの溝が通っている。溝の中は整状工具で削ったままのようだ。

上端側の側面は平滑に整え、鋳型の上端部のように見えるが、型はまだ先に統かねば完結しない。折損後に整えたのかもしれない。下端部はやや損傷しているが、側面は平滑に整えている。ただしこの面はゆるく外に張り出し、溝や段を設けてはいない。折損後に整えたようだが、ここで厚さがもっとも薄いので、このすぐ下で別の鋳型につなげたとみられる。

側面に合印はない。上端部側面にもないのはこの面が本来の面ではないからであろう。

鋳型面は平滑に仕上げ、型の内外に条線が見える。彫り込まれた型の長さは39.0cm、幅は長さが21.1cmが残っている。下端から3cm上で脊幅が2.1cm、極幅が4.8cm、身幅が9.5cmである。身の最小幅はこれよりなお下にある。

脊は底面が平らな断面逆台形に彫り込まれ、下端部での深さは0.5cm強である。極はV面をなすように彫られている。極に接する葉部は、3号鋳型と同様、幅1cm前後がより深く彫られている(c-c'断面)。

鋒部の中央は断面V字形の溝状に一段深く彫り込まれている。身の最大幅はb-b'断面の少し上にあり、12.9cmを測る。

型は先端を不自然な状態で欠いており、この先に別の鋳型を継ぐとは考えられないから、この鋳型は先端部の5~6cmを後に切り落としたとみられる。

第5号鋳型 (P.L.5、第6図)

広形鋼矛鋳型である。極の上半から鋒先端部までの型が彫り込まれている。

鋳型は全長37.1cm、最大幅18.7cm、下部幅18.0cm、上部幅14.2cm、下部の厚さはほぼ均一だが(7~7.5cm)、先端側3分の1は薄くなり、端部の厚さは3.7cmになる。両側面と裏面は粗い削りと敲打で整える。裏面は全体が外へ彎曲し、断面は偏平な蒲鉾形といえる。

両側面には整状工具で削った段階状あるいは断面V字形溝状の段が、基部側から先端部のすぐ手前まで設けられている。段の下端は鋳型面下2.6~3cmになる。段以下は1~1.5cmほど降りて裏面につながる。したがって段以下の鋳型幅は鋳型面幅より広い。

先端部側面は下前方にやや傾斜し、ていねいに整え、本來の側面のようにも見える。下端部側面はていねいに磨いており、中軸線に直交し、鋳型に対しては垂直だが軽く外に彎曲している。この面に溝や段はなくここからの別の鋳型につなぐのか、あるいは後にここで切断したのかは明らかでない。

鋳型面は平滑に整えているが、型の外側に条線は目立たない。型の全長は36.3cm、うち極の部分は13.9cm、最大幅はb-b'断面のところで12.6cm、最小幅は基部で9.5cmを測る。

脊の幅は基部で1.6cm、断面逆台形に彫り中央には下端より約3cmの所まで鋒に相当する極

が鋒先端部から続く。柄は基部での幅が4.4cmで、ヒ面をなすように彫っているようだが明晰ではない。柄に接する葉部はほかの鋲型と同じく、少し深く彫っている（c-c'断面）。

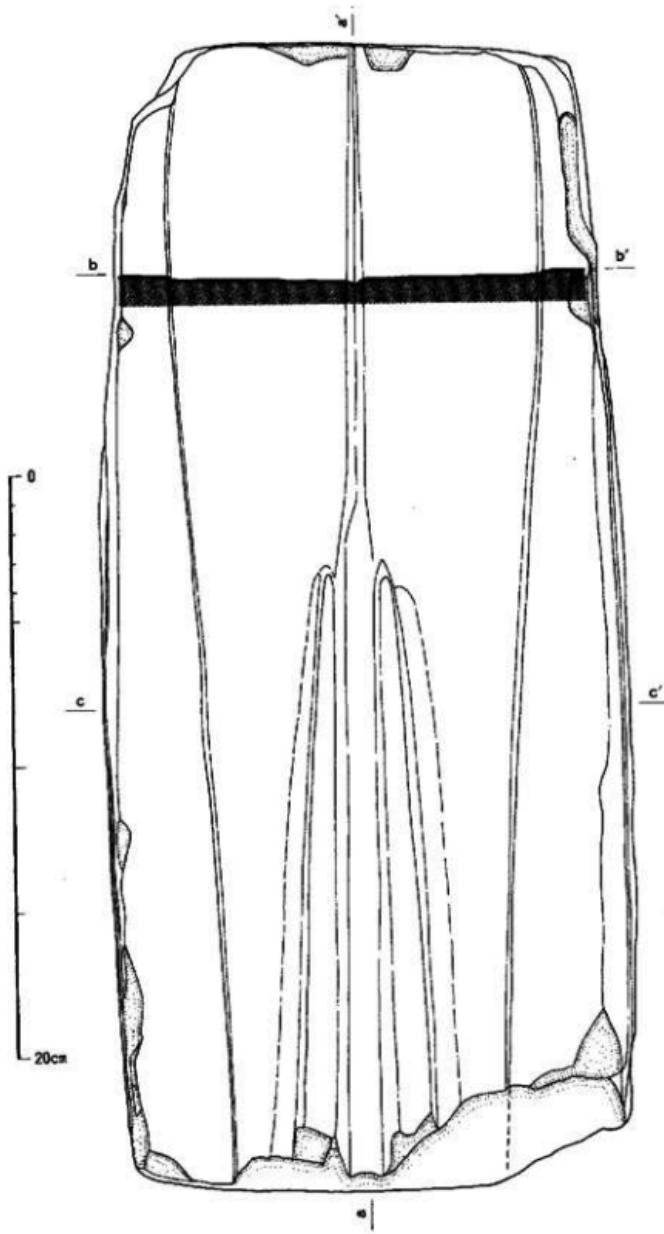
鋒部中央は脊から続く後の左右を幅0.9~0.2cmほど深く彫っている（b-b'断面）。鋒先端部はそのまま鋲型先端につながり、そこで幅は約5.2cmである。この型の状態と先端側面に合印がないことから、鋲型先端部は多少切り落とされているかもしれない。

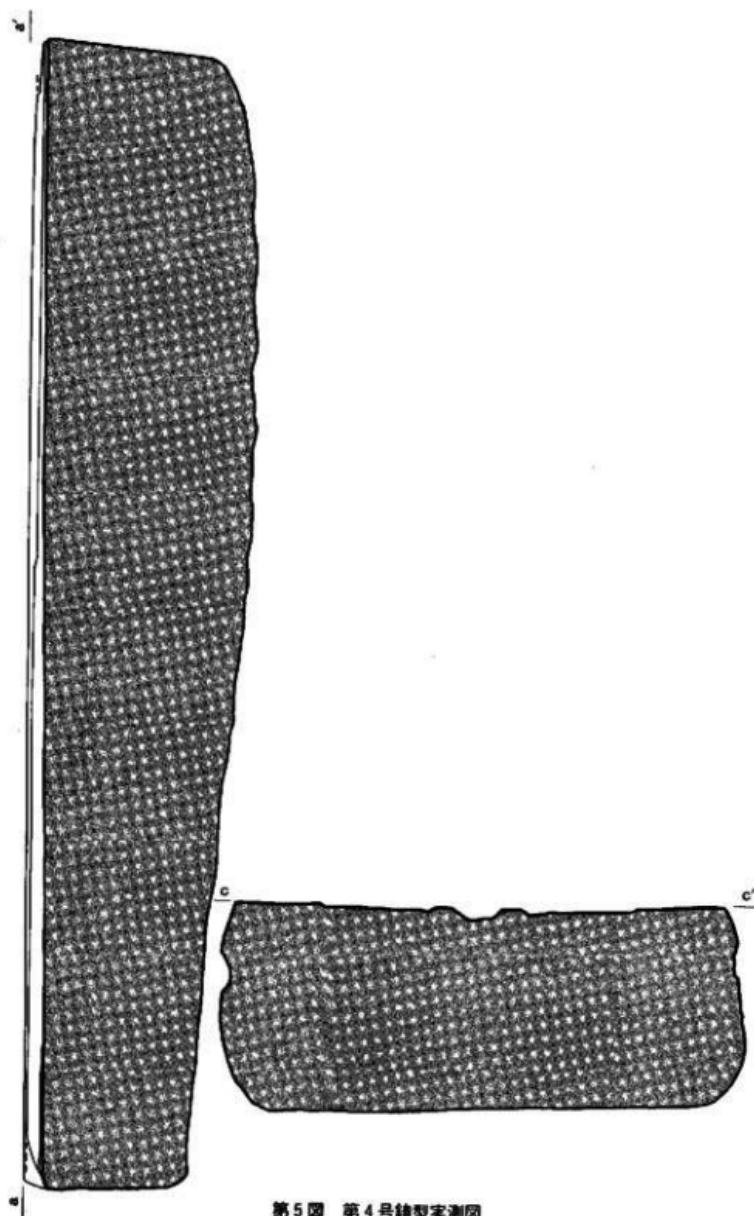
櫛の先端部右外側には型に似た一段低い彫り込み面があり、誤って彫ったように見える。その反対側の左外側には型に平行するかのような断面V字形の細い溝がみえる。型と関係あるかどうかは明らかでない。

(註)北部九州の鋲型のに石材について正式に鑑定を行った例はほとんどない。

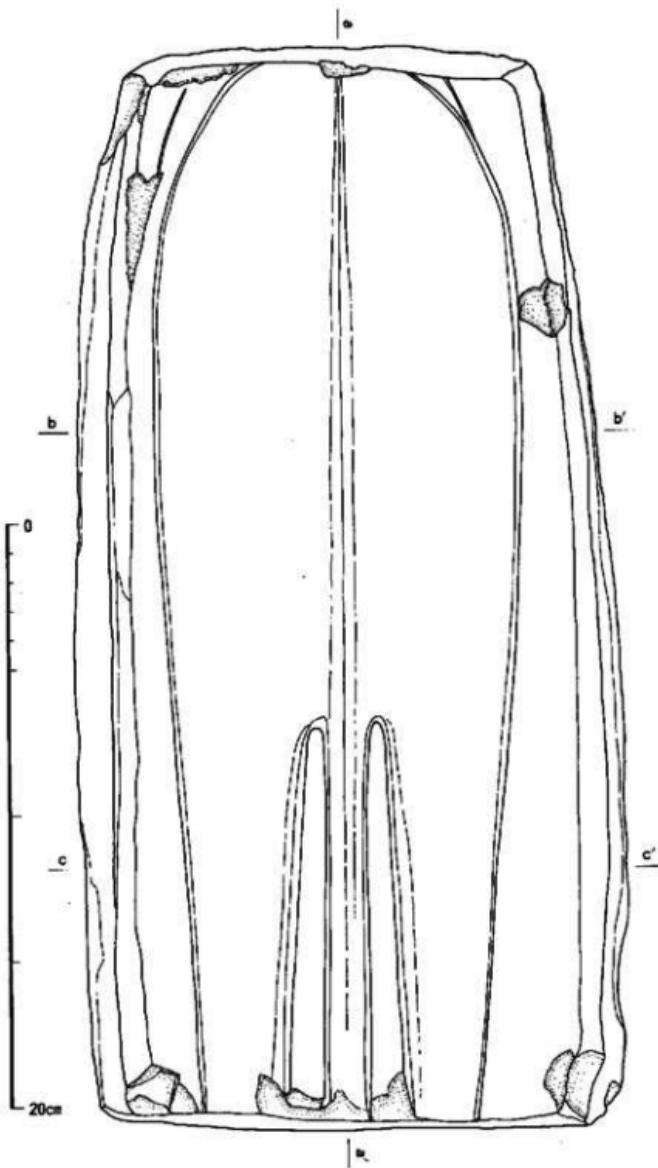
- ・佐賀県鳥栖市安永田遺跡24号住居址出土銅鋲鋲型は顕微鏡観察をした唯一の例で、安賀長石斑岩である（唐木田1985）。
- ・佐賀県千代田町跡遺跡出土の鋼矛（？）鋲型と細形銅劍鋲型は、肉眼観察では火山岩系隕石である（唐木田芳文氏による）（堤1985）。
- ・福岡県春日市大谷遺跡出土の細形鋼劍・中細形鋼矛鋲型は、肉眼観察では片麻岩である（佐土原1979）。
- ・今回の市指定文化財の対象とした鋲型のうち、西南学院大学の唐木田芳文教授に石材を見ていただいた結果は次のとおりである（肉眼観察による）。

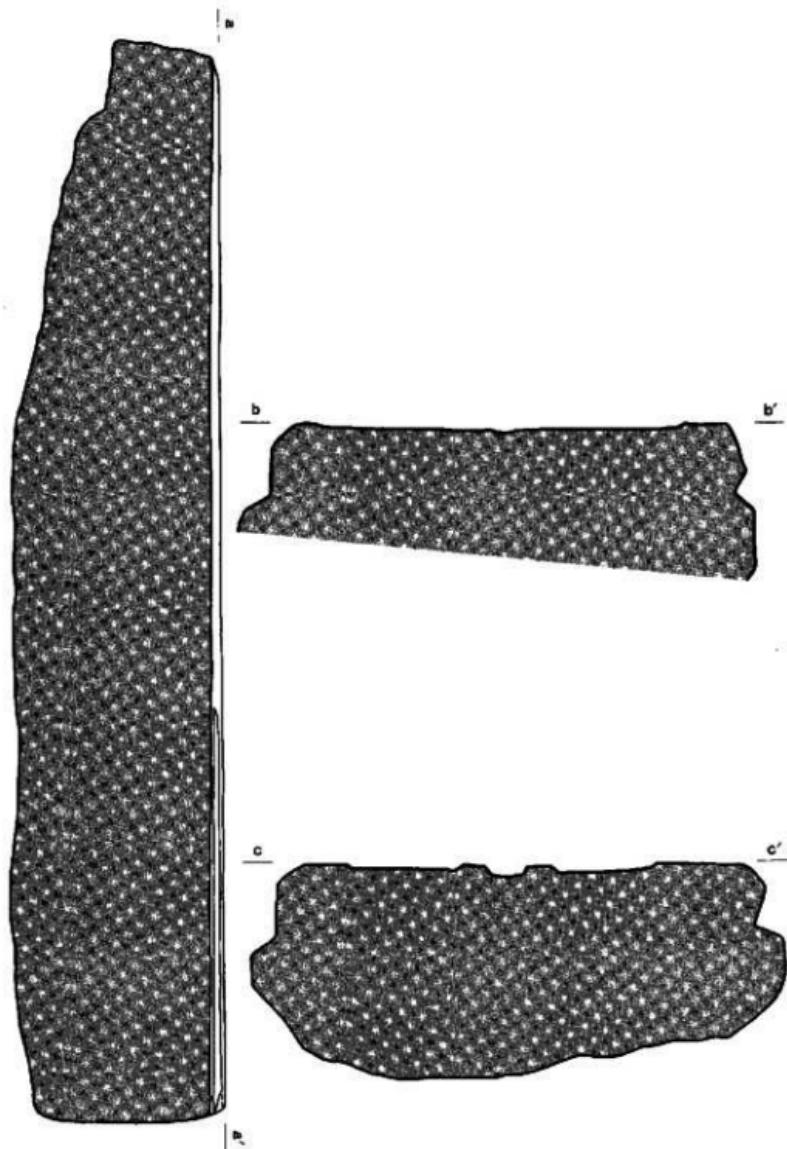
1) 博多区赤堀ノ浦出土銅鋲鋲型（力武1982）	石英-長石斑岩
2) 博多区那珂八幡古墳出土中広形鋼戈鋲型（那珂八幡古墳調査団1978）	石英-長石斑岩
3) 博多区那珂造跡群第8次調査出土種別不明鋲型破片（2片）（下村1987）	石英-長石斑岩
4) 博多区板付遺跡出土広形鋼矛鋲型（後藤・浜1976）	石英-長石斑岩
5) 西区有田遺跡第3次調査（井沢1987）・第81次調査（浜石1986）	
第108次調査（井沢1988）出土鋲型（武器形）合計3片	
6) 西区飯盛遺跡出土銅戈鋲型（本報告）	石英-長石斑岩
7) 博多区板付遺跡出土種別不明鋲型破片（後藤・浜1976）	長石斑岩
8) 佐東区八田出土中細形鋼戈鋲型（下條1977）	細粒斑岩
9) 佐東区八田出土中広形鋼劍鋲型（後藤1982）	細粒斑岩
10) 博多区板付遺跡出土種別不明（戈？）鋲型破片（川崎1980）	細粒酸性火成岩
11) 西区西新町遺跡出土細形鋼劍鋲型（池崎・常松1982）	細粒酸性火成岩
- 素人目には、大谷遺跡の鋲型が赤色で区別できるほかは、いずれも内部が白色の緻密な石材で同じように見える。高宮八幡宮の鋲型もこれらと変わることろがない。





第5圖 第4號鑄型實測圖





第6図 第5号鉢型実測図

5. まとめ

広形銅戈鉄型

広形銅戈鉄型は高宮八幡宮1号鉄型（以後高宮例といふ）のほかに、福岡県の前原町三雲屋敷田（八木1908、高橋1925、水野ら1953）、福岡市東区多田羅大牟田、春日市大南遺跡、佐賀県鳥栖市江島出土の四点がある（表1）。いずれも単面鉄型で、中広形銅戈鉄型までにあった両面銅戈鉄形はない。厚さは中広形銅戈鉄型よりいちじるしく増大している。断面は蒲鉾形をなし、三雲屋敷田例と江島例は裏面の彎曲が強く、高宮・大南両例は裏面と鉄型面とが平行に近い。完形品三例の長さは50cm前後で、高宮例と江島例も戈型の大きさから同様と推定できる。

鉄型面をみると、戈型の鉄先端部の先に湯口となる浅い溝がつく（三雲屋敷田・多田羅大牟田の二例、大南例はこの部分が破損している）。胡はどれも両端が鉄型外に抜けてガス抜き口の役割をはたしている。内の先端部は、中細形・中広形銅戈鉄型と同様、鉄型外に通じて湯口（ガス抜き口にもなりうる）となるもの（多田羅大牟田・大南・江島各例）と、抜けていないもの（三雲屋敷田・高宮両例）とがある。後者は広形銅戈鉄型にのみみられる。

合印は三雲屋敷田と江島例ではなく、高宮例と大南例では基部側側面の中軸線上に鉄型面から垂直に1本の線を刻み、多田羅大牟田例では両端の側面に同様の線を刻んでいる。中細形・中広形銅戈の鉄型にも同じ合印は見えるが、合印のない例の方が多い。朝鮮半島の細形銅戈鉄型とことなり、北部九州の中細形・中広形銅戈鉄型は胡の彫り込みがかならず鉄型外へ通じ、内も鉄型の外へ抜けて、合印の役割をも果たし、中軸線上の合印は補助的とみられる。銅矛・銅劍鉄型にくらべ合印が少ない理由である。広形銅戈鉄型の場合、内が外へ抜けるか否かと合印の有無に対応関係がないのは、合印が実質的には不要になっていたことを物語るのだろう。

戈型の大きさには目立った差はない。胡から上の身部の長さ（中軸線上）は40cm前後で、高宮例も同様であろう。最大幅は12cm前後で、高宮例も12cmをおおきく超えることはあるまい。

表1 広形銅戈鉄型の比較

[単位：cm、+は以上、*は内が鉄型外へ通じるもの]

資料	鉄型			戈								鉄型		
	全长	最大幅	最大厚	身				基部幅	部		基部幅	長	胡長	内長×幅
				全长	最大幅	最小幅	基部幅		基部幅	長				
高宮1号	31.9+	22.6	8.4	23.9+	11.6+	9.0	15.3	2.5	8.8	21.8	21.0	3.8	×3.9	
三雲屋敷田	52.6	18.4	9.6	39.5	11.8	8.4	15.6	1.4	7.4	21.0	16.5	3.8	×2.8	
多田羅大牟田	50.4	20.3	11.3	38.8	12.3	8.8	16.0	1.9	7.0	21.9	18.0	4.5*	×3.5	
小倉大南	47.9	21.8	10.5	40.4	12.0	8.9	16.9	2.0	7.2	21.1	19.4	3.8*	×3.7	
江島	21.2+	21.5	12.6	14.2+	9.3+	8.9	13.5+	2.2	7.3	14.2+	16.2+	3.1*	×3.5	

高宮例は身部の最小幅がもっとも大きいが、基部幅はもっとも小さい。五例のうち三雲屋敷田例がもっとも細いが、これは鋳型自体の幅も狭い。

種の長さはいずれも21cm代だが、樋と脊の基部幅は高宮例が他より広く、脊幅は三雲屋敷田例の倍近くもある。したがって高宮例は樋と脊の幅が広く、援の幅が狭いのが特徴である。湖は鋳型の外に抜けているので長さには鋳型幅に応じて1.5cmづつのバラツキがある。角度は92°~94.5°で高宮例がいちばん小さい。内の幅は最大と最小の間に1cmの差異があり高宮例がもっとも広い。長さは内が鋳型外に抜けない二例は3.8cm、抜ける三例は3.1~4.5cmである。内の文様は三雲屋敷田（直線と麻千文）、大南（直線4本）、江島（重弧文）の三例にある。中広銅戈までには必ずついていた種の綾杉紋はすべてになく無紋である。

高宮例は他の広形銅戈鋳型ととくにことなる点はないが、本例と江島例は焼けていない。

広形銅戈の製品は、福岡県浮羽郡日永遺跡で広形銅矛とともに土坑に埋納されていた1口だけである。これと鋳型との正確な照合はしていないが、その大きさ、形態に差はほとんどない。大分県豊後高田市美和畠出土品（小柳1989）は、鋒部幅が上記の鋳型・製品より小さく、樋に綾杉紋がある。脊は偏平で幅広く高宮例に近い。中広形と広形両方の特徴をもっている。

広形銅矛鋳型

高宮の4点のほかに福岡県春日市皇后峯の二例（第8図、鋒部鋲型を1号、茎～樋部鋳型を2号とする）、前原町の三雲川端と三雲（ともに高橋1925）、二丈町曲り田遺跡、福岡市の板付遺跡（後藤・沢1976）と五十川（中山1929b、福岡市教育委員会1987）、佐賀県唐津市大深田・遺跡（堀川1980）の各例とすでに失われた福岡市井戸例があげられる（表2）。

このうち大深田例のみが両面に矛型を彫り、他はすべて片面鋳型である。片面銅矛鋳型は細形の破片が最近佐賀県神埼町吉野ヶ里遺跡で出土したが、中細形・中広形の例はない。大深田例により、両面銅矛鋳型は細形以降広形まで存続したことが確かである。

片面の広形銅矛鋳型の断面形は蒲鉾形だが、多くは裏面が平坦に近く鋳型面と平行する。厚さは両面鋳型の大深田例がもっとも薄い。片面鋳型では五十川例がもっとも厚く、高宮5号例がもっとも薄い。中広形銅矛鋳型のもっとも厚い安水田例（藤瀬1985）が広形銅矛鋳型の一番薄いものとはほぼ同じである。中細形銅矛鋳型では人谷例（佐土原1979）が厚さ2.4cmである。

合印は皇后峯1号例の鋒側側面の中軸線上に1本、皇后峯2号例の茎部側側面の中軸線上と耳付近の両側面に1本づつ、五十川例の茎部側側面の湯口の両側に1本づつと耳付近の両側面に2~3本づつの線を刻んでいる。これからすれば高宮例は合印のつくべき部分がない（欠ける）のでそれが見えないことがわかる。3号・4号例は鋒側の先端を失っているとおもわれる。

高宮2・4・5号の三例は側面に溝や段を設けている。類例は段がつく五十川例だけで、は

かの広形銅矛鉄型には溝・段はない。その機能は鉄型二つを合わせ緊縛するときクサビをとおすためともいうが確証はない。なお三雲川端例は基部側側面に段をつくっている。

別の種類では、八田出土中細形銅戈鉄型(明治大学蔵)(熊野1989)の側面を溝が全周し、春日市熊野神社後方出土例(中細形戈か矛)(浜田ら1930)と安永田例(中広形矛?) (藤瀬1985)にも両側面と先端部側面を溝がめぐる。前者は断面が「コ」字形で上記の溝とことなる。志賀島勝馬の細形銅劍鉄型は片側面に溝ないし段を設け(森・渡辺1958)、春日市バンジャク出土中広形銅矛鉄型(中山1929a)の破片にも基部側の側面から両側面に統く溝がみえる。兵庫県田能遺跡出土中細形銅劍鉄型にも類似の細い溝がつく(福井1982)。これらの働きは、いろいろ推定されているが、正確にはわからない(中山1972)。

広形銅矛には井尻例のように長大な一枚の鉄型に鑄から鋒先までを彫り込むほかに、鉄型をつなぎ合わせて鉄造することもあった。高宮2号・3号は別の鉄型をつないで一個の広形銅矛を鉄造する方式である。これらはつなぎ目になる端部側面に断面半円形の溝を設けている。同様の溝は皇后峯の両例にもみられる^(註1)。板付例は間の少し上で別の鉄型につなぐのだが、その面には断面コ字形あるいは台形に彫り込んだ溝の底面が残っている。三雲例は極先端の少し下で鉄部側鉄型とつなぐが、この端部側面は下部を階段状に切り込んでいる(第7図)。

これら鉄型接合面の細工の具体的な働きは判断しかねる。断面半円形の溝は同じ凸部と組み合うか、あるいは溝どうしをあわせそこに断面円形の棒状品を通してつなぐのであるか。板付例は凹形に彫り込んで他の鉄型の凸形の部分をはめ、三雲例は階段状の切り込みどうして鉄型をつなぐのかもしれない。皇后峯2号例は上部の両側面に柄穴をあけており、鉄型をつなぐ装置ともいう。同様の穴は三雲川端例にもみえる^(註2)。

高宮4号例も下端側面は折損しているが、こちらがわへ厚みが減じていて、このすこし下あたりで別の鉄型につなぐのかもしれない。高宮5号例の下端側面は整えられていて、切断後整形したのかこの少し下でつないだのかはわからない。

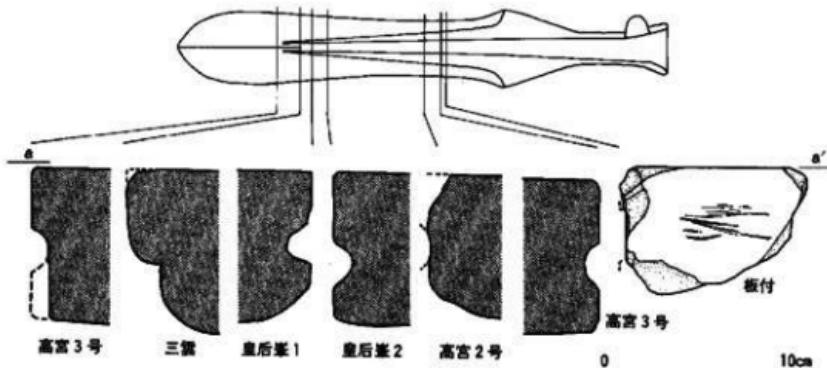
表2 広形銅矛鉄型の比較

(単位cm)

資料	鉄型			矛型			(単位cm)	
	全长	最大幅	最大厚	鉄部		間幅		
				最大幅	最小幅			
高宮2号	22.8+	18.0	9.3	—	9.0-	(13.9)	13.31	
高宮3号	31.0	15.8	8.8	10.3+	9.4	—	28.9+	
高宮4号	39.5+	18.0	7.8	12.9	(9.4)	—	21.1+	
高宮5号	37.1+	18.7	7.5	12.6	9.5	—	13.9+	
皇后峯1号	28.5	17.6	8.0	12.5	10.3-	—	—	
皇后峯2号	57.8	15.9	8.9	10.2+	9.4	13.7	23.4+	
板付	9.8+	(18)	6.6+	—	(9.2-)	(11.6+)	—	
五十川	21.5+	17.1	10.6	—	—	—	—	
三雲	23.7+	18.5	9.5	10.0+	9.2	(10.0+)	17.0+	
三雲川端	33.7+	18.6	9.5	—	—	—	—	
大深田	7.8+	—	7.2	10.0±	—	—	—	
井尻	109	—	—	—	—	—	—	

〔+は以上、-は以下、±は前後、()内は推定〕

志賀島勝馬の細形銅劍鉄型は片側面に溝ないし段を設け(森・渡辺1958)、春日市バンジャク出土中広形銅矛鉄型(中山1929a)の破片にも基部側の側面から両側面に統く溝がみえる。兵庫県田能遺跡出土中細形銅劍鉄型にも類似の細い溝がつく(福井1982)。これらの働きは、いろいろ推定されているが、正確にはわからない(中山1972)。



第7図 広形銅矛鋳型の接合部と断面[a-a']の板が鋳型面(型の彫り込み面)

つなぎ合わせた鋳型で鋳造した広形銅矛は、管見の範囲では数例にすぎないが（後藤1983、黒沢1989）、多数の存在が予測できる。中広形以前の型式にはつなぎ合わせる例は鋳型ではなく、製品にもないらしい。長大な鋳型用石材が入手困難なためかもしれないが、長さ80数cmにもなる中広形に難ぎ合わせ鋳型がみられないで、それがすべての理由ではあるまい。

膨大な量の広形銅矛の製品と鋳型との対比は困難である。矛型の鋒部幅は大深田例が10cm前後でやや狭いが、他は12.5cm前後でそれぞれに大きな差異はなく、広形銅矛としては広いほうに属する。関幅は高宮2号と皇后峯2号両例はほぼひとしく、板付例と三雲例もこれに近いと推定される。高宮3号例の柵の長さは30cmを越え、長い部類になる。鋒の長さは皇后峯1号例は短いが、高宮4号・5号例とも鋒が長いのが特色である。脊に鑄を彫り込んでいるのは高宮5号例と皇后峯2号例で、高宮2・3・4号、皇后峯1号、三雲、板付の六例にはない。

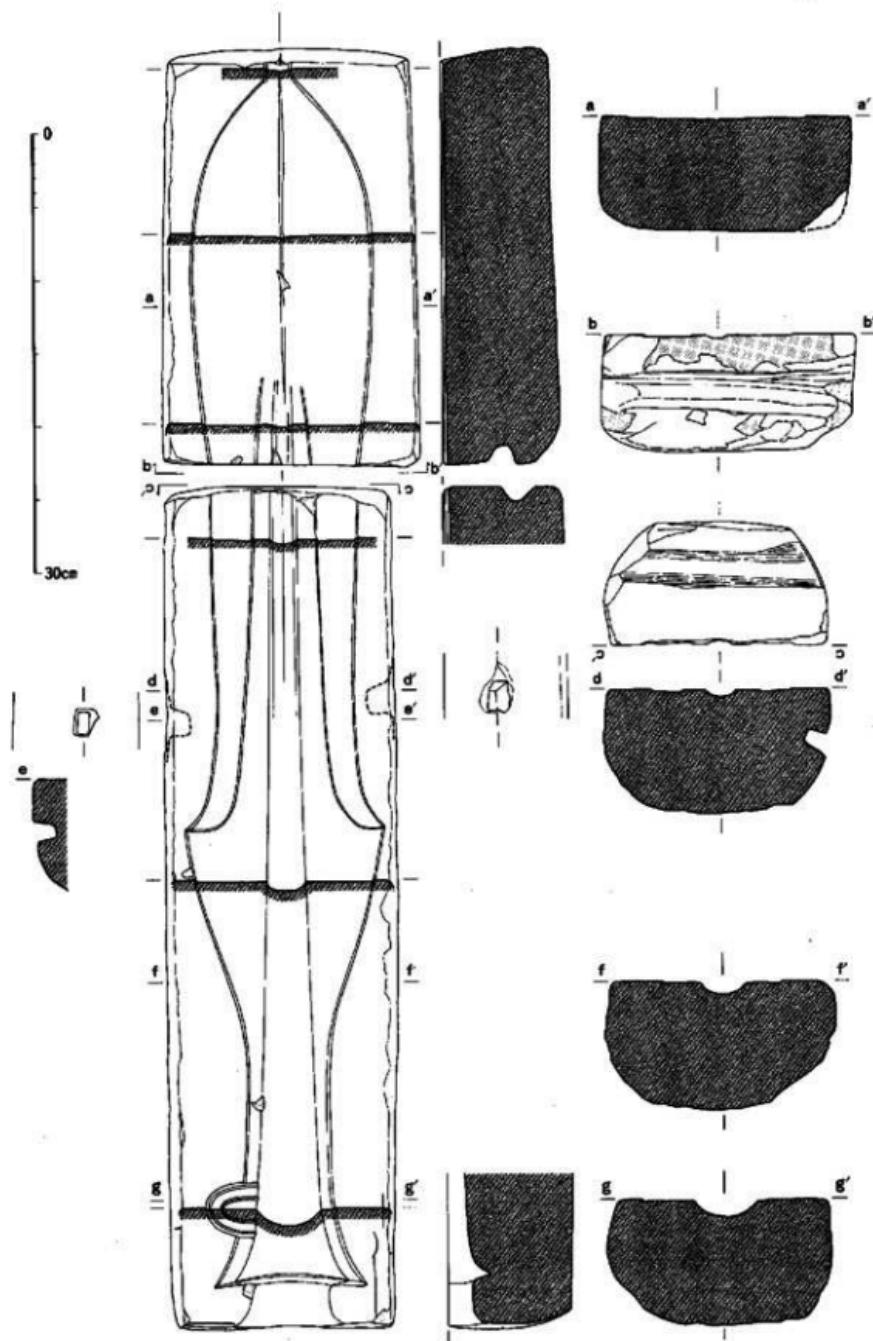
高宮の広形銅矛鋳型は、矛型の鋒や柄が長く、3例が側面に溝や段を作り、また2例は複数の鋳型をつないで用いる（他の2例もそうらしい）。これらは高宮の4例を他の広形銅矛鋳型と区別する特徴で、広形銅戈鋳型ともども一括出土したことを物語っている。ただしいずれも型の部分が焼けておらず、鋳造には用いなかっただらしい。

(註1)皇后峯1・2号例はつなぎ面の溝がずれ、矛型がスムースにつながらず。脊の輪の有無と鋳型の幅がことなるなど、組み合わせて用いる一組の鋳型とは考えられない。なお以前に示した皇后峯の鋳型実測図（後藤1983）は、不十分な観察のため脊の輪を描かなかったので、今回正確な図を第8図にかかげる。

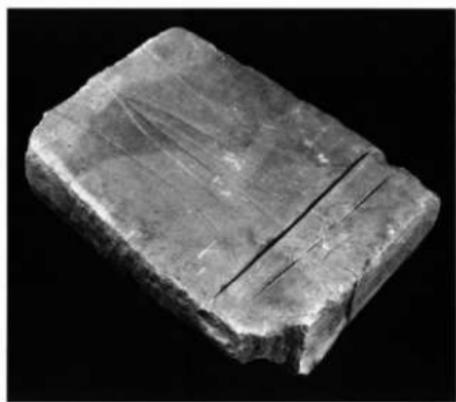
(註2)弥生時代の青銅器鋳造の実際の作業方法は明らかでない。2枚の鋳型を合わせて固定するには、鋳型の側面に板を当てるとか（近藤1974）、針金で縛ると想定され、実験によれば、乾燥した石膏鋳型は麻糸をし、木枠や瓦などを縛り垂直に土に埋めるなどして固定すればよいという（波藤1981、同氏の教示）。複数の鋳型を繋ぐにも、木枠で固定すると推定されているが（中川1972）このときも土に埋めるのが注湯に便利だろう。また湯口を作ったり湯もれを防ぐため、鋳型は粘土で塗り込めただろう。福岡市八田出土の中広形銅戈と中広形銅劍の鋳型に因着していた紋密で均質な赤茶色の土は、鋳造に際して塗り込めた上であろう。

[文献]

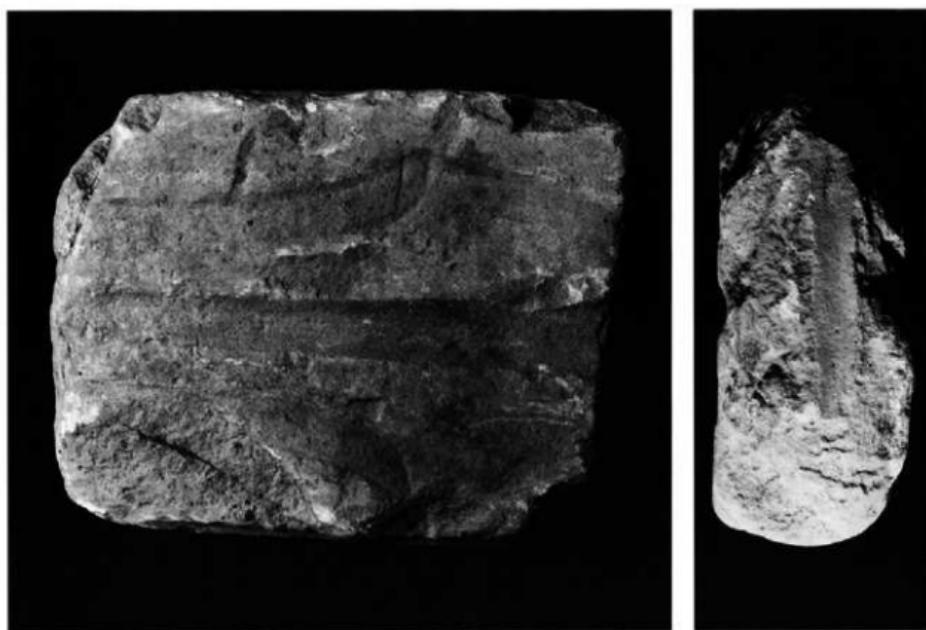
- 池崎謙二・常松幹雄(編) 1982 西新町遺跡、福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集、福岡。
- 井沢洋一(編) 1987 有田・小田部 第8集、福岡市埋蔵文化財調査報告書第155集、福岡。
- (編) 1988 有田・小田部 第9集、福岡市埋蔵文化財調査報告書第173集、福岡。
- 遠藤善代志 1981 銅鐸を造る、季刊荒馬台国 49号、福岡。
- 唐木田芳文 1985 安永田遺跡から出土した石器および原石の岩石について、安永田遺跡、鳥栖市文化財調査報告書第25集、鳥栖。
- 熊野正也 1989 本館所属の銅戈鈎型について、明治大学考古学博物館館報No. 5、東京。
- 黒沢 浩 1989 明大考古学博物館所蔵の武器形青銅器二羽一銅戈と銅矛、明治大学考古学博物館館報No. 5、東京。
- 小柳和宏 1989 農耕社会の祭り、大分県史 先史編Ⅱ、大分県総叢譜、大分。
- 近藤義一 1974 青銅器の製作技術、古代史発掘五大陸文化と青銅器、講談社、東京。
- 後藤直 1982 福岡市八田出土の銅劍鈎型、福岡市立歴史資料館研究報告 第6集、福岡。
- 1983 青銅種姓の考古資料(三)、福岡市立歴史資料館研究報告 第7集、福岡。
- 沢 皇臣(編) 1976 板付一市営住宅建設に伴う発掘調査報告書1971~1974年、福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集、福岡。
- 佐上原逸男(編) 1979 大谷遺跡、春日市文化財調査報告書第5集、春日。
- 下條信行 1977 考古学・柏原平野、福岡市立歴史資料館研究報告 第1集、福岡。
- 下村智(編) 1987 那珂河遺跡ー那珂河遺跡群第8次調査の報告、福岡市埋蔵文化財調査報告書第153集、福岡。
- 高橋健自 1914 銅鉄鋤劍考(四)、考古学雑誌第7巻第3号、東京。
- 1925 銅鉄鋤劍の研究、東京。
- 堤 安信(編) 1985 施道林I・千代田文化財調査報告書第3集、千代田町。
- 中口裕 1972 銅の考古学、雄山閣、東京。
- 那珂河古墳調査団 1978 福岡市那珂河八幡古墳、九州考古学No.53、福岡。
- 中山平次郎 1924 井戸尻の弥生式遺跡、考古学雑誌第14巻第12号、東京。
- 1927 須玖岡本の遺物、考古学雑誌第17巻第8号、東京。
- 1929a 須玖岡本の鏡片研究(三)、考古学雑誌第19巻第2号、東京。
- 1929b 銅鏡鉢鏡の新資料、史前学雑誌第1巻第3号、東京。
- 二宮忠司(編) 1979 三宅魔寺発掘調査報告書、福岡市埋蔵文化財調査報告書第50集、福岡。
- 浜石哲也(編) 1986 有田遺跡ー第81次調査、福岡市埋蔵文化財調査報告書第129集、福岡。
- 浜田耕作ら 1930 筑前須玖史前遺跡の研究、京都帝國大学文学部考古学研究報告第1冊、京都。
- 平田定幸・中村昇平(編) 1968 須玖唐杵遺跡、春日市文化財調査報告書第19集、春日。
- 福井英治(編) 1982 田能遺跡発掘調査報告書、尼崎市文化財調査報告書第15集、尼崎。
- 福岡市教育委員会 1971 福岡市埋蔵文化財遺跡地名表 総集編、福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集、福岡。
- 1987 福岡市の文化財ー考古資料一、福岡。
- 藤瀬恵博(編) 1985 安永田遺跡、鳥栖市文化財調査報告書第25集、鳥栖。
- 舟山良一(編) 1983 仲島遺跡Ⅱ、大野城市文化財調査報告書第10集、大野城。
- 福川義英(編) 1980 帕崎遺跡群、佐賀県埋蔵文化財調査報告書第53集、佐賀。
- 丸山康晴(編) 1980a 赤手井遺跡、春日市文化財調査報告書第6集、春日。
- (編) 1980b 須玖・岡本遺跡、春日市文化財調査報告書第7集、春日。
- 平田定幸(編) 1987 須玖水田遺跡、春日市文化財調査報告書第18集、春日。
- 水野清一・橋口隆康・岡崎敬 1953 対馬、東亞考古学叢刊乙種第六冊、東亞考古学会、京都。
- 森 貞次郎・渡辺正気 1958 福岡県志賀島発見の細形鏡劍鉢范、九州考古学No. 3・4、福岡。
- 森 弘 1914 福岡縣下に於ける銅鏡鏡面及其鑄型に就て、筑紫史談 第貳集、福岡。
- 1915 銅鉄劍鏡同鏡型の発見、筑紫史談 第四集、福岡。
- 森本六蔵 1931 広鉋鋼鉗鉢范、考古学 第2巻第1号、東京。
- 1933 吻はれた青銅器鏡范、考古学 第4巻第10号、東京。
- 八木栄三郎 1908 南筑の古物遺跡(三)、西院学雑誌 第14巻第7号、東京。
- 山口謙治(編) 1981 板付一板付金鉢建設に伴う発掘調査報告書ー、福岡市埋蔵文化財調査報告書第73集、福岡。
- 山崎純男(編) 1980 板付遺跡調査概報ー板付周辺遺跡調査報告書(5)1977~1978年度ー、福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集、福岡。
- (編) 1987 野多目遺跡群、福岡市埋蔵文化財調査報告書第159集、福岡。
- 横山邦徳(編) 1990 公開関係埋蔵文化財発表報告書I・福岡市埋蔵文化財調査報告書第220集、福岡。
- 力武卓治 1982 田中遺跡群赤堀ノ浦遺跡出土の銅鏡鏡型について、考古学ジャーナル1982年11月号、東京。
- 常松幹雄(編) 1989 野口B遺跡、福岡市埋蔵文化財調査報告書第211集、福岡。



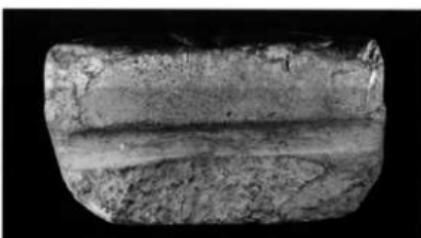
第8図 皇后墓出土広形銅矛鋤型実測図



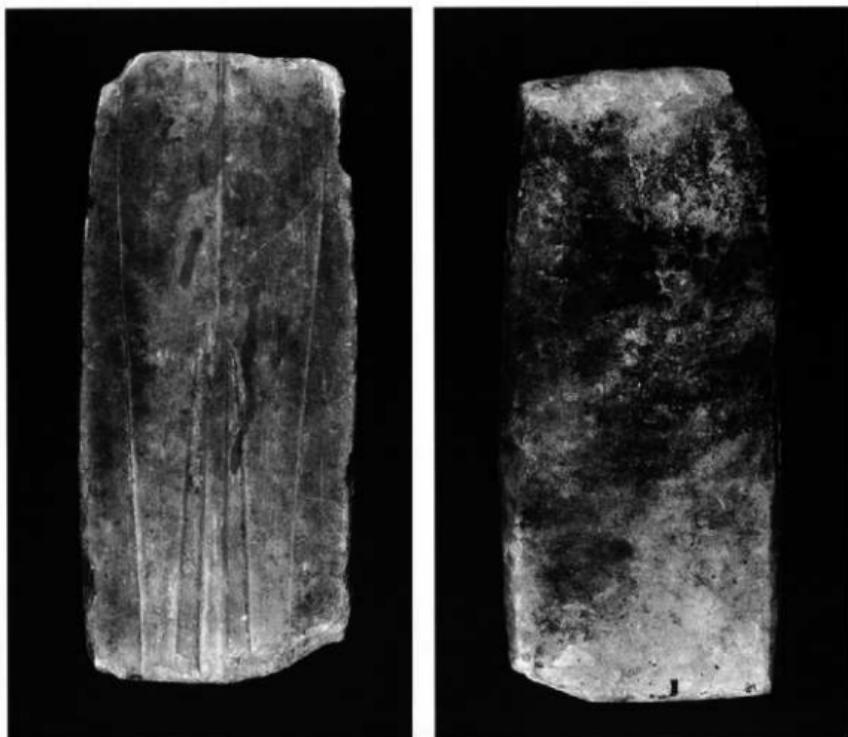
第1号鉄型（広形銅戈鉄型）



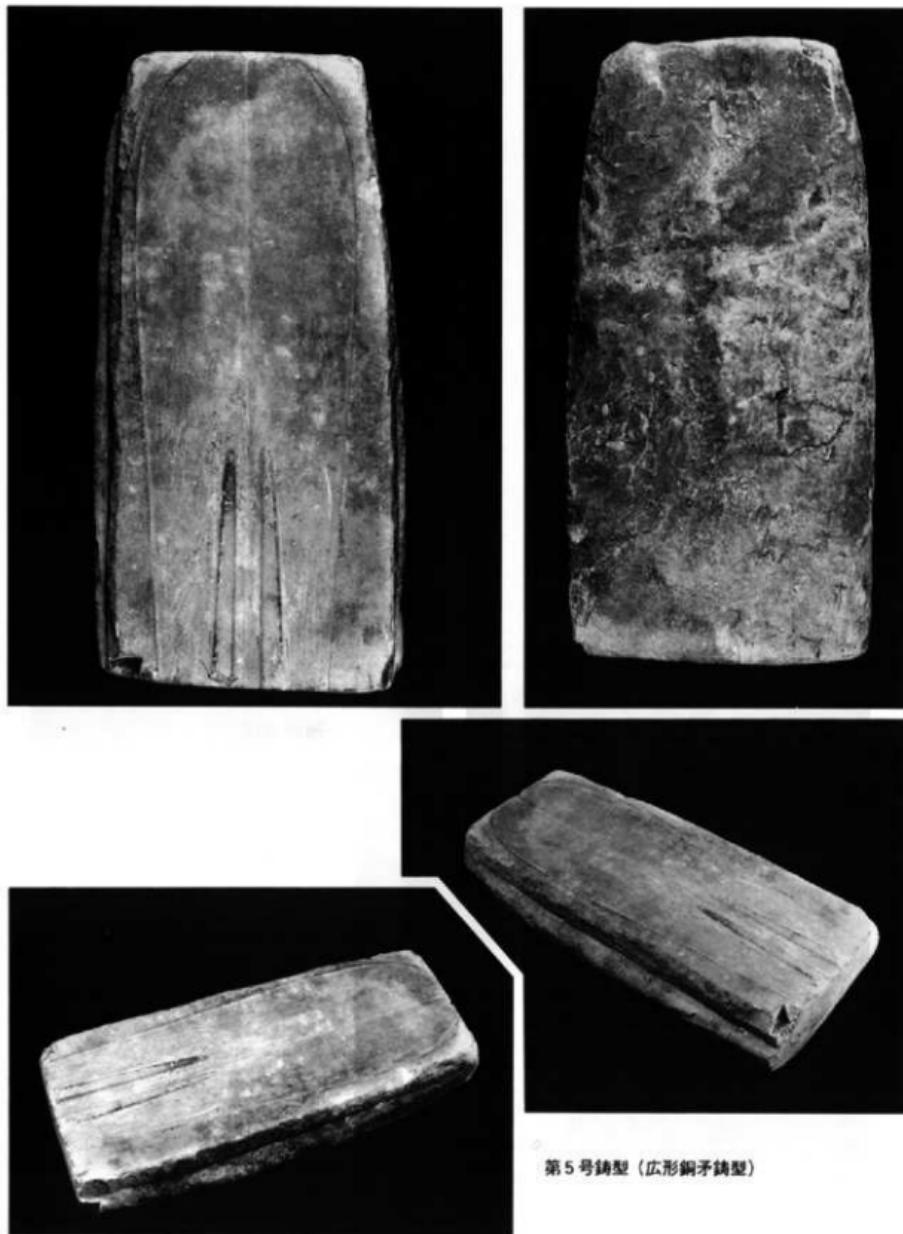
第2号鉄型（広形銅矛鉄型）



第3号铸型（広形銅矛铸型）



第4号鉄型（広形銅矛鉄型）



第5号鉄型（広形銅矛鉄型）

あとがき

席田遺跡群の報告書は今回で6冊目になり、赤穂ノ浦遺跡を残すだけになりました。順序が逆になりましたが、赤穂ノ浦遺跡の銅鐸鉄型との関連から高宮八幡宮所蔵鉄型の調査報告も合本することにしました。

この高宮八幡宮の報告は、福岡市埋蔵文化財センターの後藤直所長にお願いしました。奴國の青銅器製作、あるいは青銅器祭祀を究明する重要な手がかりになると思われます。

発掘調査からすでに4年が経過し、その成果も風化してしまった感じがします。できるだけ早く公表するという報告書の責務を果たせなかったことを大いに反省しています。

この秋にはいよいよ東平尾運動公園で「とびうめ団体」の開会式が行われます。これまで数多くの遺跡を発掘してきましたが、当初より発掘作業員としてご協力いただき、人一倍開会式を楽しみにされていた間政子さんは、ご家族の手厚い看病もむなしく亡くなられました。ご冥福をお祈りいたします。

福岡市博多区

席田遺跡群

(VI)

大谷遺跡2・3次

新立表古墳2・3号墳

高宮八幡宮所蔵鉄型の調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告第218集

1990年3月31日発行

編集発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目1-8
電話(福岡)711-4667

印 刷 ダイヤモンド印刷

